キノコプレス
www.lifestudies.org/kinokopress/

地球の箱船を求めて

第三話　暴走する現代科学技術文明

生野以久男

プロローグ

人類にとって悲劇的だったことは、第二次世界大戦の終結を新しい世界のはじまりとできなかったことである。歴史を単なる時間の流れとしか理解できず、なんらの教訓も学び取ることの出来ない男たちにとって、ひとつの対立の解決は単に新たな対立を生みだすひとつの契機にすぎない。

ファシズムのムッソリーニ、ナチズムのヒットラー、軍国主義の東条が葬り去られ、平和な世界の到来を思わせた瞬間に、地下深く隠れていた芽が地面に突き出るように、新たな覇権を求めて東西の対立が芽生え、世界は冷戦構造に支配される。平和憲法を掲げた占領下の日本も否応なく冷戦構造に組み込まれ、翻弄されていった。

覇権の確保をめざす行動の根底にあるものは異端への嫌悪感であり、手段を選ばない異端排除の思想にほかならない。

理性は短命で、ドグマは情念の炎を燃やしつづけ、永遠に生き永らえるのだ。

第二次世界大戦は人類にとって極めて奇異な戦争であった。この戦争よって科学技術が一段と進展し、原子力爆弾（原爆）を生み出して終結するが、大量の犠牲者を出しただけで、戦勝国にも、また敗戦国にもなにもうるところのないものであった。ただ終結間際に米国が手にした原爆は科学技術を変貌させ、これまで近代科学技術から現代科学技術へと質的転換していく。そしてこの現代科学技術文明がコンピュータを駆使して一層の巨大化高度化大量化を目指して走り出し、世界を大きく変えていくこととなった。

第一章

1

一九六〇年六月一五日、朝から空一面を厚い雲が覆っていた。時折、厚い雲が薄れ、雲間から薄日が漏れる。

兼尾信二郎はインクの匂いがする刷り上りのビラを抱え、地下鉄の駅へ急いだ。

信号が変わる前に横断しようと小走りで交差点へ近づく。右足を交差点に踏み入れようとしたとき、信号が黄色から赤に変わった。

彼は肩で息をし、苛々しながら、信号が変わるのを待った。汗が噴き出す。坊主頭からニキビが吹き出ている額に向かって汗がしたたり落ちる。彼は反射的に、インクで黒く汚れた骨が浮き出た手の甲で額を拭った。

十字路の斜向かいにある交番の時計が一〇時を指している。森島哲雄の面長の顔が浮かんだ。

「兼尾、明日まで五百枚刷ってくれないか。これが原稿だ」

森島が本の間に挟んでいたビラの原稿を取りだすと、机の彼に差し出した。

「明日までですか、先生」

彼は机から立ち上がる。長身の森島を見上げた。成長期の栄養不足か、同じ年ごろに比べ、背が低い。彼は立ち上がっても、森島と話すとき、どうしても見上げるような格好になってしまうのだ。

「先生はよせ。明日の一〇時、本郷三丁目の地下鉄改札口に頼む」

信二郎は東北地方の養護施設で義務教育の中学を了えると、上京して小さな印刷会社に就職した。印刷会社の社長は施設の所長と同郷だった。幼年のころ苦労した社長は所長の頼みを快く引き受け、これまで何回も施設を出て働く少年たちの面倒を見ていた。

上京して一年が過ぎ、都会の生活にも慣れると、彼は四月から定時制高校に通いはじめた。

森島も四月から彼の通う定時制高校で臨時の社会科講師をはじめたばかりだった。同じ新人ということもあって、彼は森島になんとなく親しみを覚えた。

一見、会う人に細め目の奥にいつもどこか暗い悲しみが漂っているような感じを与えるが、森島は講義をはじめると人が変わったように生徒相手に熱っぽく語りかける。そんな森島に魅かれ、授業がある日には彼はいつも一番前に席を取った。

森島は学部を出たばかりで、まだ大学院に席があるうえ、いくつかアルバイトを掛け持ちしているらしく、授業に遅れることも珍しくなかった。

その日も始業のベルが鳴り終わってから、かなりたったころ、痩せた長身をやや折り曲げてあたふたと教室に入ってきた。

肩で大きく息を吸うと、森島は長く伸びた頭髪を無造作にかき上げる。額に汗が光っている。ひょろ長い体躯に載っている細面の眉間に些か神経質そうな縦じわが刻まれていた。

授業では時事問題を取り上げ、その背景や問題点を説明することが多かった。

マスコミではこのところ連日日米安保条約の改定を巡る論議で沸騰していた。そんななかで始まった新学期では、日米安保が取り上げられること

が多かった。取り上げられる論点は冷戦緩和へと動き出している国際社会の動向や、そのなかで日米安保条約の改定へと進む岸政権の動きから新日米安保条約の問題点へと拡がっていく。

彼は森島の授業に突然目の前で槍を突きつけられたような衝撃を感じた。日米安保条約改定問題についての議論もはじめて聞くものであった。だがそれよりも早口で熱っぽく語る森島が堪らなく魅力的だった。彼は薄い唇を僅かに開けた顔を森島に向け、ノートも取るのも忘れて聞きほれた。

一九四五（昭和二〇）年八月一五日、日本が無条件降伏し、第二次世界大戦が終わった。漸く世界に平和が戻ってきたのも束の間、戦勝国の米国とソ連とが対立し、瞬く間に東側（ソ連、東欧諸国など）と西側（米国、西欧諸国など）が冷戦状態に陥る。

終戦五年目、一九五〇（昭和二五）年六月二五日、朝鮮半島において戦争が勃発する。朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）が韓国を急襲。社会主義陣営のソ連、中国が北朝鮮を、米国中心の国連軍が韓国を支援して、戦いは三年余続いて休戦となる。

この戦争はまさしく東西冷戦下の代理戦争であったが、その最中の一九五一年、米国・サンフランシスコで関係国による講和会議が開催され、対日平和条約が調印された。これにより第二次世界大戦が一応終結したが、ソ連のボイコットなどがあり、西側との単独講和となった。全面講和とはいかなかったことが米国一辺倒を招き、日本は内外にしこりを残すことになる。

講和成立にともない、日米間で日米安全保障条約（日米安保条約）が新たに締結された。これによって、米軍の日本本土駐留など、米国による日本基地化が正式に認められることとなる。これに対して、日本国内では「全面講和、中立堅持、米軍駐留反対」を主張する左派勢力が激しい批判を展開した。ことに、日米安保条約に対しては米国との軍事的関係をことさら深め、冷戦下においていたずらに国際緊張を高めるものとして激しい論議が戦わされた。

このような背景のもとで締結された日米安保条約が一〇年を経て、一九六〇年、改定期を迎えたのだ。この機に、これまでの対米従属的な日米安保体制を双務的なものに変え、対等な関係にしたいという思いを抱く岸信介が政権の座につくと、改定を巡る議論が一段と沸騰していく。

前年の一九五九年から左右両派の対立が次第にエスカレートしていき、国内は騒然としはじめた。いたるところで反対デモや集会がもたれ、一九五九年三月には安保改定阻止国民会議が発足、左右の両者は対決の様相を強める。九月に入ると、国会で日米安保改定の論争が始まった。

一方、国際社会は冷戦緩和へと動き出していた。スターリンの死後、一九五六年二月のソ連共産党第二〇回大会でのスターリン批判を機に、東ドイツ、ポーランド、ハンガリーで相次ぎ改革を求める声が高まった。ソ連はこれらの反ソ運動を戦車で圧殺するものの、東西の冷戦構造が雪解けへと進み出す。

一九五八年三月、ソ連でフルシチョフ第一書記が首相を兼任、指導体制が確立すると、翌年九月には、米国を訪問し、国連総会で全面軍縮を提案する。アイゼンハワー米大統領との会談では、両国の関係改善と平和共存を呼びかけ、熾烈な冷戦から平和共存への転換を図る。その一方、米ソ間での冷戦緩和の動きにかかわらず、中ソ間は逆に悪化していく。

その間、日米間で日米安保条約および行政協定改定の交渉が続けられ、一年三ヵ月におよぶ交渉の末ようやく妥結を見る。

岸首相は一九六〇年一月六日反対デモに見送られて渡米し、同月一九日、ワシントンで日米新安保条約の調印を行なう。すかさずソ連が対日覚書で新日米安保条約を非難し、外国軍隊が撤退しないかぎり歯舞色丹は引き渡さないと通告する。

国内の反対派は調印を機に、日米安保新条約の国会承認阻止へと戦術を変える。

一九六〇年二月五日、条約が批准のために国会に提出され、これを巡る審議が始まった。国会では新安保条約における「守るべき『極東の範囲』と米軍事行使の『事前協議』条項」をめぐて与野党が激しい論戦を展開した。野党はとくに、米国が極東で他国と戦争となった場合、米軍基地を抱える日本が否応無しに戦争に巻き込まれる危険性がある点を問題にした。

朝鮮戦争が休戦し、戦闘状態が終わったとはいえ、米ソ冷戦構造下で、日本は米国陣営に組み込まれ、ソ連のみならず中華人民共和国をも「仮想敵国」とみなしているだけに、極東での戦争は現実味を帯びていた。ソ連の人工衛星打ち上げ成功の前に、明日にも到来するミサイル時代における軍事ブロック戦略は意味がないとし、日本社会党は極力非武装中立化を主張する。

新安保条約の是非をめぐる国論が賛成派反対派と二分され沸騰していく。賛成派は冷戦の緩和は東西間の力の均衡によるとの認識のもとに、日米安保体制をより充実させることが日本を守り世界平和に寄与すると主張する。これに対して、反対派は水爆搭載のＩＣＢＭ（大陸間弾道弾）などの究極兵器が開発されて世界戦争が不可能となったとの認識に立ち、日米安保条約を破棄し、中立主義への道こそ世界平和に寄与し日本の安全を保つ方法だと訴える。米軍が日本を基地化し、長期のわたり戦略的に利用しうると する日米安保体制は日本が戦争に巻き込まれる原因となり、危険この上ないというのだ。

議論が沸騰するなか、全学連など学生や若者たちの反対行動が次第にエスカレートした。国会請願デモや大衆集会が次第に激しさを加えていった。

四月一五日、全学連の国会請願デモで警官と衝突。四月二六日の国会請願デモには八万人が参加する。

この時期、隣国韓国で時の李承晩政権打倒デモが起こり、四月二七日に李承晩を辞任に追い込む出来事があった。このニュースに刺激され、反対運動が一層盛り上がる。翌五月五日にはソ連が領空侵犯の米軍Ｕ２型偵察機を撃墜した。これは米ソ対立にもとで、日本国民にいつでも戦争に巻き込まれるおそれのあることを実感させた。

五月一四日、一〇万人国会請願デモが行なわれた。これに対して、五月一九日、衆院は会期延長を強行採決し、翌二〇日未明、警官隊五〇〇人を導入して新日米安保条約を自民単独で強行可決する。

この強行採決は民主主義の原則を踏みにじり、戦後民主主義を否定する暴挙として国民に衝撃を与えた。「民主主義の危機」と受け取られ、全国的に大衆運動の高揚をもたらす。同日（五月二〇日午後、一〇万人の請願デモ。五月二六日、一五万人国会請願デモ。六月四日、総評系五六〇万人参加第一次実力行使。六月一一日、二〇〇万人の統一行動。

六月一五日には第二次実力行使として第一八次統一行動が計画され、全国的な規模のストが行なわれることになっていた（後日、国民会議の発表によるとこれには主要単産一一一組合、五八一万人が参加した）。

六月一五日の前日。その日も始業時間がかなり過ぎても森島が現れなかっ

た。彼はそのうちいつものようにあたふたと駆け込んでくるものと思っていた。だがいくら待っても森島は現れなかった。机にうつ伏せになって眠っていた受講生も待ちくたびれて一人そしてまた一人と教室を出ていく。それでも彼は待った。とうとう彼一人になった。薄暗い照明が薄汚れた壁を一層汚く見える。次第に、彼はなにかしらみすぼらしい気分に襲われていく。そんな気分から抜け出るように彼は勢いよく立ち上がった。

後ろを振り返り誰もいないのを確かめると、彼は戸口に向かった。教室から出ようとしたとき、森島が息を切らして入ってきた。

「ああ、みんな帰ったか。印刷屋を回ってきたので遅れてしまった」

「印刷？　ガリ版ならやってあげます」

「きみが……」

彼は教材用の印刷だと思って、自分で買って出たのだった。それがアジビラだったが、いまさら引けなかった。

信二郎はビラを小脇に抱え、小走りで交差点を渡り、駅への路地を入っていく。待ち合わせの改札口の前のホールには人影がなかった。約束の時間を五分過ぎている。時折乗客が改札口を通り抜けていく。森島は行ってしまったのだろうか。そんなはずはない。森島はいつものように遅れているにちがいないと思い、彼は待った。

一〇分過ぎても森島は姿を見せなかった。彼はビラを持て余し、途方に暮れて改札口の前に突っ立っていた。刷る上げたばかりのビラから立ち上るインクがいやに臭う。

彼は改札口の脇の柵の上にビラの包みを載せた。電車が到着したときだけ集札に改札口に現れる制服を着た駅員がうさん臭そうな視線を向ける。どうすればいいのか分からなかった。ビラの包みのうえに片手をかけ、彼はひたすら森島が現れるのを待った。

「兼尾さん？」

女の声がした。振り向くと、いつ現れたのか、お下げ髪のすらりとした高校生らしい女の子が背の低い彼を見下ろすような格好で立っていた。面長の顔に似付かわしくない大きなきらきら光る目。つんと澄ました感じの幾分上向いた鼻。そして強く自己主張しいる一文字の薄い唇。

一度も会ったことのない顔だった。一瞬、森島の妹かと思った。だが森島とは全然別の固い雰囲気だった。

「それ、ビラでしょ。ありがとう」

女の子はビラの包みに手を伸ばし、片手で軽々と持つと、ひらりと身をかわして改札口をすり抜けていく。彼は唖然として水色のカーディガンの後ろ姿を見送った。女の子の後ろ姿は一瞬のうちに地下ホームへの階段に消えた。

彼は呆気に取られて、改札口のそばに立ちつくしたまま、女の子が消えた階段を見ていた。いくら待っても女の子は戻ってこなかった。

ようやくわれに返って、彼は見ず知らずの女の子にビラを奪われたことの重大さに気付く。森島が現れたらなんと説明すればいいのか。後を追い、ビラを取り戻さなければと思った。だがここを動けば、森島が来たとき困る。ここで待ったいなければ、待ち合わせの約束を守らないことになってしまう。彼は迷った。

彼は迷いながら、白いブラウスに水色のカーディガンの女の子を思い浮かべ、改札口の前で右往左往した。電車が到着するたびに降りてきた乗客が改札口をすり抜け、急ぎ足で彼の横を通り抜けていく。彼は森島の姿を求めて彷徨する。

よれよれのレインコートを着た高校生らしい男の子が改札口を通り抜けた。地下ホームへの階段のところで振り向いた。彼は視線を感じて男の子に目を向ける。

背が低くずんぐりとした体躯の彼のコンプレックスをいたく刺激するほど、男の子は細身ですらりと背が高い。整った顔立ちなのになぜか左の目が右の目に比べて心持ちひとまわり小さい。不揃いの丸い目が青白い顔のなかでなにか問いかけているような尖った光を放っている。

その目を見たとき、彼は一瞬、まえにどこかで会ったことがあるような気がした。彼は一心に記憶を辿ったが、そんなことはある筈はなかった。

男の子は彼の視線を感じると直ぐ踵を返し、レインコートの裾を翻させて階段の下へ消えた。彼は再び改札口を通り抜ける乗降客に視線を移す。

突然、彼の脳裏にビラを持ち去った女の子の面影が鮮明に蘇った。これに尖った光を放つ左右大きさの違う目をもった男の子の顔が重なった。つぎの瞬間、彼は訳もわからず男の子の後を追うように改札口をすり抜けていた。

2

天井に一直線に並んだ蛍光灯が無機質の青白い光を発して、地下ホームに溢れた学生風の乗客を照らしていた。

耕一郎はゆっくり身体を回して青白い光が照らす暗闇の隅々まで見渡す。どこにも知った顔がないことを確かめると、ひんやりとした空気が漂う薄暗い空洞のなかのホームの最先端を目指してゆっくりした歩調で歩き出す。

彼は頭を左右に激しく振り、脳裏の映像を何度も払い落とそうとした。だがどうしたわけか、ニキビ面の男の子が脳裏に妙に絡みついて離れようとしないのだ。

轟音を引っさげ、ホームに電車が突入してきた。彼は乗降客の群れに紛れて車の中に押し込まれていく。

彼は扉の前に立ち、閉じた扉のガラス越しにホームに目をやった。さっき改札口で見かけた同じ年頃の男の子が階段を駆け降り、ホームを走ってくるのが見えた。電車は動きだし、ホームの灯が後ろに消えれいく。暗闇が広がり、ガラスに自分の顔が映し出された。ニキビ面の男の子が重なった。

彼とは全く異質の顔立ちだった。ニキビ面の角張った顔に長い細い目と大きな口が横の伸び、中央に大きな鼻があぐらをかいている。頭には伸ばし始めたばかりでようやくなびき出している頭髪が覆っていた。短躯のせいか顔だけが異様に大きく見える。

彼は自分とは似ても似付かわしくない異質な顔立ちに自分とは無縁な人間だと結論付け、脳裏から追い出そうと試みる。だが細い目から注がれた視線がなぜか脳裏のひだに執拗に絡みついて離れようとしない。気になって仕方がなかった。忘れたくても忘れることができない面構えだった。それはどこかで見たことがある異形な面構えだった。何度も思い出そうと試みているうちに、異質なものと思えた顔立ちもいつの間にか次第に馴染みだしていた。

どこかで会ったのか、彼はひたすら記憶を辿り、異形の面構えが誰であったのか思い出そうともがく。

「よお……」

不意に耳元で声がした。振り向くと同級生の佐伯が立っていた。彼は友人にはじめて見るような目を向けた。

「大丈夫か」

虚ろな目の彼に佐伯が心配そうに白い顔を寄せてきた。

「別に、なんでもない。で、どこで下りる?」

「日比谷公園に行くんじゃなかったのか」

佐伯が詰問調で言う。

彼は昨日、佐伯と話し合い、自分たちもなんらかの行動を起こして日米新安保条約反対の意思を示そうと誓った。まず日比谷公園で開れる都労連などの抗議集会に参加して、集会後に予定されているデモに加わり、国会へ請願に行くことを決めていた。

彼はそのことを忘れていたわけではなかった。ただ彼を追うようにホームへの階段を駆け降りてきた同じ年頃の男の子のことが気になって仕方がなかった。まえにどこかで会ったことがあるのか、彼はしきりに記憶を呼び戻そうとしていたのだ。

「双子はすぐ分かるよな」

幾分興奮気味の顔をした佐伯は返事せずに、半ば軽蔑に似た不審な色を浮かべた目を向ける。

「……実はオレに双子の弟がいるらしいんだ」

彼は友人の視線を避けるように目を伏せ、低い声でぼそっと言う。

「え?……」

「すぐ分かるよな」

「うん……」

彼は大造りな顔付きの男の子を思い浮かべながら、しげしげと友人の目を見た。不審の色はあったが、軽蔑の色はなかった。

「……全然似ていないこともあるのかなあ」

「二卵性の場合は全然似ていないかも……」

二卵性双生児と聞いて、彼の脳裏に再び異質な顔貌が蘇ってきた。胸の中でなにかが泡立つのを覚えた。彼はしばらく息を詰め、こころのなかでなにが起こっているかじっと窺う。

電車が減速し出す。

「つぎで降りるんだな」

彼は異様とも思える顔つきの男の子への思いを吹っ切るように勢いよく言う。

電車は蛍光灯に照らし出された空間へ突入していく。ホームは乗降客で溢れていた。二人は開いた扉からホームに降りた。

二人は人びとの後をつけ、改札口からつづく地下道をもくもくと歩いていく。地上への階段を上り、アイスクリームなどを売る露店の前を通り、公園の広場を目指す。

会場となっている公園の広場にはさまざまな格好をした人々で溢れていた。小さな子供を連れた家族連れやカップルが目立つ。片隅に設けられた仮設の演壇の近くには赤旗やプラカードが林立し、拡声器から参加団体の代表たちの演説や挨拶が流れていた。

彼は演壇の前を埋め尽くしている人の群れの後ろに近づき、群衆のなかに溶け込んでいく。一体感が広がり、拡声器から流れてくる演者の切迫した声に彼の気分が次第に高揚していった。隣の佐伯の白い顔がほんのりと紅みを帯びている。

赤旗やプラカードが動き出した。緑の木立のなかから人びとの塊が一本

の帯となり、道路に流れ出た。二人は無言で道路いっぱいに拡がるデモの流れに紛れ込む。
流れは虎ノ門の交差点を通り抜け、国会裏からアメリカ大使館へとつづく。
「正門に行ってみないか、全学連の学生たちが集まり出しているらしい」
佐伯が彼を誘う。
二人は突然デモから離れて、国会議事堂の正門へ向かった。

3

ホームの中央にワイシャツ姿の学生たちが集まっている。信二郎は階段を一段残したところで立ち止まった。一斉に振り返る学生たちを見て、彼はホームに足を踏み入れることを一瞬躊躇った。後ろから学生の一団が降りてきた。彼は追い立てられるようにホームへ下り、最前線へと押し出された。
轟音とともに電車が入ってきた。停車し、ドアが開く。開いたドア目掛けて乗客が押し寄せる。彼は後からつづく乗客にから車内に押し込まれ、車両の奥で乗客に挟まれ身動きもできないまま、ドアが閉まる音を聞いた。
一瞬の出来事だった。電車が動きだし、ホームを抜け、暗い地下を走り出す。そのとき、なぜか彼は越えてはならない一線を越え、入ってはならない領域に足を踏み入れてしまったように感じた。施設を出てからはじめて経験する感情だった。
彼は物分かりのいい子だった。年老いた厳格な社長も従順に振る舞う彼をすっかり信用していた。だが彼自身意識していなかったが、要領のいい彼は施設育ちの引け目からひたすら自分を殺していたにすぎなかった。
なぜか分からなかったが、もはや後戻りができないだろうと思った。それでも何度か電車から降りようかともがいた。だが電車が駅に停車すると、降りる者はひとりもいないと決めつけるようにホームの乗客が一斉に乗り込む。彼は身動きできない電車のなかで、このまま前に行くしかないと自分に言い聞かせた。
後悔に似た感情が過った。こころに微かな痛みを感じた。だが一方で気分が妙に高揚していた。こころなかで得体のしれない生きものが跳躍し出す。彼は何度かこの生きものの息の根を止めようと追い回すが、巧妙にすり抜けて逃げ回る。ついに疲れ果て、次第に彼は生きものに身を任せていく。
電車が減速してホームに入った。急に乗客が動き出す。
彼は乗客に押されてホームに降りた。彼は人々の流れに呑まれ、ホームの階段を上り改札口を出る。そしてそのまま人々とともに流れていく。
真正面に国会議事堂が迫ってきた。
彼はふとわれに返ったように辺りを見回した。大勢の若い男女の思い詰めたような顔があった。彼は水色のカーディガンを探した。
国会の正門前を何組ものデモ隊が通りすぎていく。時折、ボン、ボンと赤坂山王祭りの花火が鳴った。デモ隊から賛美歌やしあわせの歌の歌声が流れた。
正門は閉ざされていたが、左右の通用門はまだ開け放たれたままだ。機動隊のバリケード車が十数台、官邸へ抜ける道路脇に待機していた。
「国会構内で抗議集会を」と呼びかけ、全学連の学生が国会正門や各通用

門付近に集まりはじめる。待機していた十数台のバリケード車が正門を固める。

一時、雨が降った。正門横の土手から国会構内へ乱入する学生に備え、私服警官が目立ちだす。報道陣も集まる。通用門も閉ざされる。

彼は国民会議に属する組合や地方団体グループ、新劇人グループ、一般自由参加グループ、全学連などの各大学グループらのさまざまなデモ隊に紛れ込む。そして彼らと国会の周囲を何回も回った。

右翼団体のノボリをもつ一団がバスで乗り込んで来た。デモ隊の側にやってきた右翼側と学生の間でヤジの応酬が繰り返された。右翼のなかの二、三人が棒をふりかざしてデモ隊に襲いかかる。デモ隊は逃げ散った。

右翼団体のトラックが執拗にデモ隊めがけて突っ込んでいく。一〇〇メートルほど走った。デモ隊に止められ、ひっくり返された。プラカードの柄をもった男たちがデモ隊に殴りかかった。デモ隊は血を流して逃げ惑う。頭や胸から血が滴り落ち、白いブラウスやYシャツが赤く染まった。

だがこれは序盤に過ぎなかった。

一方、衆院南通用門前では、右翼の殴り込みを知って興奮した学生たちが南通用門に攻撃開始する。門には太い針金で角材が縛りつけてあった。針金が切られ、一五分ほどで門が開く。鉄の扉が蝶番から外された。南通用門の内部を固めていた警官輸送車や資材車が引きずりだされた。門の両脇の鉄条網が破られた。

学生が構内に入り込んでいく。一時後方に下がった警官隊と新たに加わった機動隊とが警棒をふりあげて学生に向かった。頭や肩を打つ音と悲鳴が響き散る。

信二郎は棒立ちになって見ていた。一瞬映画の一シーンを見ているような気がした。

つぎの瞬間、よもや襲ってくるとは思ってもみなかった警官たちが警棒をふりかざし、声をあげ、彼目掛けて迫ってくる。彼は慌てて逃げ出す。だが間に合わなかった。後頭部に衝撃と熱さを覚えた。つぎの瞬間、彼は気を失った。

4

一週間後、信二郎は漸く意識を取り戻した。

目を覚ましたとき、白い天井が目に入った。寝泊まりしていた寮の薄汚れた古びた天井ではない。彼は自分がどこにいるのか見当がつかなかった。起き上がろうとしたが動けなかった。首を回して辺りを見ようとしてもできなかった。頭がなにかに包まれている感じがした。手で確かめようと右腕を動かそうとしたとき、激痛が走った。

彼は目玉を突きだし一回転させた。頭部から顔にかけて包帯が巻かれているらしい。彼は左腕を動かしてみた。動かしにくいが右手よりも動く。大した痛みもない。

足音が近づいてきた。

「気が付きましたか」

医師らしいマスクをした白衣の若い男が顔を寄せ、目を覗き込んだ。年配の看護婦が上掛けを捲った。

そのとき、彼は病院にいるらしいことを悟った。どうしてここにいるのか知りたかった。聴診器を胸に当てているマスクの男に聞き糺そうとした

が、思うように口が動かない。それでも何度か口を動かそうとしたが、無駄だった。検診を了えると、医師は看護婦に向かったなにか指示を与えてから離れていった。

「もう集中治療室から出ても大丈夫だそうですよ。準備ができ次第、一般病室に移動します。いいですね」

看護婦は上掛けをもとに戻しながら囁くように言う。彼には看護婦の低い声がよく聞き取れなかった。マスクで口の動きが分からなかったし、話の内容も理解できなかった。聞き直したかったがどうすることもできなかった。彼は不安げに看護婦の目を見るほかなかった。

彼の不安そうな目に気付いたのか、看護婦は「どこか連絡するところがあれば電話しますよ」と耳元で言った。だが彼はまだ事情が呑み込めずにいた。反応のない患者を残して看護婦は後ろ姿を見せた。

しばらく彼は看護婦が去っていった方向に視線を向け、一体なにが起こったのか必死に思い出そうとした。だが彼の記憶は薄いもやに包まれたままだった。

彼は必死になって薄いもやを透かして記憶を辿っていく。

地下鉄の轟音が響いた。そうだ。あの日、森島哲雄を探して地下鉄で国会議事堂へ行ったのだ。

地下から地上に出て、歩いて正門の間近まで行った。刻々と増える人々の群れを眺めているうちに群衆のなかに呑み込まれてしまい、いつしかデモ隊に紛れて国会構内に入り込んでいったのだった。

群衆のなかにいるとき、一時雨が降った。雨に濡れて、彼は一瞬本郷三丁目に戻ろうと思った。正門から地下鉄入口に向かって人を掻き分けのろのろと歩いているうちに雨が止んだ。

南通用門前にきたとき、学生デモ隊が渦巻き行進を行ない、門を揺さぶる。彼は群衆のなかに佇み、はじめて間近で見るデモ隊の激しい動きを見守った。全身が震えた。学生たちの激しい動きから発散されたなにかが彼に乗り移ったようだった。

そのときマイクから「国会構内に入って大抗議集会を開こう……」という演説が流れた。

門を結わえていた針金が切られた。門が開き、半開きになる。門の開放が進められている一方で、両脇の鉄条網が破られた。隙間からデモ隊が国会構内に入っていく。彼もデモ隊に紛れてなかへ入った。

デモ隊の前面で警官隊が隊列を組み、デモ隊めがけて警棒を振り上げた……。

彼はあのとき、逃げる途中で後ろから追ってきた警官に警棒で頭を殴られたことを思い出した。記憶を包んでいた薄いもやはすっかり消えていた。

「じゃ、一般病棟に移動しますよ」

聞き覚えのある看護婦の声がした。彼は一瞬身構える。

「このまま、じっとしていてください。いいですか、ベッドごと動かしますから」

若い看護婦がふたり、前と後ろからベットを押す。彼は目を閉じて床の上で転がるキャスターの響きを聞いた。

六人部屋だった。両側の仕切り壁に頭を接してそれぞれ三つのベッドが対称的に配置され、隣とはカーテンで仕切る設計になっている。廊下から入ると、右側の中央にスペースがあった。

彼のベットはそのスペースに押し込まれていく。壁際にベッドの頭部を接し、電源のコンセントが差し込んで移動が完了した。

彼はどうしていいか分からなかった。すべてがはじめての経験だった。大体病院のベッドにいるのが不思議だった。自分で歩いてきたとは思えなかった。誰かが運んでくれたのか。

「起きていますか」

目を開くと、年配の太った看護婦がかがみ込んで微笑みかけた。マスクを取っているので、彼はしばらく最初に会った看護婦であることに気付かなかった。看護婦は名前と連絡先の住所や電話番号、それに生年月日を尋ねた。

「身体を動かしてみてください。起き上がることはできませんか」

「起きてもいいのですか。今日は何日ですか」

起きてもいいのなら早く寮に帰りたいと思った。無断で外泊したうえ、欠勤したとなると、社長はどんなに怒っているだろうか。だがどう説明すればいいのか見当が付かなかった。

「六月二十二日」

「え？　二十二日ですか。あれから一週間にもなるんですか」

彼は唖然とした。

「そうよ」

「……あのう、誰がここに連れてきてくれたのですか」

「救急車じゃなかったかしら、あの日は夕方から真夜中遅くまでつぎつぎとケガした人が運ばれてきたのよ。すぐ手術をしたので、今日までＩＣＵにいたわけ」

「手術ですか、どこの手術をしたのですか」

頭部と右腕が骨折しており、ことに頭部陥没箇所は緊急に手術する必要があった。身元を確かめるまえに、取り敢えず手術が行なわれたが、なかなか意識が戻らず心配したという。

「それじゃ、お家のかたに連絡しておきますからね」

年配の看護婦は機械的に言った。

「あのう、一寸待って下さい。まだ誰もわたしがここに入院していることを知らないわけですか」

突然病院から連絡されても、昔かたぎの社長は困惑するだけだ。親兄弟でもなければ家族の一員でもない一介の一従業員に過ぎない身の上を考えれば、このままじっとしていたかった。それに無断でビラを印刷し、国会に出掛け、デモに加わったことを知れば、ただではすまないにちがいない。

「早くご家族のかたに知らせたほうがいいじゃないの」

「そんなものはいない」

彼は一瞬激昂して大声を出した。看護婦は目を丸くして彼を見た。

「すみません、つい……。さっきの住所は勤め先の寮ですし、電話も……。わたしはひとりなのです」

「そうなの」看護婦は一息つく。「でも、勤め先には連絡したほうがいいでしょう。治療費もかかることだし……、保険には入っていたのでしょう」

「保険？　あ、健康保険のことですか」

社長を含めて従業員が数人しかいない小さな町工場に過ぎない印刷会社には、社会保険料を払う余裕がなかった。必要なら各自で国民健康保険に加入するほかない。彼はまだ加入してなかった。

「まだ連絡しないでください。もう少し考えさせて下さい。いま連絡しても迷惑を掛けるだけですから」

年配の看護婦はしばらく彼を見つめていた。軽く頷くと、踵を返した。彼は看護婦の後ろ姿が消えると、ベッドのうえで静かに手足を動かした。

ギブスで固められた右腕を抱え、上半身をゆっくり起こした。後頭部に鈍痛が走った。彼はそのままの格好でしばらく様子を窺った。鈍痛が引いた。微かに尿意をもよおした。尿採取用のカテーテルがはずされて尿が膀胱に溜まりだしたらしい。

彼はベッドから床へ足をたらした。スリッパがない。彼は足をぶら下げたまま、ベッドの縁からゆっくり腰をずらしていく。裸足が床に触れた。ヒヤリとした心地よい冷感があった。彼は右腕を首から吊るした三角巾の懐に入れ、そのまま床に立った。

「大丈夫ですか」

兼尾信二郎と書いたネームプレートと紙袋をもって若い看護婦が笑顔で近づいてきた。ベッドを移動したときの看護婦らしい。彼はふたたびベッドに腰掛ける。

「これは着ていたものと持ち物。腕は吊った方がいいですね。あとなにか必要なものはありますか。一階に売店がありますよ」

看護婦は紙袋をサイドボードに仕舞いながら、裸足の両足を見て「スリッパがないのね」と呟く。

5

森島哲雄は教室に入ると素早く机の生徒たちを見回す。今日も兼尾信二郎の姿はなかった。あの日、妹の安里が代わりに印刷物を受け取ったものの、なんとなく信二郎のことが気になって仕方がなかった。

「兼尾信二郎のことを知っているものがいないか、最近見かけないが……」

反応がなかった。授業が終えると、彼は職員室に戻り、頭の禿げた教務主任に信二郎の連絡先を尋ね、電話した。

「十五日に出たきりですか」

電話口に出た残業中の同僚らしい男は「忙しいのに、なんの連絡もない。社長がカンカンに怒っている」と言うと受話器をがちゃんと切った。

「兼尾信二郎がどうかしましたか」

教務主任が席から声をかけた。

「いいえ、べつに……、最近出てこないので……」

「そんなことはよくあることですよ、いちいち電話していたらきりがない。うちは定時制の夜間高校ですからね」

彼は曖昧に応え、席を立った。胸騒ぎを覚えた。もしかしたら信二郎はあの日、自分の代わりにビラを受け取った安里を追って国会に行き、デモに巻き込まれたのじゃないか。

彼は外に出ると、公衆電話を探した。新聞記者をしている同級の滝沢に連絡した。

「あの夜怪我人が担ぎ込まれた病院のリストが欲しいんだが……」

「活動家のお前のほうが詳しいんじゃないのか」

滝沢の声に皮肉な響きがあった。

「丸坊主頭の高校生がひとり、あの夜から行方不明なんだ。心当たりないかなぁ」

彼はその足で新聞社に立寄り、滝沢からリストを受け取ると、氏名不詳の怪我人がいないか、病院を尋ね回った。大半が退院したあとだった。

信二郎も退院してしまったのだろうか。もし退院したのなら、勤め先に戻っているはずだ。戻っていないところをみると、まだ入院しているにち

がいない。口がきけないほどの重症で連絡さえできずにいるのではないか。
彼は残りの病院を尋ね回る。だが信二郎を見付けることができなかった。彼にはとうのむかし退院してしまったとように思えた。何日か無断欠勤したことを苦に、信二郎は勤め先に顔を出せずにいるのかもしれない、そんな気がし出した。それにしても一体どこに雲隠れしたというのか。

「兼尾、どうした」
目を開けると、森島哲雄が前屈みになって覗き込んでいた。
「あ、先生……」
信二郎の目が潤んだ。彼はそっと涙を拭きながら、身を起こした。
「おい、大丈夫か」
「どうしてここに……」
彼は信じられないといった顔付きで森島哲雄を見た。
心当たりの病院を尋ね歩いたが見つからず諦めかけていたとき、勤め先の印刷会社の社長から学校に当分欠席する旨の電話があったという。そのとき社長は病院から連絡があったと言い、彼が入院中であることが分かったのだった。
だが彼はなぜ森島哲雄が病院までやってきたのか、そのわけを知りたかった。社長や同僚さえ顔を出そうとしないのに、なぜわざわざ病院までやってきたのか。彼には森島哲雄の行為が理解できなかった。ビラの印刷を頼んだためにケガをしたとでも思っているのだろうか。だが森島哲雄の出現は彼にとってひとつの救いだった。
「居る場所が分かって安心した。また来るよ。これから人と会う約束があるので。今日はきみがここにいるかを確かめに来ただけだから手ぶらできたが、なにか欲しいものはあるかな」
すぐ退院して職場に戻りたかった。病院への支払いもあったし、このまま入院を続けるわけにはいかなかった。かといって、会社に戻ってもすんなり受け入れてもらえるか分からなかった。無断で一週間以上も休み、そのうえケガをしていて、前と同じように働けるか保障できない。それなのに、まえと同じように勤めを続けられるだろうか。たとえできたとしても、寮では術後の静養はまず無理だろう。
彼は迷った。頭が痛かった。とにかく社長がどう思っているのか詳しく知りたかった。だが自分から電話して聞き糺すこともできずにいた。
「先生……」
思い詰めた彼の顔付きを見て、森島哲雄は近くから丸椅子を引き寄せ腰を下ろした。
「……職場に戻ることが出来るでしょうか……」
「まだ無理だよ」
いつまでもじっと見つめている彼の目を見て、哲雄は自分の返答が答えになっていないことに気付いたらしい。そして続ける。
「まだ退院は無理だが、退院後もしばらくは静養する必要があるだろう。まあ、一ヵ月位はかかるか。わたしから社長さんに話しておこうか」
「そうですか……」
一ヵ月もかかるなら、もうまえの職場には戻ることはできないだろう。彼は施設の所長の顔を思い浮かべた。所長が頼み込んでようやく引き受けて貰った印刷会社を首になったと知ったらどんな顔をするだろうか。
「起きてしまったことをくよくよ考えずに、早く回復するように心掛けることだ。きみは若いんだから回復も早いはずだ。回復さえすればすぐまえ

と同じようになるさ。心配するな。社長に会って話しておくよ。きみのケガは災難だったとね。無差別に警棒を振り回した警官が悪いに決まっているが、そう言っても理解してもらえないだろうからね。ビラを届けに来て、そのとき襲われた災難だったと言っておくから。きみはむしろ被害者だよ」

森島哲雄は元気付けるように彼の肩を軽く叩くと、じゃと言って足早に後ろ姿を見せた。エレベーターまで見送って行くべきだったと思いながら、彼はしばらくベッドで身動きもせずに哲雄が去っていった廊下の方に目を向けていた。

6

六月一五日　全国五八〇万人の安保改定阻止第二次実力行使　全学連デモ隊国会構内で警官隊と衝突　死亡一名、負傷者多数

六月一九日午前零時　新安保条約自然承認

六月二二日　全国六二〇万人の第三次実力行使　翌二三日、首相退陣表明（七月一五日内閣総辞職）

「平和日本が死んだ」

生野耕一郎はここ何日か分の新聞を片手に、こころのなかで何度も呟く。母屋から離れた別棟の薄暗い部屋に閉じこもり、自分を木端微塵に打ち砕きたい思いに駆られた。

それにしてもあの大群衆の大波は一体なんだったのだろうか。深い挫折感のなかで新安保条約の自然承認を受け入れさせられたものたちは、第三次実力行使で新しい闘いをはじめようとしたのではなかったのか。それとも、あれはただ最後のあがきを燃焼させたのだったのか。首相の首と引き換えに今後一〇年間日本の命運をわが青春とともに新安保条約に託すことになったことを思い、彼はどうしようもない無重力のような無力感を感じた。

無重力の世界を浮遊しながら、彼はアリ地獄の中に落ち込んだ蟻のように、日本が否応無しに冷戦の只中に深く巻き込まれてしまったのだと思った。いまにも戦争が始まり、なんの前触れもなく核爆弾を搭載したミサイルが飛んでくるような気がした。戦争が始まれば、若者たちが戦場へ駆り立てられることになるのだ。

核兵器の破壊力は日を追うごとに巨大化していった。すでに、核分裂を利用したウランやプルトニウムを用いた原爆から核融合を利用する水爆が開発されていたのだ。水爆の威力は一発で広島型原爆（核分裂）の約七〇〇倍に達する。すぐそれ以上のものが開発されるだろう。

一九四五年八月五日広島に落下した原爆（ウラン爆弾）の爆発威力はＴＮＴ火薬換算で一五キロトンだった。長崎に落下した原爆（プルトニウム爆弾）の爆発威力はＴＮＴ火薬換算で二二キロトンだったが、一九四九年に旧ソ連も核実験に成功すると、米ソ間でしのぎを削る核兵器開発競争が始まる。

一九五二年一一月、米国が水爆実験に成功すると、翌年八月、ソ連成功。続いて、英国、中国、フランスがそれぞれ一九五七年、一九六七年、一九六八年に成功する。

一方、運搬手段であるミサイルの開発も急速に進んでいた。一九五七年八月二六日、ソ連がＩＣＢＭの実験に成功。翌一九五八年一一月二九日、

米国がＩＣＢＭアトラスの全射程実験に成功。両国において「連続生産」が開始され、瞬く間のうちに五メガトンクラスの水爆弾頭を搭載したＩＣＢＭが実戦配備されていった。

いまや米国やソ連の国内や同盟国の基地のいたるところから、あるいは世界の公海を潜航する原子力潜水艦や成層圏を巡航する戦略爆撃機から世界の大都市や主要施設に照準を合わせた核弾頭を装備した何百何千というミサイルが発射スイッチの命令を待って待機していた。

彼がいつ飛来するか分からない核弾頭を搭載した弾道ミサイルの恐怖に戦慄き、ひとり呻吟しているとき、日本経済は岩戸景気に湧いていた。だが若者には実感として好況の恩恵に浴しているという意識はなかった。

「耕一郎くん、いるかな」

外から低い声がした。哲雄だ。

哲雄が声を掛けるときはいつも決まって彼が机を置いている玄関脇の洋室の出窓からだった。

本郷三丁目の交差点に近い大通りから少し奥まった一角に、東京大空襲の際の火災を免れた閑静な住宅街が残っていた。一帯には戦前からの旧い大きな屋敷が連なっていて、森島邸はほぼ中央にあった。

タイル張りの高い門柱に鉄柵の扉の門を構え、屋敷のまわりを高いコンクリートの塀で囲まれている。母屋は古びた明治時代の洋館で、門からかなり奥まったところに木々に埋もれるように建っていた。

広大な庭内には樹木が鬱蒼と茂っている。門を入った左手に樹齢三百年を超すと思われるケヤキの大木があった。耕一郎が寝起きしている別棟の離れはケヤキの大木から少し奥の塀際にあって、以前、庭番の老夫妻が住んでいた２ＬＤＫのこじんまりとした古びた建屋だった。

彼は手を伸ばして開け放している出窓のレースのカーテンを開いた。哲雄の笑顔があった。

「一寸いいかな」と言うと、哲雄は玄関に回った。

特別の用事がある場合のほか、哲雄が家のなかに入ることは滅多になかった。いつも外に立ったまま窓越しに話すことが多かった。

小さな玄関が西側の中央にある。建屋は四間四方の平屋で、南側には西南の角に六畳程の洋室と東南の角に八畳の和室が押し入れを挟んで並んでおり、北側には六畳程のＤＫが西北の角に、その奥に勝手口の土間と洗面所・風呂・トイレがあった。

庭番が門番をも兼ねていて、西南の角の洋室に待機して出入りするひとびとのために門の開閉をしていたというが、彼はここを勉強部屋にしていた。

彼は哲雄が玄関に回ったことを知ると、急いで参考書を机のうえに開いて椅子から立ち上がる。

「勉強していたのか」

哲雄は幾分緊張した面持ちで玄関脇の洋室に入ると、物珍しそうに室内を見回してから、机のうえに目を落とした。それから哲雄を彼の顔をじっと見た。

「顔色がよくないが、体調は……」

南側と西側に窓のある西南の角部屋なのに、室内は思ったほど明るくない。窓に張り巡らされたレースのカーテンのせいだけではなかった。生い茂る葉を付けたケヤキの大枝が覆い被さり、西側の窓には夏の強い西日が殆ど射し込まない。

「べつになんともありません」

彼は哲雄を上目遣いで見た。彼は哲雄と面と向かうと自然と肩に力が入って構えてしまう。
「ならいいけど……」
哲雄は壁際に置いてある絹張りの長椅子の端に腰を下ろしながら、笑顔を向けた。
「耕一郎くんね、そろそろ母屋のほうに移らないか。きみが移って来てくれると助かるんだけど。ぼくは夜は遅かったり、留守にしたりするんで、安里が一人になることが多いんだよ。不用心だと婆やがうるさく言うんだ」
彼は口を固く閉じたまま、じっと哲雄を見つめるだけで、いつまで経っても口を開こうとしない。
「……実は……」
そんな彼の様子に観念したのか、哲雄がつづける。
「ぼくが教えている夜間高校の生徒で、あの日、ビラの印刷を頼んだ子だが、頭にケガをしていま入院している。警棒で頭を割られたらしい。病院の話では後頭部が陥没骨折していたので手術をしたそうだ」
「あのときのデモですか」
「そう。さいわい、経過が順調で来週にも退院できるのだが……。でも職場に復帰するまでにはさらに一ヵ月ほどの静養が必要らしい」
「……」
彼には哲雄が言いたいことは分かっていた。だが彼は気付かないふりをした。いまここからよそへ移ることは自分のいる場所が奪い取られそうで嫌だった。彼は口を閉ざしたまま、哲雄をぼんやりと眺めていた。
「実は、退院しても彼には帰るところがないんだ。勤め先の寮に入っていたがそこにはもう戻れないし……、で、うちで静養させてやろうかと思っているんだが……」
「……」
「あの日、ぼくがビラを受け取りに行けば、彼は国会議事堂まで行くことはなかっただろうし、こんなことにもならなかった……かもしれない」
哲雄は顔を窓に向け、焦点の定まらない目であらぬほうを見ている。
彼は相変らず口を噤んだまま、哲雄が口を開くのを待った。そのとき突然、彼の脳裏にあの日の情景が浮かんだ。
暗闇から黒い服の一団がデモ隊に襲いかかった。つぎの瞬間、黒い服の一団とデモ隊は消え、頭や顔から血を流して倒れている若者や頭を抱えて蹲っている人々が残されていた。不意に、地下鉄の改札口で見かけたずんぐりした体躯の高校生らしい坊主頭の男が頭から血を流して近づいてきた……
「いいです。奥の部屋を使っていいです。ここで寝ますから……。その背を倒すとベッドになるのです」
彼は哲雄が腰を下ろしてる長椅子を指差す。
「……」
哲雄は目を丸くして長椅子に見た。それから目を彼に移し、そのまま無言でじっと見つめている。
哲雄の視線が眩しかった。すねていると思われるのは嫌だったが、かといって母屋に移るのも気が進まなかった。
「うまくいかなかったら、そのときは移りますから」
彼は哲雄との話を早く終わりにしたかった。
「そうか。じゃ、いいんだね、一緒で……」
彼が椅子から立ち上がるのを見て、哲雄もしぶしぶ立ち上がった。

哲雄の後ろ姿を見送りながら、彼は母を思い浮かべた。

7

「耕一郎くん、このまえ話した兼尾信二郎くんだよ」

耕一郎とのやり取りから数日が過ぎた日の午後、哲雄が右腕を三角巾で吊った信二郎を連れて現れた。

彼は包帯頭の信二郎を一瞥すると、素早く視線を哲雄に戻す。胸が大きく波打った。確かに、あの男だった。顔はやつれ、浅黒かった肌の色も褪めているが、あの日地下鉄の改札口に立っていた男に違いなかった。

彼は一瞬、嫉妬とも後悔ともつかぬこころの震えを覚えた。体が熱くなった。デモで負傷したのがオレでなくてあの男だったとは……。

「移るんだったら……、気が向いたらいつでもいい。安里には話してあるし、部屋は掃除してある。ぼくの隣の部屋だよ」

彼は迷った。この際母屋に越して哲雄と同じ屋根の下で暮らすか、それとも頑なに離れの生活を続けるか。

目を上げ、ふたたび信二郎に目を向ける。彼をじっと見ている二つの目があった。

奇妙な共同生活がはじまった。

信二郎はどうしていいか分からなかった。言われるままに、母屋から耕一郎が運んでくる食事を食べ、一日中奥の八畳で横になっていた。

いつまでこうしていなければならないのか、彼はぼんやりと天井のしみを見ながら、同じことを繰り返えす。早くもとの体に戻りたかった。右腕のギブスの先から外に出ている指先を動かしてみる。まだ思うように動かない。思い余って、急に立ち上がると頭がふらつき、目の前が暗くなって倒れ込む。

右手が自由に動かなければ印刷工の仕事ができないのではないか。頭の傷は順調に回復しているのだろうか。

彼にはどうすることもできなかった。どうしようもない不安が彼を襲う。起きて思いきり走りたかった。何もかも忘れて走って走って走りまくりたかった。

一日目はじっと我慢していたが、二日目になると居ても立っても居られなくなって、彼は恐る恐る床から起きだし、耕一郎を探した。森島哲雄に会って今後のことを話したかった。

耕一郎の姿はなかった。彼はキッチンにある食卓の椅子に腰をかけ、ぼんやり窓の外に目を投げた。蝉の鳴き声が響く。彼は一瞬蝉取りした幼き日を思い浮かべ、目の前に茂るケヤキの大木を見上げ、蝉を探す。

不意に玄関の引き戸が開く音がした。耕一郎が帰ってきたのかと思った。

「お昼持ってきましたよ」

耕一郎が「婆や」と呼んでいるかなり年配の女中だった。彼は驚き、曖昧に返事する。婆やがキッチンに入ってきた。

「お腹空いたかね」と言い、婆やは彼をじろじろ見ながら、食卓に箸をおき、茶碗や皿を並べはじめる。

「……」

彼は黙って婆やの手の動きを追う。

「母屋にきて食事ができればいいがな。でも寝巻きにままじゃね。いちい

ち着替えるのも面倒だろうし、当分運ばなくちゃならんかの」
婆やは独り言のようにぼそっと言った。小柄で一見若く見えるが、哲雄の話では七十を越しているらしい。
一瞬、婆やが病身の子のために食事の用意をする母親のように思えた。母親ならきっとそうするにちがいないと思うのだが、彼にはそんな経験は一度もなかった。
「お国はどこかね」
「はあ……」
「親御さんは……」
彼は急に涙が込み上げてくるのを感じた。彼は急いで顔を背け、窓の外に目を向けた。
彼は親の顔を知らなかった。二歳ごろ迷子として養護施設に引き取られ、それ以来中学校を卒業するまでそこで過ごした。幼いころの記憶のなかには父や母らしい人が出てくるが、なぜかいつも遠く離れていて決まって不鮮明な映像だった。
同室の男の子は喧嘩に負けるといつも「お前は捨て子だ」と囃し立てた。組み伏せ両腕を押さえつけ馬乗りになって「参ったか」と言っても「捨て子なんかに負けるもんか」と止めなかった。
施設の先生に何度尋ねても、迷子だったとしか言わない。やはり捨て子だったのかと思うこともあった。それでも彼は密かに父か母が迎えに来ると思っていた。そしてその日の来るのをずっと待っていた。
彼はあらぬほうを向いてそっと涙を拭いた。婆やはなにも言わなかった。婆やが去ると、涙がどっと溢れた。彼は涙を流しながら、ご飯を口に運んだ。
食事を終え、食器を流しに運び、汚れを洗い落としている間も涙が止めどなく流れ出た。記憶庫の扉が壊れたのか、幼時から過ごした施設での日々のいじめや、ひもじさから畑のキュウリを盗み食いしたことなどが、湧き出る泉のように次から次と溢れ出る。彼は流れ落ちる涙に手を拭きながら、鼻水と一緒にご飯を飲み込む。
横になっても涙が止まらなかった。涙は頬を伝わり耳に落ちていく。彼は身動きせずにじっと耐えていた。溢れて流れ落ちていく涙が枕を濡らした。こころのなかも頭のなかもまるで白い靄に包まれた小さな空間に横たわっているような空っぽの感覚のなかで、彼は目を潤ませたまま、浅い眠りに入っていった。
玄関の引き戸が開くような音がした。白い靄のなかに女の人が立っている。彼は近付いて行こうとするが近づけない。距離がどうしても縮まらないのだ。彼は手を差し伸べ「お母さん、お母さんでしょ」と叫ぶ。声を出した途端、女の人は消えていった。
彼は夢だったことに気付き、身を起こし、辺りを見回す。隣の部屋はしーんと静まりかえっている。耕一郎はまだ帰っていないのだろうか。彼はふたたび横になり、目を閉じた。彼はこれからどうすればいいのかと思いつづけていた。
しばらしてふたたび眠りに落ちた。うとうとしていると、玄関の戸が勢いよく開く音に続いて、隣の部屋から床のうえに鞄を机に置く音がした。つづいてせき払いがした。
これが耕一郎の帰ってきたときのいつもの合図だった。

8

隣に信二郎が来てから、耕一郎は学校から帰ると、いつも机の前に立ったまま、窓のガラス越しに庭の木々に目を向けていた。木々の緑は日増しに濃くなっていく。だが彼にはその変化に全く気付いていない。いや、彼には木々さえ目に入っていなかった。毎日全身を耳にして隣部屋の信二郎の動静を窺っていたのだ。

彼には信二郎に尋ねてみたいことがあった。毎日機会を窺っていたが、なかなか切り出せないのだ。どう切り出せばいいのか分からないこともあった。何度か話してみようと思ったこともあったが、信二郎の前では口は重く、いつも閉じたままだった。

こんなふうにして、日に日を重ねていった。

なぜか彼は口を開くことができなかった。口を開くのが怖かった。一度口を開くと、弟かもしれないと思ってる微かな希望が木端微塵に粉砕されて、一瞬にして霧散し、消えてしまうのではないかと思ってしまうのだった。

だがこんなこを繰り返しているわけにはいかなかった。床を離れた信二郎がいつここを出ていくのか分からないのだ。

一九六〇年五月一九日、旧条約を改定した新日米安保条約が衆院本会議で自民党による強行採決以来、同条約の自然成立（同年六月一九日）にいたるまでの一ヵ月間、国会周辺は反安保デモに埋め尽くされた。六月一五日には警官隊と全学連が激突し、死者一名を含む多数の負傷者を出した。

信二郎もそのとき頭に重傷を負ったのだ。だが、いまではすっかり快復して毎日散歩するようになっていた。

彼は襖の向こうに信二郎の気配を感じてはほっとしたものの、いつここを出ていくのか分からなかった。彼は今日こそ話してみようと意を決して身を翻し、机の前から離れた。

突然、後ろから声がした。ガラス窓を指先で叩く音がつづく。

振り向くと、ガラス窓の外で女の子が微笑んでいる。安里だった。

「ああ……、なんか……」

彼は安里の顔が入るくらいガラス戸を引いた。

「テラスでバーベキューをするというの。手伝って……」

「テラスで？」

母屋の洋館には門のある正面と反対側の南側に芝生を張った庭が広がっているが、それに接してタイル張りの広いテラスがあった。バーベキューといっても肉を焼く本格的な装置があるわけではない。テラス片隅に煉瓦を積んで炭火を起こし、その上に金網をのせて肉やタマネギなどの食材を焼くだけだったが、それだけにかえって準備が大変だった。そのうえ、みんなが座る大きな丸テーブルをテラスに運び込まなければならないのだ。

「兄がもうじき帰ってくるわ。耕クンの帰りを待っていたのよ。早く来て手伝ってね」

言い終えると安里は踵を返したが、直ぐ振り向くと「お隣さんも一緒よ。必ず連れてきるのよ」と加える。

彼は曖昧な返事を返したものの、なんで急にバーベキューなのか見当がつかず、小走りに去っていく安里の後ろ姿をぼんやりと目で追っていた。視野から安里が消えても、彼はしばらく立ち尽くしたままでいた。

9

「兼尾君の快気祝いだ」
森島哲雄は上機嫌だった。若い三人はもっぱら焼き肉を突っつき口をもぐもぐさせているなかで、一人だけビールを飲み、はしゃいでいる。
信二郎はこんな哲雄を見たことがなかった。それだけではなかった。すべてがはじめて見る世界だった。
門に近い塀際の離れで二週間近く寝起きしていたのに、一度も母屋を訪れたことはなかったし、広いテラスがあることも知らなかった。それに安里に会うこともなかったのだ。
彼はなぜ頭に重傷を負ったか、自分でもよく分からなかった。曖昧なまま毎日を過ごしていた。
「兼尾、すっかり元通りになったようだね。本当によかった。ところで、あの日、なぜ、国会へ行ったんだね。国会の構内まで入っていくなんて思ってもみなかったが……」
彼は一瞬、なんと応えていいのか分からず、じっと哲雄を見た。
多分、哲雄は彼のその日の行動を理解できずにいたにちがいない。信二郎が安保問題に関心があっても反対デモに参加するとは考えもしなかったろう。だから気軽にビラの印刷を頼み、その受け取り場所を地下鉄の駅構内にしたのだ。
安里の目が好奇心に輝いている。耕一郎も固唾を呑んで彼を見ていた。
彼はなんとなく気後れして、しばらく口を固く閉じたままでいた。それから彼は口をもぐもぐさせ、哲雄に顔を向ける。
「そんなつもりは全然なかったのですが、デモ隊に巻き込まれて気がついたら国会の構内にいたんです」
全身に汗が噴き出した。彼は手の甲で額の汗を拭う。
「ふむ……。じゃ、全くの災難だったのか。でもなぜ国会へ……」
哲雄はしばらく彼を見つめていたが、思い出したように口を開いた。
「わたしがビラを奪ったから追いかけてきたのよね」
安里が目をきらきらさせて、横から口を挟む。
「それもあるけど……」
「いや、ぼくが誘ったんだ……」
耕一郎だった。
「え？　ホントか……」
哲雄が素っ頓狂な声を出した。
「いいえ、自分で行ったんです……」
その声に反応するように、彼は強く言い切る。
「先生の講義も聴いていましたし、ビラも読んでいましたから。それでふたりの後を追う気になった……」
一瞬、脳裏にあの日の光景が浮かんだ。彼はじっと見ている耕一郎に視線を走らせながら、自分に言い聞かせるように言う。
「ふたり？　安里と耕一郎のことか」
「はい」
「そうか、そうだったのか……」
哲雄の目に安堵の色が浮かんだ。そしてコップの底に残っているビールをぐっと一息で飲んだ。
彼は一瞬、余計なことを言ってしまったかと思った。これまで哲雄は自分のせいで教え子を負傷させてしまったと思い込んでいたにちがいない。

だから、身よりの無い自分を病院から引き取り、養生までさせてくれていたのだ。

「先生には大変お世話をお掛けしました。お陰ですっかり元通りになりましたので、明日からでも働きに出ようかと思っていたところでした」

彼は付け足すように言ったが、このことは彼のこころにずっとひかかっていたことだった。そしてさらにつづけようとしたとき、炭火番をしていた婆やが焼き上がった肉や野菜を大盛りにした大皿を運んできて、丸テーブルの真ん中にどすんと置いた。

「さあさあ、できたよ」

「婆やもここに座って……、兼尾の快気祝いだから一緒に」

「わしは……」

婆やは座ろうとしない。彼は腕を引っ張る。安里が椅子を引き寄せ、哲雄のとなりに婆やの席を用意する。

「あのぉ……」

彼は哲雄の明るく笑みを浮かべた目を見る。彼はふと哲雄ともこれが最後かもしれないと思う。快気祝いがお別れの合図だ。彼は明日からのことを考え、胸が締めつけられるような不安を感じていたが、彼は誰にも胸の内を感付かれないように振る舞いつづけていた。

「うん、なんだね……」

「先生、新日米安保条約が発効しましたが、日本はどうなるんですか。米ソが戦えば、日本も戦争に巻き込まれることになるのですか……」

彼は怖かった。田舎から出てきたばかり彼はなにもしていないのに、たまたま後ろから押し込まれて国会の構内に入っただけだった。それなのに、何者か得体の知れないものに、突然、頭蓋骨が陥没するほど思い切り殴られたのだ。

それはデモ隊を規制していた機動隊の若い隊員が思い切り振り下ろした警棒だったかもしれない。その隊員は国の方針に反対する跳ね上がりの学生デモに反感を抱いていたのだろうか。それとも隊長の命令に従っただけなのか。それにしても頭が割れるほど強打することはあるまい。一体なにがそうさせたのか。

あのときのことを思い出すと、彼には腑に落ちないことばかりだった。大体、新日米安保条約とは、一体なんなのだ。

「新日米安保条約か……」

哲雄の顔から笑みが消えていた。

「東西間が冷戦下にあるのに、政府は日米安保条約の改定で日本の軍事的役割の拡大を目論んでいた。それに対してわれわれが反対したのですよね……」

耕一郎が横から口を挟む。

一九四五年、太平洋戦争（第二次世界大戦）が終了して間もなく米ソ間の対立が激化し、それぞれが西側諸国と東側諸国を巻き込んで東西冷戦構造ができ上がる。一九四九年に米ソをバックにした南北朝鮮戦争が勃発、三年つづく。一九五二年に、日本では西側諸国との単独講和条約が発効。同時に、日米安保条約が発効した。これにともない、米軍基地が日本に存続することになったが、今回新日米安保条約の発効により、これが一〇年延長されることになったのだ。なお、米軍基地のある沖縄の米軍統治は、結局、一九七二年までつづく。

「それで……」

「米ソが戦えば、当然日本は巻き込まれる」

耕一郎は確信あり気だ。
「日本はどうなるのですか」
彼も負けずに突っ込む。
「日本にある米軍基地は間違いなく核攻撃を受ける。大都市にも核弾道ミサイルが打ち込まれるだろう」
第二次世界大戦終結間際、米国が広島と長崎に対して原爆を投下して以来、米ソ間で熾烈な核兵器開発競争がはじまった。そして一九六〇年以前に、米ソともすでに広島型原爆を遥かに超える水爆を開発し、その運搬手段であるＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）とともに、実戦配備していた。
「相手を先にやっつけることはできないのですか」
「それはまず不可能だろう。せいぜい相打ちだね。それに……」
哲雄は静かに言う。
米ソとも全世界の人びとを何回も殺すことができるほどの核弾頭を保有しており、双方が全面核戦争に入れば、人類は確実に絶滅することになる。両者ともこのような相互破壊戦略に立つならば、巨大な破壊力をもつ水爆核弾頭を搭載するＩＣＢＭを撃ち合うことになり、敵をやっつけるだけでなく、自国をも破壊し、全世界を破滅に導くことになるだろう。
いいかえれば、ひとたび核戦争がはじまり、第一撃を受けたとしても、両国とも、相手に対して「耐え難い」損害を与える能力を持ちつづけているということだ（相互確証破壊戦略）。もし一方が相手を全滅させようとすべてのターゲットに向けて核弾頭を打ち込めば、敵もすぐそれを探知して、ＩＣＢＭが飛来するまえに、間髪を入れず、核弾頭を打ち返すのだ。その結果、互いの核弾頭がターゲットに向かって飛んできて双方とも全滅する破目に陥ることになる。
そしてさらにこんなことを言い出す。
今後も核兵器開発競争はつづき、世界の核兵器はますます巨大化高度化大量化を辿ることだろう。米ソでは核兵器が巨大化するとともに高度化し、数量も極端に増えるだろう。そして疑心暗鬼から軍拡競争が果てしなくつづくことになる。だがそうならないまえに自国の核優位を確信した国がこと仕掛けるかもしれない。この二、三年その可能性が一番高いだろう。互いに相手の手の内の探り合いがつづくなかで、核の均衡状態が分かれば相打ちを恐れ、睨め合いがつづくことになる。かといってこれで危険が軽減することにはならない。核兵器が高度化しているうえ数が多ければなるほど、偶発的な事故の危険性が増えるからだ。さらに米ソ以外の世界各国へこのような核兵器が拡散する機会も増える。となればさらに小規模な地域戦争や大小の核事故の危険が高まるだろう。
「戦争の危険はつづくということですか」
彼はさらに食らいつく。
「そうだ。だから日本は平和主義に徹するのが一番だろう。耕一郎くん、そういうことだろうな」
哲雄は信二郎から目を離すと、鋭い刺すような視線を投げ掛けている耕一郎に嗾けるような目を向ける。彼は哲雄を見、それから耕一郎の目を見る。

１０

「米ソ間の各開発競争は熾烈を極めているということですが、競争に疲れ

て両方がダウンしてしまえばしめたものです。でもそうは決してならないでしょう。そして核兵器はますます巨大化高度化大量化していくのですね。もうすでに米ソは世界中の人びとを何回も殺せるほどの核兵器を保有しているとか、我々人類の生存も米ソの匙加減ひとつといったところですか……」

耕一郎は急に饒舌になった。目も異様に光っている。

「困ったことだし、全く無駄なことだね」

哲雄が調子よく相づちを打つ。

「平和を愛する世界の多くの人びとをも巻き込む米ソのはた迷惑な冷戦に愛想を尽かして安保反対デモに参加したのですが、なぜ両大国は馬鹿げた核開発に血道を上げるのでしょうか。たとえ核戦争に勝ったとしても、原爆などからの発生する放射性降下物による地球の放射能汚染は避けられないではないか。端的に言って、ぼくはまだ死にたくない。だから、戦争に巻き込まれそうになる安保改定に反対した。だが人類の存続を脅かすものはこれだけではないようだ……」

彼にはもうひとつ気になることがあったのだ。彼は言いにくそうに口をすぼめる。というよりこんなことを言えば笑われるかもしれないという思いが強かった。だが回り出した口は容易に止まらない。彼は勢いでつづけてしまう。

「……実は、人類の存続を脅かすものは核の脅威が第一ですが、それに劣らず怖いのは、最近社会的に問題化しはじめている公害と呼ばれている工場などからの汚染問題です。核戦争は国家によりもたらされる環境の汚染ですが、水俣病は企業による環境の汚染です……」

すでに、数年前から水俣病が問題化していた。チッソ水俣工場がメチル水銀化合物を海にたれ流して海域を汚染させ、そこで獲れた魚介類を食べた人びとの脳や神経が侵されたのだ。また太平洋ベルト地帯に立地した石油コンビナートによる大気汚染、ことに四日市市の石油コンビナートから大量に排出される硫黄酸化物によって住民の健康被害（四日市ぜんそく）が深刻化しはじめていた。

彼には核兵器開発競争を通して大量殺戮兵器の殺傷力が巨大化高度化大量化へと急速に進んできたように、企業による公害も同様に、広域化し複雑化していき、やがて人類の生存を脅かしていくにちがいないと思えてならなかった。そればかりでなかった。企業によるさまざまな製品の大量生産がはじまっていたことも、彼にはなにかしら不気味に思えて仕方がなかった。大量生産とともに、生産過程や消費過程で生じる大量の排出物や廃棄物によって大気や河川・湖沼などの水域が広い範囲にわたって汚染し出していたのだ。

「……核戦争や公害などによる大規模な環境の汚染はともに人類に対する脅威ですが、これらの根底にはなにか共通のものがあるように思うのですが……」

彼にはどうしても腑に落ちないことがあった。それがなにかいくら考えても分からないのだ。

ウランの核分裂現象が発見されたのは一九三八年だった。戦争という背景のもとで、すぐさま核分裂反応の兵器への利用が進められ、原爆開発がはじまった。一九四五年七月、原爆完成する。同年八月、ウラン型原爆が広島に、プルトニウム型原爆が長崎に投下される。

このように、新しく開発された原爆は、耕一郎らの誕生年と同じ年にはじめて実戦に使用されたものだった。その後、この超大量殺戮兵器は、東

西冷戦下、米ソを中心する軍拡競争のもとで巨大化高度化大量化が驚くほどのスピードで進められていた。原爆はさらに威力の大きい水爆へと進み、運搬手段として長距離ミサイル（大陸間弾道ミサイル）、原子力潜水艦、長距離爆撃機が開発されているのだ。そして両国はすでに人類を何回も皆殺しにできるほどの核兵器を保有し、実戦配備するまでになっている。

もし米ソ間で核戦争が起きれば、最低に見積もっても、両国ともそれぞれ一億人を超える人びとが死ぬことになるし、放射性降下物およびその他の放射化した粒子によって長期にわたり広範囲（地球規模）で土地や大気、水、食糧などが汚染されてしまう。このため、戦争当事国以外の国々まで甚大な影響を受けることになる。それだけではない。核爆発によって大気中に巻き上げられた大量の微細な粒子状物質が大気圏に拡散して太陽光線を遮り、地球に「冬」の時代をもたらす。

さらに、地球のオゾン層が損傷を受け、生態系が破壊されることになりかねない。こうなれば、人類の生存さえ危ぶまれることになるのだ。

殺傷率を高める兵器開発はいわば意図的になされるものだが、企業の公害はどうか。これも意図的になされているものか。まさかはじめから公害をばらまこうとして企業活動するようなことはあるまい。かといって、企業は多額の経費をかけてまで公害を防止するとは思えない。

とにかく、戦争も公害も結局人間に起因するものだが、人間がなぜそのような人を害する行動に出てしまうのか。戦争をはじめるのも、公害と認識しながら放置するのも、個々の人間ではなく、権力機構や企業組織がそうさせるというのだろうか。これらは組織やシステムに組み込まれた人間、すなわち個々人ではない組織化されシステム化した人間の為せる業なのか。ひとたび組織化されシステム化されると、人間は天に唾する行為でもなんでもするというのか。それではもはや人間とはいえないのではないか。人間のように見えても人間の仮面を被った非人間ではないか。

一体、なぜか。組織やシステムに組み込まれると人間が人間でなくなったしまうのだろうか。組織化されシステム化した人間は仮面を被った人間とでもいうのか。いやそんなことはあるわけがない。人間はあくまで人間ではないのか。

彼には人間というのは崇高な存在だという思いが強かった。行動規範をもち、倫理性ある存在だった。というより、人間はこのような存在でなければならないのだ。

彼にはどうしても人間が人間を損ねる行為をするとは考えられなかった。人間が自ら人間を損ねるようなことをするはずがないのだ。そこにはなにか別の要因があるにちがいない。

「国家間の戦争にしても、また企業による公害にしても、それらはすべて人間自ら行う行為に起因するものだが、そうでないというのかね。人間にはさまざまな考えの人間がいるがね。それともなにか別の……」

哲雄がさらに彼に促す。

「たとえば、熊本県水俣市周辺で発生した脳や神経をおかす水俣病ですが、たとえ金儲けが仕事の企業とはいえ、はじめから脳や神経をおかすことが分かっていた場合でもそうするでしょうか……」

彼はつづける。

水俣病はチッソという企業の工場がメチル水銀化合物を海へ放出したために生じたものだった。海に流れ出たメチル水銀化合物が魚介類に取り込まれ、その魚介類を食べた住民が被害を被ったのだ。もしその工場がメチル水銀化合物を海へ排出しなければ、そこの海域はメチル水銀化合物で汚

染されることもなかったし、そこに棲息している魚介類もメチル水銀化合物に汚染されることはなかった。

確かに、工場がメチル水銀化合物を排出しさえしなければ、水俣病が発生することはなかった。だから、水俣病に発生に対する責任はそこの工場やその企業にある。工場や企業は人間によって運営され維持されているものだ。それゆえ、工場や企業のメチル水銀化合物の排出の行為も人為的になされたものであり、結局、水俣病も人間の行為に起因するということになる。

「そういうことだね。それで……」

哲雄にはまだ耕一郎がなにを言いたいのか分かりかねているようだった。

「ぼくにはメチル水銀化合物を工場から排出させる以前になぜメチル水銀化合物の毒性をチェックできなかったのか。なぜ製品製造の過程で発生するもろもろの化学物質をチェックできないのか。それよりもさらに副生物としてメチル水銀化合物を発生させるような製法がなぜまかり通るのか。どんな企業もはじめから害のあるものをつくり出そうとすることはないでしょう……」

彼は自分の思っていることが十分言い尽くせないもどかしさを感じていた。工場からの汚染物質の排出以前に、副生物として人を損ねるような汚染物質が発生する製法が発明され、それで多くの製品がつくり出されていること自体が問題ではないか。もしそのような技術開発されても、その製法を採用する前に問題ないかチェックすることができればいいのだ。だが彼にはそんなことを度外視するなにものかが働いているように思えて仕方がなかった。そのなにものかが製法などの技術開発を唆しているにちがいない。だがそのなにものかの正体が彼にはまだ分からなかった。

「きみの言いたいことは、危険なものをつくり出す不完全な技術がなぜまかり通っているかということか……」

「……」

彼は口をきつく閉じたまま、哲雄に目を向けている。

「技術から発生する危険を前もって取り除くことはできないことではない。だが当該企業がそうしないだけだと思うよ。それにはいろいろな要因がある。たとえば、企業のコスト第一主義や技術開発のための資金不足もあるだろうし、開発の困難性もある。それに思慮の浅さや無知もあるだろう。こんなことが積み重なって……」

「いや、そんなことではなくて、もっと根本的な……、たとえば、人知を超えたなにかが作用しているような……」

水俣病だけではない。石油コンビナートからの硫黄酸化物の大量放出による大気汚染が問題化しはじめていた。四日市ぜんそくだ。このような問題がまるで必然のように発生するのはなぜか。

彼にはその正体が分からないが、なにか利用している技術そのものに問題があるような気がしてならなかった。人間が利用し享受しているはず科学技術に、逆に、人間が翻弄され出しているのかもしれない。いつのまにか科学技術が人間の手に負えない怪物に成長してしまい、独自の論理で勝手に動きはじめているのだろうか。科学技術が一人歩きをはじめているのか。もしそうであれば、まだ制御可能だと思っているうちに、なんらかの手を打たなければ取り返しのきかないことになるにちがいない。

「……」

今度は哲雄が口を一文字に結び、彼をじっと見る。脳をフル回転させているのか、ふたりは互いに目を見、黙って睨め合っている。

「さあ、焼けたよ」
婆やが輪切りにしたタマネギを山盛りした大皿をテーブルの中央にどすんと置く。焼いたタマネギの甘い臭いがぷーんとした。
ふたりが話しだすと、婆やはテーブルを離れ、炭火の金網でタマネギやじゃがいもなどを焼いていたのだ。
信二郎と安里が取り皿を大皿に寄せると、すかさず婆やが箸を持ち替え、タマネギを挟む。耕一郎の目が動いた。婆やを捉える。彼は一瞬、いままで哲雄と話していたことも忘れ、婆やの箸に挟まれたタマネギが小皿に移動する様子に見惚れる。
「耕ちゃんもどう……」
婆やはタマネギを挟む。
「どうも……」
彼がつき出した小皿のうえに焼きタマネギがちょこんと載った。焼き跡の付いた輪切りのタマネギの放つ甘い匂いが広がる。
ふと、彼はまえにもこんなことがあったような気がした。
あれはいつのことだったろうか。まだ幼い頃のことのように思う。彼は一瞬我を忘れ、過去を彷徨う。揃いの服を着た二、三歳の子がテーブルのまえに座り、両手で小さな皿を持ち、そばにいる白い割烹着を着た女の人に差し出している。
ふと、強い視線を感じた。目を上げると、信二郎がじっと彼を見つめていた。その目には深い不安の色があった。
信二郎は彼の強い視線に気付き、急いで目を伏せた。
「あのう……」
一瞬躊躇うが、彼は思い切って哲雄に顔を向ける。彼は信二郎の目に、哲雄が「快気祝いだ」と言ったときの信二郎の戸惑ったような表情を思い浮かべた。
「おい、どうかしたのか……」
哲雄は探るような目をした。
「さっき、兼尾くんの快気祝いだと……」
「そうだよ。だから……」
哲雄はなにも気付いていないらしい。
「これからのことは決まっているのですか。あんなことがあっても印刷会社へ戻れるんですか……」
彼は哲雄の目を覗き、それから信二郎に目を移す。信二郎の顔が困惑に歪んでいるように見えた。
「それは……。そのことはあとで相談しようと思っていたが、兼尾くんはどう考えているのかな。ぼくはしばらくここにいて先のことはゆっくり考えたらいいと思っていたがどうかね。この際、思い切ってね……。なにかやってみたいと思っていることないかね」
「やってみたいことはありますが、まず働いて自立することが……」
一瞬、信二郎は目を輝かせたが、すぐ目を伏せ、低い声で言った。
「まあ、それはそれで、あとでゆっくり相談しよう。耕一郎くん、いいね」
「ぼくはかまいません」
彼は哲雄に目を向け、大きく頷く。信二郎の視線を感じたが、素知らぬ振りをしてタマネギのソテーを頬張る。そのときふと、彼の脳裏にひとつのとんでもないアイデアが浮かんだ。
「ぼくには双子の弟がいるんだよね……」
突然、彼は婆やに目を移して言う。

「……」

だが婆やは聞こえないのか、応えない。

「ねえ、婆やさん、詳しく教えてくれませんか、小さいときのこと……」

彼はちらっと哲雄を見てから、婆やに顔を向ける。

「耕一郎くん、どうしたんだね。急に……。小さいときのことはこれまで何度も話したはずだが……」

「もう一度確かめておきたいんです」

そう言いながら、彼はしきりに信二郎を見る。だが信二郎は関心がないのか、目を伏せたままだ。安里は一瞬目を光らせたが、婆やはすぐ無関心を装い、あらぬほうを見、しきりに箸を動かしている。

「いまでなくともいいだろう」

不機嫌そうな声だった。信二郎が目を上げ、哲雄を見ている。

「ええ。そうですね」

彼は殊更明るく応え、箸をとり、小皿に残してあったタマネギを勢いよく頬張る。

彼はこの機会に自分の生い立ちを第三者の話として信二郎に聞かせておきたかった。だが信二郎を幼児の時離れ離れとなった弟かもしれないと思う彼の心情が哲雄には通じていなかったことに気付き、急いで自分の考えを撤回することにしたのだった。

11

耕一郎ひとりが明るく振る舞ってるのに、なぜか急に、皆が黙りこくってしまった。

哲雄は空になったコップをあおり、底に残っている僅かなビールを啜る。婆やは長い取り箸で大皿に乱雑に残っているタマネギを寄せはじめる。安里の目はぼんやりと婆やの箸の動きを追っている。

信二郎は落ち着かなかった。彼は耕一郎がなぜ急に「双子の弟」のことを言い出したのか気になって仕方がなかった。彼に投ぜられた「双子の弟」という小石がこころのなかで次第に大きな波紋になっていった。

なにか自分に関係があることなのだろうか。そんなことはない。あるはずがない。大体、姓も違うではないか。耕一郎の姓はたしか「生野」ではなかったか。

彼は自分の生い立ちを思い浮かべながら、しきりに考えるがほかに直接関係があるようなことはなにも思い出せなかった。ただ強いて思えば、信二郎という名前が気になる。なぜ二郎なのか。二番目の子だということか。だとすれば、兄がいるということか。だが名前は施設の所長が適当につけたのかもしれないではないか。

いつ施設に預けられたのかさえ、彼は知らなかった。記憶にあることは、すでに施設にいたということだった。どうして施設に連れて来られたのかはもちろん、誰に連れて来られたのかも、記憶になかった。ずっと所長と奥さんがお父さんでありお母さんであると思っていた。だが所長と奥さんが父親でもなければ母親でもなかった。

そのことを知ってから、彼はずっと本当の父親か母親がいつかきっと迎えにくるにちがいないと思いつづけた。だがいつも裏切られた。そしていつのまにか、彼はひとりぼっちであることに慣れていった。いや彼にはそうすることしかできなかったのだった。

それなのに、なぜか胸のなかで小波が打ち出している。どうしたというのだ。彼は戸惑い、自分を持て余していた。

「そろそろ打ち上げにしようか。みんな、いいかな。兼尾、明日でも相談しよう。よく考えておくんだな、なにをしたいか。いいな」

「はい」

下を向いたまま、反射的に返事をしたものの、彼には哲雄の声が遥か遠いところから聞こえてくるように思えて、ちょっとだけ顔を上げ、辺りを見回した。

目の前には大きな丸テーブルがあった。そのまわりの椅子に男がふたり、女がふたり座っている。男は哲雄と耕一郎で、女は安里と婆やだった。いや、彼はそう思っただけだったかもしらない。

いつのまにか周りが暗闇に包まれていた。大テーブルが次第に遠のき、吸い込まれるように暗闇のなかへ移動していく。男女四人の顔も次第に不鮮明になっていった。

それはまるで彼自身が暗闇のなかへ吸い込まれていくような感じだった。

「ああ……」

彼は思わず、ため息を漏らした。それは誰にも聞こえないような低い音だったが、胸の奥底から漏れてきた深いため息だった。

第二章

12

急に、周囲がざわつき出した。まるで突風が吹いたようだった。信二郎は机から慌てて立ち上がり、辺りを見回す。

それはこれまで感じたことのないものだった。鏡のように静穏だった湖面に突然白い波頭が立ち、広がっていった。

机が列をなして並んでいる大部屋はいつも部屋中がしんとしていて、ページを捲る音しかしなかった。その部屋の片隅で、彼はいつも息を殺して合図を待っていた。

あれから丸二年経った。彼は新聞社編集局のアルバイトで、校閲部門の連絡係をしていた。かっての印刷会社での経験から森島哲雄が見付けてくれたのだった。

連絡係といっても原稿や校正ゲラを制作部門や印刷工場など指定の箇所へ運ぶ小間使いにすぎなかったが、周りには記者のOBといった年配者が多いことが気に入り、彼はこの仕事を二年もつづけていた。

編集局の勤務時間は早番の夕刊班と遅番の朝刊班とに分かれている。早番では九時から夕刊用の編集会議がはじまり、一三時に最終遅版の原稿が締め切られ、一四時には退社できる。一方、遅番は一四時に出社するが、仕事は深夜におよぶ。定時制高校に通う都合上、彼の勤務時間は早番と遅番とにまたがる朝九時から五時までだった。

そのとき、最初はいつもの早番組と遅番組の交代時の情報のやり取りかと思った。だがどことなく違う感じがする。

彼は片隅の机で、腰を下ろしたまま、首だけ伸ばし、それとなく辺りを見渡す。いつもなら仮刷りの校正や校閲に追われて血眼になっている人びとが隣と私語を交わしていたり、机から離れて四、五人が塊となってひそひそ話している。

「おい、号外だ」

机に丸められた印刷物が飛んできた。科学部OB記者の遠藤だった。近くの席のせいか、いつもなにかと彼に声をかけて励ましてくれる。いままで姿が見えなかったのは遅番だったからなのか。

「えっ、なにがあったのですか」

彼は急いで号外を広げる。印刷用インクの臭いが鼻を突く。

「核戦争が起こるかもしれないぞ」

「え？　ホントですか」

彼の目に「米、海上封鎖」、号外の巨大な見出しが飛び込んできた。

一九六二年一〇月二二日午後七時、ケネディ米大統領はホワイトハウスの執務室から全米に向け、テレビ・ラジオで演説をする。大統領は、ソ連（当時）が秘密裏にキューバへ中距離弾道ミサイル等の攻撃用兵器を配置したことが確認されたことを説明し、翌二三日からキューバへ向かうソ連艦に対する海上封鎖を行うと宣言したのだ。

キューバはカリブ海最大の島国であり、米国フロリダ半島の鼻先に位置する。かってスペインの植民地だったが、国土の肥沃な低地にはいまもサトウキビなどのプランテーションが広がる。

キューバは、一九五九年の革命で社会主義国家となった。その翌年、ソ連は外交関係を確立し、攻撃用ミサイル基地建設をはじめる。ソ連はこのことを一貫して否定していたが、一九六二年一〇月一四日、米軍のU2型偵察機がキューバで建設中のミサイル基地の写真撮影に成功する。

それはソ連がキューバ社会主義国（一九六一年五月樹立（カストロ政権））防衛のために、一九六二年の半ばから着手したものであった。

この報告を受け、ケネディ米大統領はホワイトハウスの閣議室に政府高官らを招集し（国家安全保障会議執行委員会）、一〇月一六日朝から対応を議論していた。

二二日、ケネディ米大統領は海上封鎖宣言と同時に、全軍に対し最大限の配備を指示するとともに、B52爆撃隊には核攻撃の準備を命令する。英国、フランス、西独などもこれを支持し、英国の基地などでは、実際に、当時の英核戦力の中心であるバルカン爆撃機が核を装備し即応態勢下におかれた。日本やトルコの基地も同様だったという。

「日本はどうなるのですか」

彼はじっと遠藤の目を見る。

「……」

短躯で小太りの遠藤は口を閉じたままだ。一瞬、短い首のうえに載っている大きなまるい顔にそぐわない細い目が寂しげに笑っているように見えた。

「やはり、日本は巻き込まれることになるのですか」

彼は耕一郎が六〇年安保によって日本が米国の戦争に巻き込まれることになるといっていたことを思い出した。だが米ソ間の核戦争に日本が巻き込まれるとはどういうことなのか。日本もソ連の核攻撃を受けるということか。

「うん、そうならないことを祈るだけだ。米国は第二次世界大戦で日本に先制攻撃を許したことを教訓に戦略を練り直しているらしい。この度も、火の手が上がるまえに第一撃を打ち込もうとしているかもしれない。ソ連が引かないと分かれば、米国は必ず先制攻撃を仕掛けることだろう。そのとき、ターゲットは……」

彼にはよく分からなかったが、遠藤は低いが透き通る声でこんなことを言った。

第二次世界大戦後、米ソは冷戦下で核軍備競争に狂奔し、双方とも核分裂タイプの原爆からさらに巨大な破壊力（メガトンクラス）のある核融合タイプの水爆の核弾頭を開発していた。そして両陣営ともすでに全人類を何度も殺傷できるはどの大量の核弾頭を保有するとともに、その運搬手段の高度化も進め、長距離爆撃機からICBM（大陸間弾道ミサイル）へと展開し、米国ではICBMもすでに実戦配備していた。ソ連も一九五七年にはICBMの実験に成功し、米国の後を追って実戦配備済みだ。

両国は常時戦略核兵器（メガトンクラス核爆弾）を即座に発射できる態勢にあったのだ。もし核戦争が始まれば相手の核ミサイルが飛んでくる前に核ミサイルを発射するためである。そしていまこのような高度警戒態勢のもとで核弾頭を装備したICBMが発射されようとしているのだ。

さらに、両国とも長時間潜航し、いつどこでも水中から核弾頭ミサイルの発射可能な原子力潜水艦をも実戦就航させている。

このころ、米国は対都市反撃戦略もしくは柔軟反応戦略に立ち、そしてソ連は大量報復型戦略に立っていたが、最新核兵器体系の実戦配備によっ

て、両国とも、すでに先制第一撃攻撃を受けたのちでも、相手に対して十分な仕返しができる能力を備えていたのだった。

「では両国とも手を出すことができないということですか」

「まあ、そうなればいいがね……。ただ……」

遠藤はしばらく思案顔で彼をじっと見ている。

「ただ、なんですか……」

彼はじっと遠藤の視線を堪えていたが、つい口を出してしまう。遠藤が口を開くのを待った。

「まだ米国の方が圧倒的に多い。核爆弾の現在の保有数が……」

一説によると、ソ連が三〇〇発に対して米国は五〇〇〇発保有しているという。

「じゃ、米国が絶対有利じゃないですか」

「核戦争はそんな簡単なものではない」

「でもソ連艦が米軍の海上封鎖を突破すればどうなりますか。核の撃ち合いがはじまるのですか」

彼は突っ込む。

「軽々しく言うな。核の撃ち合いがはじまれば、結局、全面核戦争へと発展することになるんだぞ」

彼は遠藤の激しく怒った声をはじめて聞いた。

「……全面核戦争というと、それは……」

「そうだ。両国の保有する数百発数千発の核弾頭が相手国のターゲットめがけて一斉に飛び交うことになる。双方が保有する核爆弾を撃ち合えば、大量の放射性物質（死の灰）が大気中に放出される。そして地球のジェット気流にのって世界中が死の灰で汚染されることになるのだ。人類の終わりだ」

「……」

彼は互いに腹の探り合いをしている米ソ首脳を想像する。人類の命運は……と思いながらも、彼には遠藤のいう核戦争がなにか遠いよその国の、というより、地球上の出来事とは思えないのだ。それはまるで他人事のようなことに思えて仕方がなかった。

遠藤がいうように、たとえ米ソ双方が相互破壊戦略に立っているとしても、最後は双方とも自国の全滅を避ける行動をとることになるのではないか。そして結局、双方とも核戦争を回避しようとすることになり、どちらにしろ、両者は核戦争をはじめることができないのではないかと彼は思ってしまう。

「両国とも最初は全面戦争をさけて一、二発撃って相手の様子を見るかもしれない。全面戦争になるのは最後の最後だろうが、そのときは……」

遠藤は彼の思いを見透かすように言う。

「え？　すると、そのまえに……」

「そうだ。最初の第一発目は両国とも本土をターゲットからはずし、たとえば、試しに、まず同盟国の基地を狙うことになるかもしれない」

米ソが本国以外の同盟国に置いてある軍事基地がそれぞれの第一撃のターゲットにするというのだ。

「……」

「ニューヨークとかモスクワといった本土のターゲットではなく、第一撃はたとえば日本にある米軍基地とか、東欧にあるソ連軍基地に向けて打ち込む。そして互いに本気さを確認したうえで、双方が休戦の話し合いをはじめるようなシナリオを描いているかもしれないということだ」

「え？　なんで日本ですか。二度も核の洗礼を受けたのに、また実験台にさせられるのですか……」
「……」
遠藤は口を噤んだまま、遠くを見ている。
「一体、それはどこですか……」
彼は声を張り上げる。遠藤は彼をまじまじと見る。相変わらず口を固く閉ざしたままだった。
長い時間、二人は睨め合う。彼にはとても長い時間のように思えたが、数秒はほどだったかもしれない。
「それは……」
遠藤が口を開く。
「それは多分、横須賀基地かもしれない」
「横須賀……」
彼はしばらく口を開けたまま、遠藤を見ていた。
上空二〇〇〇メートルで一メガトンの水爆が爆発すると、爆風は半径七キロにおよび、熱線は同一八キロの致死領域をもたらすのだ。ＪＲ横須賀駅上空で爆発した場合、爆風は横須賀市全域から逗子市、久里浜、横浜市の一部に達し、熱線は横浜市の大半、藤沢市、鎌倉市を覆い尽くし、三浦半島の全域におよぶという。
彼は遠藤の説明に身を震わせた。脳裏に「第五福竜丸」に降り注いだ「ビキニの死の灰」が過る。彼は、東京、いや首都圏全域に放射性降下物が降り注ぎ、放射能に汚染されてしまうにちがいないと思った。

１３

信二郎はどうしていいのか分からなかった。
いつメガトン級の水爆を弾頭に付けた弾道ミサイルが飛んでくるのか。いやミサイルはすでに発射され、音速を超える超スピードで弾道を描いてターゲットを目指しているのかもしれない。
全然実感が湧かなかったが、もしかしたら、彼は自分の人生も終わりかと思う。広島と長崎では上空で爆発した原爆によってそれぞれ一〇万もの死者が出たというではないか。そのときの原爆は一三キロトン程度だった。これは、いまにも飛んでくるかもしれない一メガトンの水爆とは比べようにもないほど威力は小さかったのだ。とすれば、どこへ逃げても間に合わないことだろう。
彼は勤務時間が過ぎると、すぐ地下鉄を目指した。いつもなら、昼食のときと同様に、夕食も社員食堂で済ませ、そのまま夜間の定時制高校へ通うのだが、いまの彼にはそんな余裕はなかった。とにかく一刻も早く帰って、耕一郎の顔を見たかった。話をしたかった。
あのとき以来、行く宛てもない彼は哲雄の勧めに素直に従い、耕一郎の隣の部屋に居座り続けていたのだった。
彼は一度は住み込みの働き口を探して自立することを考えた。日本経済は高度成長期にあって、そのうえ、東京オリンピック（一九六四年開催）を控え、東京はその準備に大わらわであった。労働力は不足気味で、ことに若年労働力は引っ張りだこだった。その気になれば、いくらでも働き口はあった。だが彼は耕一郎の説得もあって、とにかく高校だけは卒業することにして、居候を続ける気になったのだった。

「生まれてこの方、おれはずっとここの居候なんだ。このまま、大学を出るまでここに居続けるつもりだ。きみもここにいて折角入った高校は卒業していたほうがいいと思うよ。機会があれば、大学もね。学歴のこともあるけど、生きていくうえでいろいろ学ぶことは必要なことだと思うんだ」

彼は耕一郎の親身ある意見にすっかりその気になった。だが誰にも言わなかったが、実は、彼には不安があった。頭蓋骨陥没のけが以来、頭がすっきりしないのだ。どことなく頭が重く、いつ破裂するか分からない時限爆弾をかかえているようだった。

こんなこともあって、彼は哲雄の勧めに甘え、あのとき以来、そのまま耕一郎の隣の部屋に居続けていた。

そろそろ退社時間がはじまるせいか、歩道には切れ目ない人の流れができていた。目の前に地下鉄の改札口へ通じる階段があった。いつもなら人の流れに流され、無意識にうちに下っていく階段だった。だが彼にはその階段がなぜかはじめて見るような気がした。

この入口はどこへ通じているのだろうか。階段を下りた地下にはなにがあるのか。

彼はふと、階段を急ぎ下りていく人びとの流れがまるでわれ先に地下の核シェルターへ潜り込もうとする人びとの群れのように見えた。

「あ、あの音は……」

彼は一瞬足を止め、空を見上げる。

つぎの瞬間、後ろから人波に押されるようにして階段へ落ちる。彼はとっさによろめいた身体を手摺り棒で支えると、注意してゆっくり階段を下りていく。

ふと見上げると、暗黒の口が開いている。彼は無我夢中で足を運ぶ。

「核ミサイルが飛んでくる。早く……」

彼はこころのなかで叫ぶ。

ホームに轟音を発して電車が入ってきた。扉が開いた。乗降客の人波にもまれながら、彼は電車に乗り込む。

電車は鉄輪を軋ませ、カーブを曲がると、スピードをあげた。轟音が耳をつんざく。彼は超音速の核ミサイルが頭上を通り過ぎていったように感じた。

核ミサイルが横須賀へ向かい、中心部上空で水爆を爆破させるのか。その瞬間、爆風と熱線が広がり、広範囲に高レベルの放射性降下物が降り注ぐ光景が走った。

彼は周りを見回す。一日の仕事に疲れた無数の生気のない顔があった。このまま死んでいくのだろうか。彼は自分の顔を思い浮かべる。彼らと同じように生気のない顔にちがいない。自分も彼らと一緒に死んでいくのか。

こう思いながらも、彼はまだ、こころのどこかで、他人事のような感じでいた。

電車は金属音を発し減速していく。蛍光灯の青白い光が線となって地下ホームを照らしている。ドアが開き、再び閉まる。電車はスピードを上げていく。

こんなことを何度か繰り返えされると、いつものように、彼は無意識で開いたドアからホームへ下りる。人の流れに従って階段を上る。改札口を通り抜け、街路へ向かう。

改札口を出て、広いホールを横切りる。駅舎のなかから赤みを帯びた薄闇が忍び寄る街路に出た。

彼は核ミサイルの軌跡を確かめるように空を見上げた。思わず、息を呑

む。空一面が真っ赤に染まっているではないか。
一瞬、三浦半島から藤沢、横浜一帯が火の海となっているのかと思った。空中に舞い上がった放射性降下物が風に乗って飛来し、都心の広範囲に降り落ちるにちがいない。彼は必死に駆ける。

14

「信か。どうしたんだ。今日は授業がないのか」
力一杯、玄関のドアを開けたとき、ガラス戸の向こうから声が飛んできた。耕一郎だった。いつものように玄関横のキッチンの食卓で夕食をとっているらしい。
「うん……」
信二郎はガラス戸を乱暴に開けてキッチンに飛び込み、ずっと左手で握りしめていた号外を食卓に投げ出しすと、水道蛇口からコップに水を注ぎ、一息で飲み干す。
「どうしたんだ。信……」
彼はこんな信二郎を見たことがなかった。いつも落ち着き払い、まわりに気をし、決して慌てふためくことはなかった。
信二郎は空になったコップに水を満たすと、食卓の椅子に身体を滑り込ませながら、号外を指差す。
「米、海上封鎖……、なんだ、これは……」
彼の目に号外の大きな活字が飛び込んだ。
「横須賀が……」
信二郎がコップを口に運びながら、言う。
「なんだって……。横須賀がどうした……」
「ターゲット……」
声がつづかない。信二郎は水をもう一口飲んだ。それから途切れ途切れに遠藤から聞いたことの一部始終を話し出す。
「ここも危ないのか……」
「多分……、死の灰が飛んでくるかも……」
「そうか。あのときの漁船と同じか……」
耕一郎が大きなため息をついた。
一九五四年のことだった。
マグロはえ縄漁船「第五福竜丸」がビキニ環礁近くで操業中のことだ。同年三月一日、甲板など船上一面が白い灰に覆われる。新型水爆の放射能灰だった。それは新型水爆の核実験のためにアメリカが設定した航行禁止の危険水域境界から東に約三五キロ（ビキニ島から東北東約一四〇キロ）の海域での出来事であったのだ。
翌日から乗組船員の多くに頭痛、吐き気、下痢などの症状が見られたが、そのとき被爆したひとりが死亡（九月二三日）する。新型水爆はとくに「死の灰」を大量に発生させるタイプのもので、広島の原爆の約一〇〇〇倍もある一五メガトン級だった。
「一寸待って……」
そそくさと食事を了え、彼は食器を洗うと、信二郎を促し、号外を手にして母屋に向かう。

15

「安里、日本が巻き込まれるかもしれないぞ」
ダイニングキッチンで婆やと夕食中の彼女の目の前に、これを読めというように、耕一郎は号外を突き出す。
「え？　突然なんなの……」
不意に現われたふたりの男に、安里は目を剥き、大きな目を向ける。
安里の剣幕に気勢を殺がれたのか、耕一郎は信二郎を振り向く。彼は仕方なく遠藤から聞いた話をもう一度繰り返す。
「なぜ、日本が巻き込まれることになるのよ。こんなの、米ソ間の問題でしょ」
安里が小鼻をぴくぴくさせた。
「さあさあ、ふたりとも立っていないで……」
婆やが食卓にお茶わんをふたつ並べ、お茶を注ぐ。耕一郎が空いている椅子に腰を下ろす。彼も隣の椅子を引く。お腹が鳴った。
「信は夕食まだだったのか。婆やさん……」
「はいはい、すぐ用意しますからね」
「済みません」
「哲雄さんは……」
耕一郎は安里に尋ねる。
「まだよ。信二郎くんはいつもより早いようだけど、なにかあったの……」
「緊急事態だ……」
安里は「緊急事態？」と小さな声で繰り返し、ちらっと号外に視線を走らせ、信二郎の顔を盗み見する。そしてふたたび箸を取る。
安里も婆やも関心がないのか顔色ひとつ変えない。彼はなんとなく拍子が抜けたように感じながら、目を吊り上げている耕一郎を見る。遠藤の真剣な面持ちが浮かぶ。ふたりの顔が重なった。
「横須賀には米国海軍施設（第七艦隊基地）があるんだ。核を搭載していると噂されている原子力空母や原子力潜水艦が寄港するからな。米ソが互いに本土は避け、手始めに、まずは外国にある基地をターゲットとするなら、まあ、そこがソ連側の第一撃の第一候補といえるかもしれない」
「ほんとうに横須賀が水爆攻撃されるというの……」
安里が箸をくわえたまま呟く。
「また空襲がはじまるのかい。まっぴらごめんだね。生きている間に、二度も空襲に遭うなんて……」
聞き耳を立てていた婆やが第二次世界大戦のときの東京大空襲を思い出していたらしい。
「なぜこんなことになるのよ」
安里が怒った顔をする。
彼は「ソ連がキューバで攻撃用ミサイル基地の建設を始めたから」と、聞きかじりしたことを繰り返そうとした。だが安里の輝きのない目を見て口を閉ざしてしまう。
横須賀へ向けたソ連の核ミサイルが全世界を巻き込む核戦争の引き金になるかもしれない。そして核全面戦争になれば、人類は絶滅の危機に曝されることになるのではないか。なぜこんなことになるのだ。
彼には安里の輝きを喪失した目がそう訴えているように見えた。
「確かに、ハタ迷惑な話だ。だがこうなった背景には米国とキューバとの間の歴史的地政的問題があったというべきじゃないかな」

耕一郎が吐き捨てるように言い、話をつづける。

一四九二年、コロンブスがスペインの領有を宣言して以来、キューバはスペインの植民地となったが、奴隷を労働力に砂糖産業を重点に進め、一八六〇年には生産量が世界第三位となった。独立戦争が繰り返されるなかで、一八九八年、米国は利権を守るため、スペインに宣戦布告。翌九九年、米国はキューバを占領、軍事暫定政府を樹立。そしてキューバは独立したものの、引き換えに米国に対して内政干渉権や外交指導権を与えるとともに、グアンタナモ湾海軍基地などの軍事施設を認める。

その後、一九〇二年、パルマ政権のとき、米国はキューバから撤退するが、干渉はつづく。一九二五年、大統領となったヘラルド・マチャードが独裁を強めていく。一九三三年、フルヘンシオ・バディスタが実権を握り、さらに独裁をつづける。

一九五九年、カストロらによる革命で、三〇年以上つづいた親米政権が打倒される。首相となったカストロは米国を訪問し、経済援助を要請するが、公式会談に当時のアイゼンハワー大統領は欠席、代わりにニクソン副大統領と会談したものの、「共産主義者」とのレッテルを貼られる。

これらの仕打ちに激怒したカストロは、以来、米国を敵視し、ソ連と接触し出す。キューバ革命政権と米国との対立がますます深まる。

一九六一年四月一七日、米国の支援を受けた反カストロ派（亡命キューバ人）による反革命軍がピッグス湾を侵攻するが失敗し、三日で撤退する（ピッグス湾事件）。その翌月、カストロ首相は社会主義国樹立を宣言し、キューバ革命政府は米国との関係を断絶する。

ピッグス湾事件の七ヵ月後、ケネディ政権はカストロ政権打倒を目指す極秘行動計画立案（マングース作戦）の準備を始める。①亡命キューバ人による破壊活動の実施、②ＣＩＡを中心とするカストロ暗殺計画などを内容とするもので、完了時期は一九六二年一〇月二〇日だった。

一方、政権を握ったカストロは、ソ連の支援を受けるようになる。そして翌六二年、ソ連はキューバ防衛のため、核ミサイル基地建設に着手したのだ。なお、この核ミサイル基地建設には、当時、ソ連の核ミサイル攻撃能力は米国に比べてはるかに劣勢であったことから、この不均衡さを是正する狙いもあったという。

「ホントに迷惑な話だわ。過去における米国とキューバ両国の関係がどうであれ、米国とソ連が核爆弾を用いるなんてどうかしている。一度核戦争を始めたら、第一撃だけで終わるわけないわ。そして必ず全面戦争へと発展するにちがいない。こんなことで人類全体を道連れにするなんてどうかしている。こんなことは誰にも許されることではないわ。どうして人間同士が戦争し殺し合わなければならないのかしら。主義や思想、宗教など、信条や信教が異なるからといって、なぜ戦争になるのよ。なぜ殺し合いをしなければならないの。同じ人間同士じゃないの。死にたい人はひとりで死ねばいい」

安里は捲し立てると、固く口を閉じた。皆が深い沈黙の深淵に沈み込んだように、もう誰も口を開こうとしなかった。

16

長い沈黙のなかで、耕一郎は脳裏に去来するさまざまな思いに身を任せていた。目の前の安里の白い顔が揺れ、箸を持つ小さいが形の整った白い

手の指が伸びたり縮んだりしている。

人間は生命ある有機体であり、顔があり、手足がある。かといって、顔があり、手足がある生命体のすべてが人間であるとは限らない。だが顔があり手足がある生命ある有機体で、同じ肉体を有している人間なのに、主義や思想、あるいは信仰する宗教の違いで戦争し殺し合いをする。人間とは一体なんだろうか。

食べ物が不足し、食糧の奪い合いの果てに、切羽詰まって殺し合うなら分からないでもない。それが主義や思想などのいわば単なる考え方の違いで生命を奪い合い、存在すら消してしまおうとするとはなぜか。

主義や思想、あるいは宗教が違えば、同じ人間ではないというのか。それとも顔や手足といった肉体的外貌は人間の属性ではなく、主義や思想といった観念的なものが人間の属性だというのだろうか。それとも顔や手足といった肉体を持ち、主義や思想といった観念的なものを備えているのが人間なのであろうか。

彼はこころのなかで、ひたすら人間とはなにかと問いつづける。過去の歴史を辿っても、人間はひたすら殺し合いをしてきた。とすると、殺し合いすることが人間の属性なのかもしれない。主義や思想といったものは、本当はどうでもよく、殺し合って相手を倒すことが第一で、それがすべてではないのか。主義や思想の違いといったものは、相手と闘うためのほんのきっかけにすぎないのかもしれない。かといって、殺し合うだけが人間の属性ではあるまい。とすれば、人間とはなにか

自分も人間であるなら、自分にも殺し合いする属性があるのか。自分もこころの奥底に殺し合いする闇が潜んでいる人間の一人なのか。彼は次第に、自分自身が人間であるのかさえ分からなくなっていく。ふと、人間であると思っていた自分がもしかしたら人間ではないのかもしれないと思った。

「なにを考えているんだ。明日があるから、もう帰る」

声がした。彼は声がしたほうに目を向ける。視線の先でぼやけていた信二郎に焦点が合い、顔の輪郭が次第に鮮明になっていく。彼は大きく頷くと、椅子から立ち上がる。

いつの間にか姿を消したらしく、安里の姿はなかった。シンクで洗い物をしている婆やと二言三言交わすと、ふたりは母屋を出た。

17

「明日は……」

「いつものとおりだ」

信二郎は耕一郎を振り返る。

「ミサイルは……」

「しょうがない。あれはもういい。休むわけにはいかないから……」

彼は足を止め、空を見上げた。耕一郎も足を止め、空を見る。

何年も手入れをしていない庭木が茂った大枝を勝手に伸ばし、空を狭めている。ふたりはしばらく、梢の隙間から覗く薄暗く光る小さな空を見つめていた。小さな空には底知れない暗い闇が訪れつつあった。

「そうするか……。どこにいても、人間死ぬときは死ぬからな……」

耕一郎が低い唸るような声で言う。

「うん……」

彼は短く返事する。「結局、全面戦争になるんだったらどこにいても同じだから」と言おうとしたが、なぜか途中で止め、口を閉ざしてしまう。
ふたりはしばらく空を見上げていた。彼はふと暗い闇の向こうが透けて見えるような気がした。そこにはなにがあるのだろうか。
「やはり人間は本質的に殺し合いする動物かもしれないな……」
突然、耕一郎の微かな声がした。小さな呟くような声だった。
「殺し合いする動物……」
彼は反射的に口の中で繰り返す。耕一郎の声を耳にしたとき、何年もまえの施設での出来事が鮮明に脳裏に浮かんだ。
いつも小さい子や弱いものをいじめる三歳年長の身体の大きい子と言い合いとなり、取っ組み合いのすえ組み敷かれ、顔面をぽかぽか殴られた。あげくの果てに、その子は顔に唾を吐き付けたのだ。彼は「いまに見ていろ」とこころに誓い、密かにナイフを用意し、仕返ししようと機会を待った。だが果たすまえにその子は不良仲間との喧嘩の末、殺されてしまった。
耕一郎は彼の声が聞こえなかったのか、黙って空を見上げている。彼は耕一郎が別のことを考えているらしいことに気付き、じっとつぎの言葉を待った。
「どこでどう間違ったのか知らないが……」
そのとき、背後から足音がした。耕一郎の声が近づいてくる足音に途切れる。
「なにをどう間違ったというのか」
彼は途切れた先を知りたかった。もともと口の中に篭る低い声だった。もしかしたら彼に聞き取れなかっただけかもしれない。
「おい、そこでなにしている……」
黒い影が近づいてきた。
「あ、先生……」
哲雄だった。
「兼尾、今日はどうしたんだ。教室では見かけなかったが……」
「実は、ソ連の核ミサイルが……」
彼は手短にキューバ事件で米ソが対峙し、横須賀がソ連の核のターゲットになるかもしれないことを話す。
「新聞社の連中がそんなことを……。それで授業をサボったというのか……」
哲雄は母屋へ歩み出す。ふたりは後を追い、ふたたび母屋へ向かう。

18

「人間は本質的に互いに殺し合いする動物じゃないんですか……」
婆やが用意した夕食を前にして盛んに箸を動かしている哲雄を正面から見据えながら、耕一郎は投げつけるように言う。哲雄はちらっと視線を動かしたが、相変わらず箸を動かし、口をもぐもぐさせている。
信二郎は耕一郎が暗くなりかけた空の下で言いかけていたことを思い浮かべ、耕一郎の横顔へ目を向ける。彼には耕一郎がなにを言いたいのか皆目見当がつかず、目の前で忙しく箸を口に運ぶ哲雄に見とれていた。話の続きがないのか、耕一郎の目も哲雄の箸の動きを追っている。
「他の動物では仲間同士では滅多に殺し合うことがないというが、人間同士がいともたやすく互いに殺し合うのはなぜかね」

哲雄は箸を置き、茶飲み茶わんに手を伸ばし一口含み、ゆっくり茶を飲み込むと、口を開いた。

「それは……」

耕一郎は口ごもる。

「これは仮説だがね。以前は他の動物でも殺し合いが行われていた。敵対するものは殺してしまう。仲間同士でもね。だがこれでは仲間が減り、種として生存するためには不利だ。そこで自滅を避けるため、個体数の少ない種で仲間同士の殺戮行為を止めていったのだろう。そして他の動物でも種の保存のために仲間同士で殺し合うことがなくなっていったのかもしれない」

哲雄は言い、そしてつづける。

地球上では生命誕生以来、生物界で何回かの大絶滅事件を経験しているが、そこを通り抜けた生命体には遺伝子情報が蓄積されて、これがＤＮＡとして受け継がれ、世代を超えて伝達されてきたのだ。記憶容量の小さい生物ではその多くは不用の情報として捨てられてしまったが、記憶容量が大きい人間ではすべての情報が捨てられずに貯め込まれているのではないか。そのなかに、敵対するものは殺してしまうという、他の生物ではすでに捨ててしまった遺伝子情報が残されており、それがいまもって仲間同士の殺戮へ駆り立てているのではないか。

「本当ですか。人間の記憶容量がずばぬけて大きいのが逆目に出ているというわけですか。それにしてもなぜ究極の武器を開発してまで闘おうとするのですか。自ら滅ぶ危険を冒してまでして……」

耕一郎の声には半信半疑の響きがあった。

「人間には闘争本能や敵対心が生まれながらに備わっているというのでしょうか。もしそうだとすれば、キューバ問題での米ソの殺し合いも避けられないことだということになるのですか」

彼はナイフを隠し持っていた自分と重ね、耕一郎を制するようにして短兵急に尋ねる。いまにもミサイルが飛んできそうなときにのんびりした議論は必要ないのだ。米ソ対立がどう展開するか知りたかった。彼はじっと哲雄を見る。

「耕一郎くんはどう思う？」

哲雄は信二郎の視線を避けるように、耕一郎を見る。

「え？　そうですね……」

耕一郎は驚き、一瞬言い淀む。そして「現在、互いにＩＣＢＭ（核弾道ミサイル）を高度警戒態勢で待機させている以上、米ソの睨め合いが長引けば長引くほど危険が増すことになるのではないですか」とつづける。

「ＩＣＢＭが即応態勢におかれているといっても、米ソが発射のボタンを押してからミサイルが本土のターゲットに着弾するのは約三〇分ぐらい後だ。まあ、双方には相手国のミサイル発射を確認する余裕がないわけではないだろう。それに双方とも、核ミサイルを搭載している爆撃機を警戒態勢においているし、相手国沿岸には双方の原子力潜水艦も待ち構えている。こんな状況だから、どちらかが折れるまで双方の一触即発の睨め合い状況がつづくことだろうな。だが……」

哲雄は一息を入れると、口を閉ざしたまま、しばらく虚空を見つめる。それから「自国を破滅させてまでして、他国を守ろうとするようなことはしないだろう」と呟くように言った。

19

「あら、お兄さん、お帰りなさい」
安里がドアを勢い良く開けて、ダイニングルームに入ってきた。そして哲雄と向かい合うようにテーブルに座っているふたりに目を向ける。
「重大なお話……」
安里は耕一郎を見、それから信二郎に目を移す。
「極めて重大な話だ。丁度いい。安里もここに座りなさい」
「キューバの話？」
「うん、そうだ。問題はこれからどうなるかだ。安里はどう思う？」
「そうね。遠くのことであまりピンとこないけど、核戦争にならないといいわね。もう戦争はまっぴら。でも、どうして男たちは戦争が好きなのかしら。第二次世界大戦（太平洋戦争）が終わったばかりなのに、すぐ米ソは冷戦状態になるし、朝鮮戦争を始める。こんどはキューバ戦争ということかしら……」
安里は他人事のように言ってのける。
「キューバ問題では米ソという超核兵器保有の軍事大国の対峙構図だから、一歩間違えれば、取り返しがつかないことになるんだぞ」
「かといって、安里にはどうこうできることじゃないし……」
「じゃ、安里はどうなっても構わないということか」
「ただ、そうならないようにお祈りすることしかできないということよ、この種の問題にはね」
安里はそう言うと、椅子から立ち上がり、ドアへ向かった。哲雄は目で安里の後姿を追い、ドアが閉まると、目の前のふたりに視線を移す。
「きみたちはどうなんだ。黙って見ているだけか。キューバ問題がどうのように推移するか分からないが、たとえ、核戦争が回避されたとしても、米ソ双方が戦略核兵器を即座に発射できる態勢をとりつづけている状況が簡単に改善されるとは思えない。とにかく、米ソがにらみ合う冷戦状態が解消されることは当分期待できないだろうからな」
哲雄はふたりの顔を交互に見比べる。
「われわれはいつ落下するか分からない『頭上の剣』のもとで生きるほかないということですか」
耕一郎は信二郎を振り返り、輝きのない暗い目を向ける。
「これじゃ、なんとか核戦争下でも生き残る方策を考えておくほかないんじゃないか。まだ死にたくないし……。でも間に合うかな」
信二郎は相づちを打つように言う。
しばらく沈黙がつづく。
哲雄は相変わらず、じっとふたりを見ている。ふたりも哲雄に顔を向けているものの、口は固く閉じたままだ。かといって、哲雄が口を開くのを待っているふうでもない。ただひたすら頭上を覆う暗闇に耐えているようであった。
「一体、誰が人類を絶滅させるような兵器を開発したんだ。このような状況では、核兵器を廃絶しなければいずれ人類は滅亡してしまう」
耕一郎の唸るような声が沈黙を破った。
「確かに、核兵器は究極の兵器だが、原子力の平和利用もはじまっている。だが問題があるが……」
哲雄は口籠り、言い渋る。
世界初の原爆を開発した米国は、早期に戦争（第二次世界大戦）を終結

させるという名目で、一九四五年八月、広島（同年同月六日）と長崎（九日）に原爆を投下する。戦後、米国のトルーマン政権は「核」機密を独占しようとしたものの、米ソ対立、東西冷戦の深刻化のなかで、ソ連も急速に原爆開発を進めていく。一九四九年原爆実験実施、五二年一一月に米国が湿式水爆実験をすると、翌五三年八月にソ連は乾式水爆実験に成功する。両国とも原爆よりもさらに巨大な破壊力をもつ水爆をもつことになった。こうして東西冷戦が緩和するまで、両国の限りない軍拡競争がつづく。

原子力は質量のエネルギーへの転換である。物質の質量が消失することによって巨大なエネルギーにかわるのだ。これには核分裂と核融合のふたつがある。前者ではエネルギーの放出にともない放射性物質が生じる。これは極めて危険なものだ。これに対して、後者では放射性物質を生じない。

ということで、水爆（水素もしくは重水素をヘリウムにかえて巨大なエネルギーをうる（原子核の融合）水素爆弾）は「きれいな」核爆弾と称されたこともあったが、核融合の際に必要な一〇〇〇万度以上の高温をうるために原子爆弾（核分裂）を引き金として用いているため、水爆も爆発によって放射性物質を大量にばらまく。水爆は決して「きれいな」爆弾ではないのである。

一方、五三年八月のソ連の水爆実験後、突然、時の米国大統領アイゼンハワーが国連総会（一九五三年一二月）で「アトムズ・フォー・ピース（平和のための原子力）」を提案する。これを受けて、原子力の平和利用の促進と核の軍事転用を防止する目的で、一九五七年に国連の専門機関として「国際原子力機構（ＩＡＥＡ）」が設立される。

これには核エネルギーの利用促進と核兵器の水平的拡散防止を目指す意図があったようだが、結果的に、かえって世界への核リスクの拡散を増長することになった。「戦争」までも貪り喰おうとする「効率性、完全競争、高成長」主義の経済システムのもとでは、リスクなんか眼中にないのだ。

これを契機に、軍事用原子力発電技術も民間へ払い下げられていく。爾後、世界で原子力の平和利用として原子力発電（原発）の開発が積極的に進められた。日本でも一九五四年三月、はじめて国会で原子力関係の予算が認められる。

ちなみに、こうして建設された原発は、ＩＡＥＡによると、二〇一〇年一月現在、稼働中の原発は全世界で約四四〇基に上るという。内訳は、一位の米国一〇四基、二位フランス五九基に次いで、日本は五四基だった。これに対し、核兵器については、二〇一五年一月現在、ストックホルム国際平和研究所の推定によると、世界の核弾頭保有数は米国が七二六〇、ロシア（旧ソ連）七五〇〇、英国二一五、フランス三〇〇、中国二六〇、インド九〇～一一〇、パキスタン一〇〇～一二〇、イスラエル八〇、北朝鮮六～八という（２０１５．６．１８付朝日新聞）。

「原子力の平和利用ですか。核はいじくればいじくるほど放射性廃棄物が増えるというじゃないですか。廃棄物の処理は本当に可能なんですか。まさか『毒を食わば皿までも』というんじゃないでしょうね。いくら平和利用をも併行してすすめてもそれで核の兵器としての軍事利用面が帳消しにはなりませんよ。核兵器が『高度警戒態勢』に置かれている限り、われわれ人類は存亡の脅威に常時曝されつづけているわけですが、さらに核の平和利用でさらに地球を汚染し、人類を放射能漬けにしようとしている。原子力エネルギーは極めて危険なエネルギーなのに、新しい未来のエネルギーなんて、一体、なにを考えているんですか。世界のリーダーたちが第一番に考えなければならないことは、まさか、人類をいかに早く絶滅させるか

ということではないはずでしょう」
耕一郎は吐き捨てる。
人間のやることには、いくら注意しても、事故がつきものだ。核兵器の維持管理や「高度警戒態勢」には不注意や偶然の事故は避けられない。何重にもチェックし、事故の発生を防ごうとしても、偶発的事故が生じる可能性が残る。
さらに、これに原子力の平和利用が加わるとどうなるか。原子力発電などの平和利用が拡がれば拡がるほど原子力事故の危険は増えることになるのだ。
完璧に訓練されたとはいえ、不完全な人間のやることだ。リスクが増えれば、事故の可能性は増える。たとえ人為的な事故を避けえても、困ったことに、原子力利用によって何万年も放射能を持ちつづける原子力のゴミ（放射性廃棄物）が幾何級数的に増えていくのだ。
このように、原子力のリスクには事故のような偶発的なものと常時増加しつづける放射性廃棄物との二種類にものがあるということだ。厄介なことに、放射性廃棄物のなかには、何万年、何十万年といった超長期にわたって厳重に管理しなければならない毒性の高い高レベルの放射性廃棄物も含まれている。
しかし、いまだに利用可能な放射能を減少させる技術がないのだ。そのため、放射性廃棄物を長時間隔離するほかない。こんなことが人間に期待できるのか。それも「効率性、完全競争、高成長」主義の経済システムのもとではなおのことだ。こんな厄介なことはいずれ忘れられ、完全に無視されることになるにちがいない。
「確かに、軍事用であれ民事用であれ、原子力利用にはリスクがともなう。それも超長期にわたるとてつもない大きなリスクだ。それは人類の存亡に関わるような巨大リスクでもある。人類が存続するためには、この技術は即座に封印すべきものだ。だがひとたびこの技術を掌中にした人類は決してこれを手放すことはしないだろう。いや、手放したくても手放せないだろう。現世第一の権力者たちは未来を深く考えることがないし、いまを生きている人びとも自分の生きている時間、あるいは自分の代と自分の子供の代までのごく短期間の時間範囲程度にしか思いを巡らすことはないのだからね。現代人には現世しか見えず、もはや未来を想像することすらできなくなっているのだ」
「先生、本当ですか。でもなぜ世界のリーダーたちがそんな巨大なリスクがあることを無視して暴走するのですか。これでは人類には未来がないということではないですか。未来がなければ生きていても意味がないではないですか。明日があるから生きて来れたのです。いや、明日があると信じて生きてきたのです。毎日を……」
信二郎の勢いよい声が次第に細まり、聞き取り難くなっていく。
「そうだね。明日がなければ生きていてもしょうがない。だが明日といっても、二、三日や数年先のことではなく、ぼくが言いたいのは、何世代も先の遠い未来も含めての人類の未来だよ。それも明るい未来ならともかく、さまざまなリスクに満ちた暗い未来しか見えなければ、誰もこれを見たいとは思わないのじゃないかな。冷静に考えれば、種としての人間の未来はどうなる……」
哲雄は突然喋るのを止めた。彼の目は虚空を彷徨い、しばらくして一点を凝視する。その様子はまるで「いまの人間には未来がないのだ。きみたちには人間の未来を取り戻そうとする意思があるかね」と言っているよう

に見えた。

20

信二郎は「明日があるから」と言って、耕一郎を残し、ひとり離れの部屋に戻ると、服を着たまま布団に横になった。一刻も早く眠りたかった。だが哲雄の顔が脳裏に焼き付いたように居座りつづけ、眠ろうとすればするほど頭が冴えてくるのだ。いくら哲雄を追い出そうとしても、脳裏に居座った哲雄は消えようとしない。

哲雄はしきりに口を動かし、彼に話しかけてるように見える。だが彼には哲雄がなにを話しているが全然分からなかった。

彼は狭い布団で輾転とし、眠りがやってくるのをひたすら待った。じっと我慢した。だが無駄だった。

とうとう彼は自分をもてあまし、布団から抜け、外へ出る。

母屋のダイニングルームの窓から光が洩れていた。哲雄と耕一郎はまだ話をしているのか。

一瞬、彼は母屋に足を向ける。眠れないからと言って、ふたりの話に加わろうかと思った。だがなぜかためらいがあった。どこかに、なんとなく自分はふたりとは違うという感覚があった。

彼は踵を返し、石造りの門柱の鉄扉を押した。薄暗い街灯が照らす街路には人影がなかった。

門の前で、一瞬立ち止まり、左右を見渡す。左の方に人影らしき影が動く。彼は人影を拒否するように、急いで右の方へ歩き出す。

彼はなにも考えずに歩きつづける。行く当てはなかった。ただひたすら足を動かす。そして次第にスピードを上げていった。

いつの間にか、脳裏から哲雄が消えていた。だが彼はそのことに頓着せず、ただ歩きつづける。

広い道路に出る。車道を車が疾走し、歩道には人影があった。交差点に出ると、彼は思い付くまま最初の曲り角を曲がっていく。

橋の上に出た。彼は鉄の欄干にもたれ、しばらくじっと辺りを見回す。下を覗く。闇のなかを流れている川面が点々と光っている。街の光が反射しているのだろうか。

川面を吹く風が運んでくるのか、時折、卵が腐ったような臭いがする。

人影が近づき、彼の横顔を覗き込み、やがて去っていく。

不意に、彼の脳裏に施設で過ごした幼い頃のことが浮かんだ。ひとつの出来事が浮かぶと、なんの脈絡もなく過ごした日々の出来事がつぎからつぎに浮かんでは消える。

盗み食いしたことがばれて、所長にこっぴどく怒られ、手足を縛られて物置きのなかに閉じ込められたこと、ときには意地悪な年長者に学校の宿題を書いたノートを隠されたり、その頁が破かれたりしたことなどなど、どうでもいいことが脳裏をかすめて消えていく。

かといって、奇妙なことに誰の顔も浮かんでこないのだ。一時、無性に母に会いたいと思ったことがあったが、いくら思ってみても母は夢にもあらわれることがなかった。母のことを全然知らない彼に母の夢を見ることは土台無理なことだった。

突然、夜の闇が消え、太陽が落ちてきたように天空が光かる。そして超高温の熱風が襲うのか。

一瞬、彼は立ったまま黒焦げになった人体が枯れ木のように燃え上がり、飛ばされていくのを見たように思った。
「虫けらのように殺されてたまるか……」
彼は腕を伸ばし、両手で闇を必死に掴まえ、引っかき回す。
さまざまな顔が浮かんでは一瞬も留まることもなく消えていく。仄かに待ち望んだ母もとうとう現われることもなかった。
「天涯孤独ということか……」
彼は闇に向かって呟く。微かな音すらない真空の闇が支配していた。そして息することも忘れ、彼はじっと立ち尽くしていた。

21

耕一郎は大きなテーブル越しに向かい合っている哲雄にぼんやりと目を向けたまま、突然立ち去っていった信二郎のことを思い浮かべていた。なぜ急に席を立ったのか、気がかりと言えば気がかりだったが、その日に限って、彼は後を追って離れに帰ろうという気が起こらなかった。
自分では明確に意識しているわけでないが、米ソの対峙からＩＣＢＭが飛び交い、もしかしたら、このまま死んでしまうかもしれないという思いが彼をそうさせたのかもしれない。
彼はこのまま死んでしまってもいいとは思わない。だが、成り行きからそうなるのなら仕方がないと思う。
彼はずっと、いつかきっと母が弟を連れて離れに戻ってくると思いつづけていた。だから、哲雄にこれまで何度も母屋に移るように云われても、頑にずっと離れに居つづけていたのだ。
戦争末期に母は大きなお腹を抱え、哲雄の母である姉のもとに転がり込み、双児の男の子を産んだ。母の姉も同じ頃女の子を産んだ。安里だ。だが安里を産んで間もなく肺結核を患っていることが分かり、隔離されて病院へ強制的に入院させられてしまう。
戦後の食糧難の時期に、母は双児のわが子のほかに、姉の子安里の面倒をも見なければならないことになった。母はしばらく三人の乳幼児を抱え奮闘したものの、ついに力つき、自分の子である双児のひとりを一時預かってもらおうと田舎へ帰る若い女中に託したのだった。だが、一年を過ぎた頃、女中の親元から娘が嫁に行くことになったと連絡があったという。
彼が三歳のころだった。母は幼い彼を婆やに預け、彼にはここで待っているようにと言い聞かせ、弟を迎えに出掛けていった。彼は離れで母の帰りを待った。すぐ戻ってくると思っていたし、母と住んでいた離れから母屋へ移れば母が帰ってこなくなるような気がしたからだ。だがいつまで待っても、母は戻ってくることはなかった。

22

「今次世界戦争を早期に終結させるために、アインシュタインなどの多くの有力な科学者が原子爆弾（原爆）の開発を進言する。その多くが積極的に協力して実戦用の原爆を早期に開発した。そして敗戦濃厚で降伏寸前の日本に対して、それも立て続けに二発、無防備の人口稠密な大都市である広島と長崎に原爆投下を命じたのは、時の大統領トルーマンだった……」

長い間沈黙していた哲雄が突然口を開き、静かな口調で言う。

アインシュタインは原爆開発には参加しなかったが、ナチスドイツが原爆開発研究をはじめたらしいことを知って、当時の米国大統領ルーズベルトに書簡を送り、ドイツより先に原爆を開発することを勧めたのだ。原爆はアインシュタインが一九〇六年に考えついた「物質とエネルギーが等価」であるという発見にもとづくものだった。

「……」

耕一郎は虚を衝かれたのか、一瞬きょとんとした目をして、しきりに口を動かすが声にならない。

「こんなことはきみも知っていることと思うが、ぼくが言いたいのは、人間とは皆同じような人間の面をしながら、実際はさまざまな仮面を被っている生きものだということだよ。そして人間にはその仮面が見えず、実際の人間とはどういう生きものなのかその本当の姿が見えないのかもしれない。いや、人間は皆が人間という生きものであるということを忘れているのか、それとも本当の姿を見ようとしないのか……」

「……」

「彼らにはようやく開発した超大量殺戮兵器である新型爆弾のターゲットとなるのは、まさしく人間でなく『敵』でしかなかったのだ。人間同士の戦争であっても、戦争の相手となる人間は人間でなく『敵』という仮面を被った生きものとしか認識しないのだ。人間には人間がそのときどきにかぶる仮面しか見えず、仮面に隠された人間を見ることはないのだ。トルーマンが戦争末期の日本に原爆投下を命じたのは、原爆開発のための多額な予算に対する議会からの責任追及を逃れたいためとか、共産主義体制のソ連に対する威嚇とか見せしめだったとかといわれているが、二発の原爆で二〇万人もの市民の生命を犠牲にして憚らない意識の根底には、戦争相手国の人間を人間とは見ず、人間の仮面を被った『敵』であり、虫けらのようなものにすぎないという認識があるように思えるが、勘ぐり過ぎかね……」

「……」

「ぼくはなにもアインシュタインやトルーマンたちに恨みつらみを言っているのではない。きみが人間同士の争いや戦争を根絶できないかとか、あるいはいたずらに巨大化高度化大量化を押し進めている現代科学技術文明を見直すべきだと考えているようだが、それなら世の中にはさまざな人間がいるということを決して忘れないでほしいと思うからだ。自分の考えに当て嵌まらない人間を排除したり、無視したり、蔑ろしては決してならない。すべて人間がやることだから。現実のさまざまなすべての人間を前提にしなければ人間同士の争いや戦争を根絶という目的を達成できないんだから。まあ、とにかく、人間とは得体のしれないものだということを前提に考えることにしてほしいのだよ。現代文明に代わる新しい地球文明を目指すなら、個々の人間ではなく、人類全体のためのあるべき文明を考えることだ。いや、新しい地球文明は人類だけを対象に考えるのではなく、もっと広く地球の生命体のすべてを対象にすべきかもしれない。人類は地球上の生物生態系によって育まれ、生かされているのだからね」

たとえ人間だけにしぼって考えてみても、同じ人間の範疇に属しながら、民族や皮膚の色、あるいは性別、国籍に違いがあるし、さらに、文化や慣習の違いもある。宗教や思想といったものから信仰や信条による違いも生じる。人間それぞれの価値観も違うのだ。

人間はみな同じような人間の姿恰好をしているものの、頭の中身は全然

違うのが現実の人間だ。それぞれが人間の姿のまま、それぞれがさまざまな価値観をもち、それぞれが違った仮面を被っているのだ。
「確かそうです。さまざまな人間がいる。かといって、このような人間の多様性を解消することは難しい。いや、到底解消するなんていうことはできない。このような人間がさまざまな国の構成員となっているのだから、国家間の争いがあっても当然なんですかね。国家間の争いや個々人間の対立は人間がいるかぎり永遠につづくことになるのですか……」
耕一郎の声には力がなかった。
「そのためには、とにかく、多様性という、いわば、それぞれの特異性を有する人間に共通する行動原理を考えることだね」
「人間それぞれの多様性を前提とする『共通の行動原理』ですか。大体、さまざまな考えや感情をもつ人間に互いが納得できる行動原理なんて考えられるのですか。そんなものはぼくには想像すらできません。絶対権力で強制することができればべつでしょうけど……」
「一見すればそのようだが、高次元から考えれば可能かも。でも……」
彼は一瞬口籠る。彼は迷う。耕一郎の顔を凝視したまま、迷いつづける。この数年、いや、耕一郎がものごころついて以来、彼はずっと迷いつづけていたのだった。
「そうか。もし人類全体に共通する行動原理が考えられるなら、無駄な争いを減少させることが可能かもしれませんね」
「そうかね。たとえそのような行動原理が見つかっても各人にどうやって遵守させるかが問題だ……」
彼はなぜか急に饒舌になった耕一郎に驚き、目を見張る。
「そうですよ。だからなんとかしてさまざまな人間が互いに納得できる『行動原理』を考え出すことですよ。誰もがそうしたいと思うことを行動基準とすればいいんだ。地球人類全体に共通する問題、たとえば人類の存続にかかわる緊迫した問題なんかあればみながその気になるんじゃないですか……」
「それはどうかな。そのような問題が出現したとしても、すべての人間がそう認識するかどうか。みなが共有できる認識の一致はなかなか難しいかもしれない。実際問題として、人間は相互信頼がなければ互いに協力しようという気にはならないだろうし、多様な人間間における相互信頼の形成は簡単でない。半ば強制的にやろうとしてもなかなかうまくいくものではないと思うな。それに忘れてはならないことは、人間同士が殺し合うような戦争でも利益をうるものがいるということだね。こういう連中は積極的に戦争を起こして憚らないのだ」
彼は自分でも分からず、急に、なぜか耕一郎をしきりに牽制するように言い張る。彼はアイゼンハワーが大統領を退くとき、その危険性を警告した「軍産学（議会）複合体」を思い浮かべていた。
第二次世界大戦中、戦争遂行のために軍需品の大量生産体制を確立した米国が、戦後これと軍部を直結させてさらに効率的な「軍産学（議会）複合体」をつくったのだいう。それは原爆開発のための「マンハッタン計画」にはしりをみることができるものの、これはあらゆる産業や団体を包含するようなきわめて広範な概念で、まさに、戦時の社会総ぐるみ態勢といった感があった。だがこれが第二次世界大戦が終った後もずっと生き続けているのだ。
耕一郎は彼のそんな思いには一切頓着せず、まるで問題が解けたようにけろりとしている。そして遠方に視線を向け、小刻みに頭を上下に動かし

ていた。

２３

哲雄はひとり悦に入っているような耕一郎の顔をじっと見ながら、突然、脳裏を過った長年の迷いがなぜ急に顔を出したのか、しきりに考えていた。いつ飛来するか分からない核弾道ミサイルに戦慄き、われを忘れたのか。それともこころのどこかで、死ぬ前に、いままで心の奥底に仕舞い込んでいた秘密を耕一郎に話しておくべきことだと思ったのだろうか。

彼には長い間、ひとりこころのなかに閉じ込めてきた秘密があった。父や母たちのことだった。耕一郎が何度せがんでも決して話すことはなかった。これを話せば、いくら母屋で一緒に暮らすようにと言っても頑に拒否しつづける耕一郎がさらに頑なになり、心を固く閉ざしてしまうのではないかとおそれたからでもあった。

日本が敗戦を迎える年の正月、一家は珍しくそろって雑煮を食べた。大学教授で病理研究者であった父市郎が請われて新設の総合病院を統括することになり、数年前ハルピンへ赴任した。それからというものは、家族がそろって正月を迎えることは滅多になかった。

いつも忙しいと言って、日本に帰ってきても翌日には帰っていった市郎が、そのときは一週間も家にいた。そして一日中書斎に閉じ篭り、病院から送ってきた木箱に入った資料を整理していた。それから再びハルピンへ帰っていった。

そのとき以来、彼は父の顔を見ていない。書斎に入ってみると、大型のロッカーには施錠してあり、壁際に積み重ねられた木箱は厳重に釘付けされてあった。

その年の夏、終戦を迎える二、三週前に、大きなお腹をした叔母が転がり込んだ。突然満州から帰ってきたのだった。

臨月状態で、そのままお産を迎えることになった。そのとき、母も臨月だった。間もなく、叔母が双子の男の子を生み、母が女の子安里を生んだ。

叔母と母は双子の姉妹で、叔母は病理研究者として、姉の夫である父のもとで研究に従事していたのだ。

叔母は転がり込んだとき以来寝泊まりしている使用人用の小さな離れで二人の男の子に乳を飲ませ、母は母屋で安里を育てていた。母屋には古株の女中である婆やともう一人の若い女中がいた。

しばらくして母が肺結核で隔離されることになった。感染症である肺結核については、当時、患者が発見され次第専門の病院（病棟）に隔離することになっていた。

終戦を迎え、日増しに食糧事情が逼迫していった。叔母は残された安里と双生児の二人の男の子の三人の赤児をかかえ、奮闘したものの、とうとう力つき、双生児の一人の男の子を田舎に帰ることになった若い女中に託すことにした。こうして叔母の手元に耕一郎と安里が残ったのだった。

それ以来、叔母は婆やと一緒に、耕一郎と安里を育てることになったのだった。

安里が三歳のころだったろうか、それとも、もっとあとのことだったか。

彼が大学から帰ると、叔母の姿がなかった。叔母が急に若い女中に託した子を迎えにいってくるいって出ていったという。

直ぐ帰ると思っていたが、それ以来、叔母は二度と姿を現すことがなかっ

た。二人の幼児は婆やが面倒見ることになった。父の乳母でもあった婆やはふたたび乳母業をやる羽目となった。

彼は何度か隔離病院に母を訪ねたことがある。なぜか母は決して顔を見せることがなかった。あとで病院を抜け出た母がその足で修道院に入ったことを知った。

しばらくして、叔母の後を追って、若い女中の故郷である田舎へ行ってみたが、どこを探してもそれらしい人を見つけ出すことができなかった。叔母らしいひとが訪ねてきたことを知っているひともひとりもいなかった。

母のことといい、叔母のことといい、分からないことだらけだった。母や叔母のことより、父のことがさらに分からないことが多かった。

ある日、大学から帰ると、婆やがヘンな人たちが来て、父の書斎から木箱を持っていったというのだ。書斎にあった木箱は殆ど持ち去られていた。立ち会った警官に尋ねると、ＧＨＱ（連合国軍総司令部）から派遣された取調官だったという。

それ以来、関係するところに出向き、父のことを尋ねて回った。そしておぼろげながら分かったことは、父が軍に依頼されて、さまざまな実験を行っていたらしいということであった。そのためか、戦後、戦犯として取り調べを受け、訴追されることになったらしいが、あるときから急に姿が見えなくなった。噂では米軍が父の実験成果に興味を持ち、本国へ連行していったらしいという。なかには父が米軍と取り引きしたのではないかというものもいた。

噂がどこまで真実か分からなかったが、父のことをさらに知りたかった。彼は父の書斎のなかをくまなく調べ回った。ＧＨＱが押収していったのか、ロッカーのなかは空っぽだったし、山積みの木箱も持ち去られて、手掛かりとなるものはなにも見い出すことはできなかった。

実験は全部が軍に頼まれてやったのか、それとも自分でやりたかったものもあったのか、その辺のことが知りたかった。いくら調べても分からなかった。だが父が自分で実験をやったことに変わりなかった。

震えを覚えた。いままでなんの疑いもなく、父親のいうままに医学の道を歩みかけていたが、一歩、身を引く思いだった。彼には面白ければのめり込んでしまうところがあった。そんな父親似の性格を呪ってもどうにもならない。専攻を医学から哲学に変えた。実験をしなくてすむかもしれないが、でも何も変わらなかった。どうすればいいのか迷った。迷えば迷うほど前に進むことができないのだ。

突然、ひとつの考えが閃いた。あのとき、叔母は若い女中に託したわが子を迎えに行くと言いながら、わが子を探しに行かず、父のもとへ行ったのではないか。いや、父から呼ばれて、父のもとへ行ったのかもしれない。

そういえば、ＭＰを連れて、ＧＨＱの取調官が来たのは、たしか、叔母が出ていったあとだった。とすると、叔母が父の資料と引き換えに父を救い出そうとしてＧＨＱへ働きかけ、父の元へ走ったのではないか。多分、そうにちがいない。

彼は思わず、深いため息をついた。突然、ひとつの考えが閃いた。

２４

「そうだったか……」

哲雄は思わず呟く。そしてそのときはじめて鋭い目でじっと見つめてい

る耕一郎に気付いた。
彼は耕一郎の突き刺さるような視線を感じながら、なんの前触れもなく、突然脳裏に浮かんだ考えを反芻する。
「あのとき、叔母さんはＧＨＱに呼び出されたにちがいない……」
「え？　母は弟を迎えに行ったんじゃなかったんですか」
耕一郎が怪訝そうな顔で詰問調で言う。
「……」
何も言わず、しばらく、彼はじっと耕一郎の顔を見つめる。それからおもむろに口を開いた。
「……多分、叔母さんは行けなかったんだろうな……」
「どうして……」
「叔母さんには最初からそのつもりがなかったと思う」
叔母はわが子を迎えに行ってくるといって出かけたが、そうではなくＧＨＱに呼び出されたのだ。そう言わなかったのは、ＧＨＱの箝口令のせいにちがいない。
「なぜですか。なぜ、弟を探しに行かなかったのですか」
「それは多分、戦争犯罪人として捕らわれている父をなんとかして救い出したかったからだと思うな。父が戦犯として処刑でもされれば、安里も戦犯の子となってしまうし、それに……」
彼は急に口を噤む。そしてふたたび耕一郎をじっと見つめる。叔母はわが子耕一郎が戦犯の子と指差されることに耐えられなかったにちがいないと思った。だが彼には未だ叔母が生んだ双子の父親が父だとは断定できずにいた。こころのどこかにそうにちがいないという思いがあったが、そう思いたくなかっただけかもしれない。このことを耕一郎のまえで口にすることに躊躇いがあったのだ。
たしかに、彼は身篭の叔母を見た瞬間、直感的にお腹の子がが父の子であると感じていたが、いままでそのことに触れることはなかった。故意に触れようとしなかった。いや触れたくなかった。
「……」
「父の書斎に木箱が山積みになっていたの見たことがあるだろう。あれのなかには父たちが行った実験のデータがびっしり詰まっていたのだよ」
父が身篭っていた叔母をわざわざ母のもとに住まわせることにしたのも、敗戦を控え、日本へ持ち帰った秘密資料の外部への散逸を恐れ、叔母に見張らせるためだったのだ。その資料には叔母が分担した実験のデータも含まれていたにちがいない。だから、叔母も父とともに戦争犯罪人として訴追されるおそれがあったのだ。それで叔母もしぶしぶ姉のいる屋敷内の離れで生活することにしたのだろう。
耕一郎はじっと哲雄を見ている。彼はいままで考えていたことを話しはじめる。口をついて出ることばがなぜかほとばしるように溢れた。
「すると……」
黙って聞いていた耕一郎がようやく口を開く。呻くような声だった。
「そうだ。多分……。叔母さんはきみたちを戦犯の子にさせたくなくて一世一代の賭けに出たのかもしれない」
彼には耕一郎の言いたいことはよく分かっていた。だが彼にもどう応えていいか分からない。曖昧に応えるほかなかった。
「……」
「そのデータは米国に限らず、ソ連や中国もほしいものだっただろう。そこでＧＨＱが先回りして動いたのだ。叔母がいまもって戻らないのは、叔

母も資料とともに、父のいる米国へ移送されているからにちがいない」
「母がアメリカへ……」
「そうだ。軍がふたりを匿っているのかもしれないな」
「戦犯のままで……」
「資料の提供と軍への協力と引き換えに、米軍はふたりの訴追を取り下げることにしたのかもしれない」
「すると、ふたりとも戦犯ではなくなったということですか。そんなことができるのですか……」
「ありうることだよ。六〇年安保のときの首相岸信介も戦犯として一九四六年から四八年まで、巣鴨プリズンに投獄されていたという例もあることだし……」
「もし、もう戦犯でないとしたら、母は日本に帰ってくることができるはずですね。何年もなるのに、まだ帰ってこないのはどうしてですかね……」
「さあ、どうかな。いまは、ふたりともどこにいるかも分からない。連絡のしようもない……。でもいつか探し出して、どうしても一度話を聞いてみたいと思っているが……」
彼には分からないことがあった。なぜ人間が、いや、大学教授である父が生体実験に夢中になったのか。たとえ軍の要請があったとしても、いつでもそのような実験を止めようと思えば止めることができると思えるのだが、なぜ夢中になって実験をつづけ、木箱何十個分もの大量のデータをとることになったのか、彼にはどうしても分からなかった。
単なる軍の要請のせいだけではないなにかが隠されているように思えるのだ。科学者としてまたとない機会に惑わされ、溺れていったのか。
もしかしたら、父にそのような行動を促した底には、アインシュタインらがなんらの躊躇もなく、超大量殺戮兵器である原子力爆弾の開発を推し進めたことと、どこか一脈通じるものがあるように思えるのだ。それはなぜか。単に、一日も早く戦争を終結させたいという思いよりも、誰よりも先に前へ進もうとする科学技術者の性なのか、それとも科学技術のもつ魔性がそうさせるのか。
彼にはなんとなく、現代の科学技術が人間の意思や思いを離れて独自の歩みをはじめているように思えて仕方がなかった。

25

耕一郎は夜遅く、離れに戻った。信二郎の姿はなかった。
彼はベッドに横になったが、頭が冴えてなかなか寝つけなかった。
母を待っていつの間にかもう十数年も経ってしまっているのに、母が出ていったのは昨日のように思えるのだった。
その日は婆やが彼と安里を近くの公園に連れ出していた。帰ってきたとき、すでに、母の姿はなかった。だがいつの間にか、彼の頭のなかに、母が出かけるときいつも言っていた「直ぐ帰ってくるからいい子にしていてね」ということばと手を振りながら出ていく母の姿がセットとなった定着していたのだ。
彼は自分を持て余し、ベッドのうえで輾転とする。
「戦争犯罪人だったのか……」
彼はか細い声で呟く。わが子を探しに行ったはずの母が伯父のもとへ走ったとは、彼には衝撃だった。たとえわが子に戦犯の子の汚名を着せたくな

いという思いからだとしても、彼にはどうしても許せなかった。彼から弟を奪い取り、母も去っていった。

母と過ごした離れで十何年も待っていたのに、いま、彼はひとりぽっちだった。

突然、信二郎の声がした。彼は急いで飛び起きる。玄関へ走り、ドアを開く。誰もいない。彼は外へ出て、辺りを見回す。どこにも人影はなかった。

彼は玄関のまえで、ドアに手をかけたまま、耳を澄まし、しばらく立ち尽くしていた。人の気配はなく、音ひとつしない。

ドアに閉め、反射的に錠をかけ、ベッドに戻る。

あれは空耳だったのか。彼は大きなため息を吐く。信二郎を双子の弟かもしれないと思うことがあった。いや、そうあって欲しいとさえ思っていた。

だが彼はもう双子の弟探しを止めようと思った。探し出しても、もし自分の母が戦犯のひとりだと分かればショックにちがいないし、母もわが子に戦犯の子の汚名を着せたくないのであれば、いまさら強いて戦犯の子を探すようなことをしなくてもいいと思うのだった。

彼は両眼を大きく見開いたまま、暗闇の詰まった空間を見つめていた。長年居座っていた空間なのに、なぜか急によそよそしく感じる。この離れに居なければ、母が帰ってきたとき母が迷うだろうと思い、ここを離れずにいたのだった。ここにいれば、母がきっと帰ってくると信じていたのだ。彼がここにいなければ母は戻ってくることはないのだとさえ思い詰めていたのだった。

突然、ただ一人荒野に放り出され、ひとり取り残されてような寂しさが襲ってきた。彼はようやく母に捨てられたことを悟った。母は弟を捨て、彼をも捨てて愛人のもとへ旅立っていったのだ。

何年も待っていたのに、母は二度と彼のまえに姿を現すことはないのだ。彼のこころは、まるで空気の抜けたゴム風船のように、すっかりしぼんでしまっていた。彼はぐったりして、ベッドに身体を埋めていった。

すべてを忘れてしまいたかった。いっそのこと、ミサイルが飛んできて、身も心も木端微塵にしてくれればいいとさえ思った。

それにしても、いかなる理由で、母は生体実験に手を貸すことになったのか。軍の要請があったししても、捕虜の敵兵をモルモット代わりにするとはどういうことか。それも木箱何十個分ものデータの生体実験を行なったのだ。

その責任者が伯父だったのか。そして母はその伯父のもとへ走ったのか。

さらにその考えを推し進めていくと、彼はどうしても信じたくない事実が自分に向かって突き進んでくるのを感じた。早く眠るのだ。彼は目を固く閉じ、眠りへの暗示をかける。

浅い眠りに落ちた。だが目はらんらんと輝き、頭はますます冴えわたる。

ひとりの男は大股で彼に向かって一歩一歩近づいてきた。彼は後ずさりして逃げようとするが、身体が思うように動かない。

「ああ……。あなたはだれ……」

「お前の……」

彼は一目散に走り出す。

その夜、とうとう信二郎は帰ってこなかった。

暗殺された。キューバ危機の翌年だった。また、フルシチョフ首相も二年後失脚する。

26

三人はその週を、ばらばらな場所で、不安のなかで過ごした。

一〇月二三日（火）　ケネディ大統領は前日の核ミサイル搬送中のソ連艦の海上封鎖宣言につづき、艦船の立ち入り検査を発表。だが意思表示のみで、実行宣言は延期する。

一〇月二四日（水）　朝、ソ連政府は米の立ち入り検査宣言を正式に拒絶するが、キューバへ向かっていたソ連船の一部がコースを変える。

一〇月二五日（木）　米海軍、ソ連船との最初の接触（午後八時）。（国連安全保障理事会で米ソ対決、キューバのミサイル基地の証拠写真のテレビ中継）

一〇月二六日（金）　フルシチョフ首相、米国がキューバに侵攻しなければミサイル基地を撤去すると提案。

一〇月二七日（土）　フルシチョフ首相、この提案に、トルコの米ミサイルの撤去をくわえる。同日、キューバ基地のソ連対空ミサイルが米国U2機を撃墜する一方、米国U2機が空中サンプル収集中にソ連国境を誤って侵犯し、ソ連戦闘機の緊急発進を招く。

一〇月二八日（日）　ケネディ大統領、キューバ不侵攻を受け入れ、フルシチョフ首相、キューバからミサイル撤去を受け入れる。

キューバ危機はどうにか瀬戸際で収拾され、これを教訓に、部分的核実験禁止条約が調印された。また、米ソ間にホットライン（首脳間の直通電話）が設置された。ケネディ大統領は一九六三年十一月二十二日ダラスで

第三章

27

現在、米ソ共に全世界の人びとを何回も殺すことができるほどの核弾頭を保有しており、双方が全面核戦争に入れば、人類は確実に絶滅することになる。両者とも相互破壊戦略に立つならば、巨大な破壊力をもつ水爆核弾頭を搭載するＩＣＢＭを撃ち合うことになり、敵をやっつけるだけでなく、自国をも破壊し、全世界を破滅に導くことになるのだ。これが人類自ら開発した超兵器による当然の帰結にほかならない。

これがキューバ事件の教訓だった。

まえにも述べたが、それよりかなり前、五三年八月のソ連水爆実験後、突然、時の米国大統領アイゼンハワーが国連総会（一九五三年一二月）で「アトムズ・フォー・ピース（平和のための原子力）」を提案する。これを受けて、原子力の平和利用の促進と核の軍事転用を防止する目的で、一九五七年に国連の専門機関として「国際原子力機構（ＩＡＥＡ）」が設立される。

これを契機に、米国では軍事用原子力発電技術が民間へ払い下げられていく。爾後、世界で原子力の平和利用として先進諸国を中心に原子力発電（原発）の開発が積極的に進められた。日本でもこれを受けて、一九五四年三月、はじめて国会で原子力関係の予算が認められ、原子力エネルギー時代へと入っていく。

一九六〇年代には先進諸国を中心に新しいエネルギー源として原子力利用が積極的に進められ、こうして世界はエネルギー新時代へと突入するものの、原子力発電（原発）の開発にともなう原子力関連事業、たとえばウラン鉱の採掘精錬から原子炉用燃料棒の製造、使用済み燃料の再処理などからの大量の放射性廃棄物による負の面も巨大化し、放射能が地球上を広く汚染しはじめていく。

一九七〇年の国連総会本会議で、原子力平和利用から生じる環境汚染について「原子力放射能の影響に関する国連科学委員会」の検討を求める決議案が満場一致で採択された。同科学委員会報告では「原子力平和利用による放射能の人体におよぼす脅威はすでに核実験にともなう放射能の脅威を上回った」と指摘している。

アイゼンハワー大統領の国連総会（一九五三年一二月）で「アトムズ・フォー・ピース（平和のための原子力）」の提案には、核エネルギーの利用促進のほかに、ソ連の水爆開発を受けて、核兵器の水平的拡散防止を目指す意図があったというが、結果的に、これはかえって世界への核リスクの拡散を増長することになった。とはいっても、「戦争」までも貪り喰おうとする「効率第一、自由競争、高成長」主義の経済システムのもとでは、利益に目がくらみ、原発開発にともなうリスクなんか眼中になかったのだろうか。ちなみに、こうして建設された原発は、六〇年代から七〇年代にかけて全世界で二、三〇〇基を超えると思われる。

日本では、一九六六年に原発第一号が運転開始した。この発電炉は英国原子力公社のＧＣＲだったが、それ以後は殆どが米国の軽水炉で、モルガン財閥系のＧＥ社のＢＷＲか、メロン財閥系のＷＨ（ウェスチング・ハウス）のＰＷＲとなる。

日本側は米企業と共同出資か合弁会社を通して提携し、ＧＥと三井系企業、ＷＨと三菱系企業との組み合わせで、日本での原発開発を二分してきた。ちなみに、原発を設置する電力会社の東日本側（東電ほか）がＧＥ系であり、西日本側（関電ほか）がＷＨ系である。

このように、日本の原発開発は米国と深い関係のもとで進められてきたのである。そしてそれには原子炉の燃料である濃縮ウランの供給まで含んでいるのだ。

こうして開発が進められた日本の原発は、七〇年代に入ってつぎつぎと運転を開始する。七〇年三月、ＢＷＲの敦賀原発運転開始。同年一一月、ＰＷＲの美浜１号……。

なお、ＩＡＥＡによると、二〇一〇年一月現在稼働中の原発は全世界で約四四〇基に上るという。一位の米国一〇四基、二位フランス五九基に次いで、三位日本は五四基である。残りの約二二〇基がドイツや北欧諸国、ロシア（ソ連）、中国、韓国などに散在する。

２８

一九七六年二月二日、突然、ＧＥ社の管理職の三技師が示し合わせたように辞表を提出する。それは米国最大手原発メーカーであるＧＥ社のベテラン高級技術幹部であるデール・Ｇ・ブライデンボー、リチャード・Ｂ・ハバード、グレゴリー・Ｃ・マイナーの三技師だった。そして三人は辞表を出す約三ヵ月前たまたま一緒になったおりに共同の行動を起こす決意をしたという。それは「原子炉の安全性に対する不安」から「原子炉が人類を脅かす」と憂慮しての行動だった。

当時、デール・Ｇ・ブライデンボーはＧＥ社核エネルギー部運転評価・改善マネージャーであり、リチャード・Ｂ・ハバードはＧＥ社核エネルギー制御機器部品質保証マネージャーである。もうひとりはグレゴリー・Ｃ・マイナーでＧＥ社核エネルギー部高等制御装置運転マネージャーだった。

同年二月十八日、三人は米上下両院合同原子力委員会の求めに応じて証言する。以下は、朝日ジャーナル誌に三回にわたり訳出掲載された「ＧＥ社を辞任した三技師の議会証言『米上下両院合同原子力委員会記録』」（「地球上の生命を脅かす危険（一九七六年五月二八日号）」「営利のため安全性は等閑視（同六月四日号）」「原発事故は必ず起こる（同六月十一号）」）に基づく。

三技師のＧＥ社での略歴はつぎのとおりである。

デール・Ｇ・ブライデンボー（核エネルギー部運転評価・改善マネージャー）はＧＥ社に一九五三年から二三年間在社し、五八年から原発部門に関係する。辞職までの一〇ヵ月間、ＢＷＲ（沸騰水型原子炉）の運転・監視、計測装置の開発・管理およびその運転技術の向上改善等に従事していた。

リチャード・Ｂ・ハバード（核エネルギー制御機器部品質保証マネージャー）はＧＥ社在職一六年間を通じて、原発関連の各種機器類、制御装置の組み立て、製造・販売など、多様な技術、監視部門で活躍する。

グレゴリー・Ｃ・マイナー（核エネルギー部高等制御装置運転マネージャー）は在職の一六年間を通じてエネルギー装置の販売、設計、建造、制御機

器の操作・運転に従事していた。

米上下両院合同原子力委員会の証言は、技術に関わる問題と管理体制に関わる問題に大別され、詳細かつ多岐にわたる。証言は、Ⅰはじめに　Ⅱ核エネルギー　Ⅲ原子力規制委の品質保証計画　Ⅳ運転中の操作ミス　Ⅴ増える放射能の被爆　Ⅵ旧型原子炉の安全性　Ⅶ要約と勧告　の七部からなるが、証言の核心は、「事故は確実に起こる。あとに残された疑問はいつ、どこで、ということだけだ」という点だ。そしてこれが彼らの経験に裏打ちされた問題意識でもあったということであろう。以下簡単に証言内容を見ておく。

Ⅰはじめに

当初、三人とも「原子力という新しい技術に興奮し、自分たちも人類に多大の恩恵をもたらす仕事」に従事する喜びを感じていたが、「三人合わせて四〇年以上にわたる原子力発電プラントの販売、製造、建設、運転操作といったあらゆる方面の経験を積んでそうした未来像は色あせたものになっている」のだ。一九七六年二月二日、三人はGE社を辞任したが、それは「核分裂のエネルギーを、今後も開発、拡充することに、これ以上われわれの生涯をかけることができなくなった」からであり、そしてまた「核分裂エネルギー開発のシステムは、地球上の生命の存在そのものを脅かすほど危険なものとなったと、信じるようになった」からである。

三人が辞職したのも「多年にわたって原子力産業に従事した間に知り得た原子力のあらゆる側面と危険を国民に知らせ、全面的なコミットをするため」であるという。

Ⅱ核エネルギー

三人は「これまでの経験を通じて、原子力発電所の安全に重大な影響を及ぼす多くの設計上の欠陥や未解決の規制上の問題が存在する」と言い、設計上の欠陥の例として「軽水炉（BWR、PWRとも）は多発する炉心内の流体振動問題によって悩まされてきた」こと、そしてこれによって「スパージャーの故障」や「LPRMの故障」が起こることがある。「炉心スプレーの有効性」や「サイクル末期のスクラム反応度効果」といったものも原子炉の安全性の疑惑として考えられるものである。また制御棒については、「制御棒の寿命」や「制御棒駆動装置の材料上の欠陥（コレット・シリンダー管の亀裂）」があり、ほかに、「制御棒落下（BWRの場合、PWRでは逸出）事故」が原子炉の安全上の問題となる。さらに、原子炉圧力容器の信頼性に関しては、「圧力容器壁と生体遮蔽壁の間でのノズル破断」「圧力容器支持台の加速現象」「コンクリート支持台の信頼性」が問題である。

格納容器に関しては、まず、一次格納容器の問題がある。一次格納容器はプラントの稼働中に起こる一次系配管の「ギロチン破断」などの際の対策のための耐圧構造物である。事故の際には一次格納容器を構成する各種構造物や部品にそれぞれ大きな流体力学的荷重が加わるが、設計においてこれらの荷重現象について十分考慮されていない。ことに複合的な荷重現象や「逃がし安全弁が開かれっ放しになった状態での荷重などについてはいっさい考慮がはらわれていない」。そのほか、「格納容器の適性に関して厳しい検討を加えなければならなぬ問題」は「一次格納容器の疲労寿命」に関するものである。また、一次格納容器の性能に影響を及ぼす「事故時の圧力抑制現象のテストも十分なされていない」。「格納容器貫通部の漏洩対策」「ウェット・ウエル／ドライ・ウエルの真空破壊器」からの漏洩

も問題である。

一次格納容器については、「米国で運転中のＢＷＲ（沸騰水型炉）のほとんどすべての一次格納容器には重大な設計上の欠陥をもっている」し、「ＰＷＲ（加圧水型炉）にも同じような問題点と欠陥があることは確かである」という。

その他の機器についても、「信頼性と破損について問題のあることはわかっている」とし、例として、すべての型式の弁、熱交換器、主復水器、弁およびポンプの漏洩対策、検査技術をあげる。

これらのほかに、材料破損が問題である。それに、核燃料貯蔵設備についても、「新燃料貯蔵庫内での臨界の安全性に関すること」や「使用済み燃料の貯蔵」など、考慮すべき問題がある。

以上が核エネルギー関連の機器や部品等のハードの問題である。原発システム全体に関わるソフトの問題も安全性上重要であるが、これについては省略する。

Ⅲ原子力規制委の品質保証計画（略）

Ⅳ運転中の操作ミス

「原子力発電では人間の操作ミスによる事故を防ぐような設計は不可能」である。

Ⅴ増える放射能の被爆

「原子力発電所の運転、保守、除染作業によって作業員の被爆線量は増加し、放射線レベルは増大し続けている」のである。

Ⅵ旧型原子炉の安全性（略）

Ⅶ要約と勧告

三人は「原子力発電所を引き続き運転すると、公衆に深刻な危険をもたらすと信じる」という。

「設計上の欠陥と不備のなかには、それだけで安全上の重大な危険を生じさせるものがいくつかある」し、「すべての設計上の欠陥と原子力発電所の設計、建設、運転における不備の累積的な効果によって、原子力発電所の事故は、われわれの意見によれば、確実に起きるということである。ただ、わからないのは、いつ、どこでか、ということだけだ」と言い、一五項目について改善・見直し・研究を勧告する。概要は以下のとおり。

1、マークⅠ型圧力抑制格納容器の再評価。なおこの時点で圧力格納容器はマークⅢ型まで設計されている。

2、流体振動が圧力容器内の機器におよぼす影響の徹底的な再検討。

3、高温の炉心に注がれた冷却水の分布についての研究。

4、燃料サイクル末期のスクラム反応度のあらゆる効果についての研究。

5、４の効果が洗われるのに備えての十分な対策。

6、「制御棒落下」事故は徹底的に再評価し、事故防止、軽減できるシステムの開発。

7、圧力容器の健全性についての現在の研究の強化。

8、マークⅠ型圧力抑制格納容器システムについての今後の研究は、地震による水の揺動の効果等に重点おくこと。

9、安全関連項目について、第三者による詳細な検査プログラムをただちに実施すべきである。

10、原子力規制委の規則（略）。

11、原子力規制委は、規律ある規制委管理システムを打ち出すこと。

12、運転者の再訓練。

13、作業員の被爆量増大の問題に研究。

１４、旧式プラントに遡及評価。
１５、設計上のすべての問題が解決されるまで、現在建設中のプラントが運転され、放射性になることを許可すべきでないこと。
以上が証言のごく大まかな内容である。
なお、三人が辞表を出した一九七六年二月二日時点で、日本では、ＢＷＲ、ＰＷＲ合わせて、一〇基の発電用軽水炉が運転されており、同年内にさらにＰＷＲの二基が運転開始する予定。これに建設中のものが一一基あった。運転、建設中両方合わせて、ＧＥのＢＷＲは一一基である。

２９

一九七九年三月、米国ペンシルベニア州で原子力発電所の大事故が発生する。
三月二八日未明、サスケハナ川の細長い中州にあるスリーマイル島原子力発電所２号機の炉心が溶融したのだ。その後の調査によると「原子炉内で核燃料の約五七パーセントが溶けていた」という。
原子力発電所として世界最初の大事故であった。
この事故は国際原子力事象評価尺度（INES）（国際原子力機構と経済協力開発機構原子力機関により一九九一年試験運用、一九九二年正式採用）でレベル５に分類される事故だった。レベル５は「事業所外への大きなリスク（放射性物質の限定的な外部放出、ヨウ素131等価で数百から数千テラベクレル）を伴う」事故である。なお、この基準による最悪の事故はレベル７で「深刻な事故」である。
事故（スリーマイル島原発事故）は三月二八日午前四時三七分（現地時間）に発生した。原因は全くの人為ミスだった。ＧＥ社の三技師辞任から三年後のことだった。以下、事故概要は「「スリーマイル島原発の炉心が溶けた」週刊20世紀１９７９（第３８号）朝日新聞社」による。
事故を起こしたのは当該原子力発電所の２号機で、原子炉は出力九六万キロワットの加圧型軽水炉（ＰＷＲ）である。まだ、営業運転を開始してから三ヶ月はどしか経っていず、当日は定格出力の九七パーセントで営業運転中であった。
事故は「２次冷却水のポンプが単純な作業ミスのために止まったことから始まった」という。そして「開いているべき弁が閉じていたり、炉心の圧力が高くなり過ぎた場合に開いて圧力を逃がす弁が、圧力が下がっても故障のため閉じなかったりなどのミスや故障が重なり、放射能を帯びた冷却水が建屋内にあふれ出した」のだ。
このうえ、さらにミスを重ねる。燃料が溶け出したのは、「作動していた緊急炉心冷却装置を運転員が誤って止め、炉心が空焚き状態になった」からだった。炉心で生じた水素の泡が爆発を誘発する恐れがあったが、「人々が固唾をのんで見守る」なか「幸い泡は消え」、圧力容器も無事だった。もし爆発し、炉心を包む格納容器が壊れると、大量の放射能が放出し、多大な被害が出る恐れがあった。後日の調査では、最悪事態の直前まで来ていたという。
それでも「三〇日、原子力発電所の上空で高濃度の放射能が検出され、州知事の勧告で四万人以上が避難した」り、「事故後、周辺地域では住民に甲状腺異常やがんが頻発し、野鳥の大量死、乳牛の死・流産や変死、草

木が枯れたり変形するなどの異常が現れた」のである。

30

一九八六年四月、旧ソビエト連邦（現ウクライナ）のチェルノブイリ原子力発電所で深刻な事故が発生する。世界最大の原子力発電所事故の一つであり、国際原子力事象評価尺度（INES）で最悪のレベル7に分類される深刻な事故であった。レベル7には、ヨウ素131等価で数万テラベクレル以上の放射性物質の事業所外への大量放出があり、原子炉や放射性物質障壁の壊滅・再建不能な事故が該当する。

以下の事故概要は、「フリー百科事典ウィキペディアの『チェルノブイリ原子力発電所事故』（https://ja.wikipedia.org/wiki/チェルノブイリ原子力発電所事故）」と「今中哲二（京都大学原子炉実験所）『チェルノブイリ原子力発電所事故』」（http://www.rri.kyoto-u.a.c.jp/NSRG/Chernobyl/Henc.html）に基づく。

チェルノブイリ原子力発電所は旧ソ連ウクライナ共和国の首都キエフ北方約一〇〇キロに位置し、当時、四基の黒鉛減速沸騰軽水圧力管型原子炉（RBMK）が稼働していたが、当日は「保守点検のため、前日より原子炉停止作業中であった4号炉（出力100万キロワット）で四月二六日午前一時二三分（モスクワ時間）急激な出力上昇をもたらす暴走事故が発生し爆発に至った」のだった。

この爆発で「原子炉と建屋は一瞬のうちに破壊され（夜空に花火が上がったようであった）、爆発とそれに引き続いた火災にともない、約一週間にわたって大量の放射能放出が継続した」。

「最初の放射能雲は西から北西方向に流され」、「バルト海へ向かった」。

「チェルノブイリからの放射能は、四月末までにヨーロッパ各地」で、「五月上旬にかけて北半球のほぼ全域で観測された」。また、約三年後の一九八九年二月に初めて公表された汚染地図で、高汚染地域が原発から三〇〇キロメーターも離れた地域まで広がっており、ベラルーシ共和国では新たに一一万人もの人々の移住を決定した。

ソ連政府が一九八六年八月にIAEA（国際原子力機関）に提出した事故報告によると、「五月六日になって大量の放射能放出が終わった」という。その後、原子炉と建家をコンクリートで覆う「石棺」が建設される一方、事故をまぬかれた1、2、3号炉の復旧作業も進められ、順次、運転再開する。だが当時建設中だった5、6号炉は建設中止となる。

事故処理作業にはソ連各地から軍隊や作業員が六〇万人から八〇万人も動員されたが、放射能の大量被爆による急性障害が原発職員や消防士（二〇〇名あまり）に出た。事故の翌日から五月六日にかけて避難した近隣住民は約一三万五〇〇〇人に達した。

レベル7の深刻な事故の原因はなんであったのか。「保守点検のため、前日より原子炉停止作業中であった4号炉」がなぜ事故を起こしたのか。

事故四ヶ月後のソ連政府報告（1986年8月）では「運転員による数々の規則違反」が重なったからだとして、「制御棒を引き抜き過ぎの状態での運転」などの違反を上げ、事故の原因を運転員のミスによるものとしていた。これに対して、ソ連最高会議のチェルノブイリ事故調査委員会の要

請により見直しを行ったソ連原子力産業安全監視委員会特別委員会の一九九一年一月の報告では、「事故の原因は、原子炉の欠陥とそれを知る立場にありながら、しかるべき対策をとらなかった責任当局にある」となった。「原子炉の欠陥」と指摘されたチェルノブイリ原発4号炉は、ソ連独自のＲＢＭＫ型であり、このタイプの原子炉は「原爆用のプルトニウム製造のために開発された」ものだった。その構造は円筒状に積み上げた黒鉛ブロックの一七〇〇本もの垂直貫通穴に、「燃料集合体を含む圧力チャンネル管を差し込み、管の中で冷却水を沸騰させる仕組み」であるという。

4号炉は事故当日の一九八六年四月二六日に「定期保守のためシャットダウンすることが予定」されており、この時期を利用して「外部電源喪失を想定した非常用発電系統の実験」を行うことが決められていた。

多少の手違いがあったものの、同日午前一時二三分〇四秒（モスクワ時間）に実験が開始する。炉出力を実験に合わせて調整している最中に、急激に「原子炉出力は定格熱出力一〇倍であるおよそ三〇ＧＷまでに跳ね上がった」。実験を開始して四〇数秒後のことである。

この型の原子炉は「多数のチャンネル管のため制御が複雑になること、炉心のボイド反応度係数が正になるため、チャンネル管破損事故から暴走に至る可能性といった弱点を抱えている」といわれているが、実験によって急激な出力上昇をもたらす暴走事故を起こし、爆発に至ったのだという。そして大量の放射能を放出し、北半球を広範にわたり汚染したのである。

チェルノブイリ事故が発生した一九八六年のソ連共産党書記長はゴルバチョフであったが、ウクライナやベラルーシなどでの放射能汚染状況は隠されたままであった。この事故が、一方で、一九八九年の「ベルリンの壁」の崩壊にはじまる東西冷戦終結への流れといった国際情勢の変動を加速させることになったようでもあるが、これまで不透明であったチェルノブイリ周辺における高レベルの放射能汚染の状況が次第に明らかになっていった。一九九一年末、ソ連が崩壊すると、汚染地域に対する対策は直接ウクライナやベラルーシ共和国の負担となっていく。

31

二〇〇一年九月一一日の朝（現地時間）、米国を同時多発テロが襲う。

ニューヨークでは、テロリストにハイジャックされた二機の旅客機がロウアー・マンハッタンにそびえる一一〇階建ての高層ビルに突っ込んだのだ。そして世界貿易センタービル（ワールド・トレード・センター）の南棟北棟のツイン・タワーが一瞬のうちに崩壊する。

午前八時四五分（ニューヨーク時間）、ボストン発ロサンゼルス行きのアメリカン航空一一便（ボーイング七六七）が北棟（ノースビル）の九五階付近に突っ込む。同九時三分、同じくボストン発ロサンゼルス行きのユナイテッド航空一七五便（ボーイング七六七）が南棟（サウスビル）のやや低い八五階付近に突っ込み、ビルに激突する。

ユナイテッド航空機の激突から約五〇分後、サウスビルがずるずると沈むように崩れ落ちる。アメリカン航空機に突っ込まれたノースビルもそれから約四〇分後、攻撃を受けてから一時間四五分後、黒煙を放ちながら崩れ落ちた。

なお、この二便のほか、アメリカン航空七七便とユナイテッド航空九三

便もハイジャックされてワシントンＤＣへ向い、七七便は国防総省本庁舎を襲撃するが、九三便は米国軍機に撃墜された。

その朝、安里がいつものように、ニューヨーク・マンハッタンのアトリエで、仕事をはじめる前の儀式のように、濃いコーヒーを淹れていた。コーヒーの香りが目から脳髄へ突き刺さる。彼女はおもむろにカップの把手に人さし指をかける。

突然、開放してある窓から「キーン」という金属性の轟音が飛び込んできた。そして衝撃音がつづいた。

飲みかけのコーヒーカップを持ったまま、彼女は「なにごと？」と窓に駆け寄る。そのまま釘付けになった。

マンハッタン島南端、ロウアー・マンハッタンに聳える世界貿易センタービルツインタワーのノースビル尖端付近から火の手が上がり、黒煙がもくもくと噴き出した。

ふたたび爆音がして低空を飛ぶ旅客機が近づいて強引に旋回したかと思うと、激しい衝撃音がつづいた。黒煙を噴き上げているノースビルの隣のサウスビル中腹辺りで赤い火が噴いた。

ガラスと鉄の一一〇階建てのアルミニウムで覆われた巨大なツインタワーは、巨大な旅客機の衝突に耐えて、しばらく黒煙を激しく噴き上げていた。

ほどなくして、まず、二番目に旅客機が突っ込んだ南棟サウスビルが上部のほうからずるずると沈むように落ちていった。つづいて、最初に激突された北棟のノースビルも幾分左に傾げるようにして崩れ落ちていく。

一一〇階の巨大ビルが崩れ落ちた瞬間、地上から雲のように粉塵がわき上がる。

煙や埃が上空高く舞い上がり、巨大なキノコ雲となって広い範囲にわたり視界を遮った。

無数の書類や紙切れが宙に舞う。ガラスの破片、崩れたコンクリートの粉末、灰色のススや砂じんが逃げ惑う避難者に降り注ぐ。

喉が空からだった。彼女はまだ手に持ったままになっているカップに気付き、冷えたコーヒーを一気に飲み干す。窓を離れてテーブルにカップを置くと、テレビの電源を入れた。

ブラウン管は同じ映像が何度も繰り返している。画面から目を背けようとするが、気付いてみるといつのまにか目がブラウン管に吸い寄せられていた。

だが彼女はなにも見ていなかった。頭のなかの灰色の空間を白い角封筒が行きつ戻りつしていた。

一週間ほど前、差出人のない封書を受け取った。そのなかの一枚の用箋に一行の短い文があった。

「当分の間、ロウアー・マンハッタンには近づかないように。読後焼却のこと」

彼女の脳裏に、突然なんの前触れもなく、三十数年前に行方をくらました兄哲雄の姿が浮かんだ。彼女は放置したままにしていた白い角封筒を求めて、夢遊病者のような足取りでアトリエのなかを彷徨った。

信二郎は深夜、都心にあるマンションに戻ると、いつものようにそそくさとシャワーを浴びる。冷蔵庫から缶ビールを取りだし、バスタオルで頭を拭きながらリビングルームに向かう。窓から差し込む微かな明かりに、ソファが淡く浮いて見える。

彼は明かりも点けずに、誰もいない音のない空間を横切り、ソファの中央に腹の出た太った裸身をどかっと落とすと、缶ビールを開け、一息で飲み干した。

全身から汗が一斉に噴き出た。タオルで首筋の汗を拭きながら、テーブルを探り、テレビのリモコンを取り上げ、電源を入れる。

画面一杯に、もくもくと黒煙を吹き上げている四角柱のタワービルが映し出された。一角獣のように、屋上から突き出している一本のテレビアンテナの尖端が黒煙のなかに垣間見える。

「あれは……、世界貿易センタービルじゃないか」

目が吸い付いた。低い声で呟きながら、彼は思わず身を起こし、身体を前傾させ、テレビに顔を寄せる。

旅客機らしい黒い機影が近づき、隣のタワー中腹に激突。パッと炎が拡がり、炎上する。テレビの画面が反転し、崩落するタワーを映し出す。

「おお……」

その瞬間、突然腰から力が抜けた。彼は呻き声を洩らし、崩れるようにへたへたと座り込む。

テレビに映し出されるタワー崩落の画面が彼の目の中で渦を巻いた。彼には信じられない出来事だった。いつか手に入れることができればと思いつづけてきたビルだった。それが一瞬のうちに地上から完全に消えてしまったのだ。

胸にぽっかりと穴が開いた。それが急速に大きくなっていくのを感じた。

突然身体が空中高く舞い上がったかと思うと、行く当てもなく浮遊しつづける。ふいに浮力を喪失し、身体が落下しはじめた。そして床に激突して粉々に砕けた。

次第に遠のく意識のなかで、彼はしばらく床一面に散らばった身体の欠けらをぼんやりと眺めていた。彼は前にもこのような感覚に陥ったことがあったような気がした。あれはいつのことだったか。遥か遠い昔のような気もするが、蘇ってきた感覚は昨日のことのように鮮明だった。彼は感覚を頼りに何度も思い出そうと試みるが、その都度厚い壁が想い出の流れを断ち切るのだった。

同じ日、夜遅く帰宅した耕一郎は、何気なく点けたテレビで世界貿易センタービルの崩壊を知った。

最初は何が起こったのか理解できなかった。深夜映画の一場面かと一瞬思ったが、繰り返えされる画面に漸く現実の出来事であるらしいと悟った。

彼はロッキングチェアをテレビの前に引き寄せると、画面に目を据え、無意識のうちに身体を揺すりつづける。

世界貿易センタービルが音もなく崩壊していくテレビの画面を見ながら、彼は来るべきものが来たように思った。

「終わりのはじまりか……」

崩壊の原因が燃料を満載した旅客機の突っ込みであろうと単純な火災であろうとどうでもよかった。彼にはこうなることがずっと前から分かっていた。いつからかはっきり言えないが、かなり前からこうなることを彼は予感していたのだ。

世界貿易センタービルのツインタワーはほぼ三〇年前、七〇年代の初めに完成した。これは「より高く、より効率的に」という理念のもとに、等質の箱形空間を積み重ねたような四角柱の構造をもつガラスの壁に覆われた四〇〇メートルを超える四角柱のタワービルだった。

これはまさに、二〇世紀の現代科学技術文明が生みだした「超高層ビルの論理を突き詰めた基本形」というべきものなのだ。

約四二〇メートルの虚空に聳える正方形の四角柱。鉄とガラスの無表情な壁面に囲まれた外壁に、一メートル間隔で二百四十本の鉄柱を並べ、断面が一辺六三・四メートルの正方形で、棚のように何層にも設置された延べ面積が四一万八千平方メートルにおよぶ床をもつ。効率を限界まで追及した構造だった。

それは空中高く腕を突き上げ、勝利宣言する資本主義の象徴だった。だがこれを見た瞬間、彼は一瞬のうちに崩壊するような脆弱さを感じ取ったのだった。

世界貿易センタービルというひとつの建造物の構造に脆弱さを感じたというより、そのとき彼は、効率追及の果てに自ら滅び行く現代科学技術文明の行く末を見ていたのだ。いやそうじゃない。あのとき、世界貿易センタービルの前で、彼はずっとまえからこころに感じていたことを確認したにすぎなかった。

記憶のひだをたぐり寄せ、彼は記憶を呼び起こしていく。遠い記憶がぽっかり浮いてきた。

彼はおもむろに立ち上がると、カウンターの端の電話器を一瞥する。彼は受話器を取ろうとして一瞬躊躇する。彼は意を決して、受話器を取ってプッシュボタンを押した。

受話器の奥で、ベルが鳴り響く。

「兼尾だが……」

しばらくして受話器の奥から太い声がした。

「ニューヨークへ電話したか……」

「え？　どなた？」

耕一郎は受話器を握ったまま、おれの声を忘れたのか、と寂しく思った。あれから何十年も会っていない。無理もない。

「……耕一郎くんか」

しばらく間をおいて、信二郎の声が返ってきた。漸く思い出したらしい。彼はないも言わずに、受話器を置いた。

翌二〇〇一年九月一二日付朝刊一面には、黒煙を吐き炎上する世界貿易センタービルとこれに突っ込む黒い機影の大写しのカラー写真に、「米で同時多発テロ」の白抜きの巨大な見出しが踊っていた。さらに、黒文字で「NYビルに飛行機」「2棟倒壊、国防総省にも突入」「パレスチナゲリラ関与？」が散らばり、二面に「テロ準備と事前情報」「ラディン氏動向注目」「邦人安否、確認追われる」といった関連の見出しがあった。

同日の夕刊もテロ関連の白抜きの見出しと現場写真で埋め尽くされた。「米のテロ数千人死亡」「組織的テロに衝撃」「米、全土で危機態勢」「対テロへ団結表明」「世界経済　打撃深刻」「在日米軍基地も緊迫」「崩壊　火柱…絶叫」「無事でいて欲しい」とつづき、最後のページには世界貿易センタービルが崩れ落ちる瞬間を捉えた大写しの写真が紙面全面に拡がっていた。

その瞬間、テレビ画面が蘇り、彼の脳裏に焼き付いた映像が再生された。

黒煙に包まれた大写しの世界貿易センタービルの四二〇メートルもの巨体がずるずると滑り落ちるように崩れていく。それはかって誰も見たことないような崩れ方だった。古ビルの爆薬による爆破解体でもよほど熟練しなければなかなかこううまくいかないものだ。

「ああ……」

彼は思わず、ため息を付く。

堅牢なはずの巨大高層ビルの基幹部分が、まるで「反物質」に出会ったかのように、突然溶け落ちるように崩れていったのだ。

同九月一二日午後（現地時間）、ブッシュ米大統領は今回の攻撃を「戦争行為だ」と断じて軍事報復への決意を表明する。同月一五日、ブッシュ米大統領はオサマ・ビンラディン氏を「主要な容疑者」と名指しする。

一〇月七日、米英軍、アフガン空爆開始。同月一九日、米、アフガン南部に特殊部隊投入。地上戦開始。同月二六日、英、地上軍投入決定。

一一月一〇日、北部のマザリシャリフ陥落。一一日、バーミヤン陥落。一二日、ヘラート陥落。一三日、首都カブール陥落。

一二月五日、ボンの代表者会議で暫定政権樹立合意。七日、カンダバル陥落。二五日、暫定政権発足。

同時多発テロの三ヵ月後、米国はＡＢＭ（弾道弾機迎撃ミサイル）制限条約から一方的に脱退する。この条約は冷戦時代の七二年、当時の米ソ間でつづけられた核軍備競争に歯止めを掛けるために締結されたものであった。

これは米国とロシア（旧ソ連）との冷戦の完全終結を意味するのか、それとも米国の新たな一極構造支配の宣言なのか、それとも世界動乱の始まりなのだろうか。

３２

二〇一一年三月一一日一四時四六分一八秒、東日本で巨大地震（東北地方太平洋沖地震）が発生、大津波が太平洋沿岸を襲う。東日本大震災だった。そして世界最大級の福島第一原子力発電所でレベル７の「深刻な事故」が発生する。

福島第一原子力発電所（１Ｆ）は六基の原子炉（１～６号機）から構成されていたが、すべて米国ＧＥ社のＢＷＲ（沸騰水型軽水炉）マークＩ型である。ちなみに、東日本に立地する原子力発電所の原子炉はすべてＢＷＲである。

六基の原子炉（１～６号機）のうち、１Ｆで今回事故を起こしたのは、同じところに並列的に集中して立地している１～４号機である。なお、５、６号機はこれらと若干離れて立地していたため、幸運にも難を免れることができた。

深刻な事故はこうして始まった（２０１１年１０月１５日付朝日新聞「前例なき災害　伝える」ほか）。

三月一一日一四時四六分、地震発生し、運転中の１～３号機が自動停止する。ほぼ同時刻に、１～３号機用の非常用ディーゼル発電機が起動するが、一部が地震の揺れで破損していた可能性も否定できない。地震発生の約三〇分後に津波第一波、その一〇分後に津波第二波が来襲して、地下に設置していた非常用発電装置が海水に浸り、故障する。そして１～４号機用の全交流電源が喪失する。

地震発生約二時間後、緊急炉心冷却システムの注水不能が確認される。翌一二日一五時三六分、１号機で水素爆発する。一四日一一時一分には、３号機で水素爆発。同日一八時二二分、２号機の燃料棒が一時全部露出す

る。一五日六時ごろ、4号機で爆発音があり、2号機で衝撃音発生する。

こうして1〜3号機の三基の原子炉は炉心溶融事故を起こした。残りの4号機は分解点検中で原子炉が停止していたので炉心溶融は免れたが、プールには炉心から取り出した使用済み燃料一三三一本と未使用の新燃料二〇四本が納められていた。これらの約一五〇〇本以上もの燃料棒は冷却を要するが、プールの冷却機能も喪失状態にあったのである。

なお、5、6号機も地震や津波の被害を受け、外部電源を喪失したが、定期点検中で炉は停止していた。5、6号機の燃料棒も冷却を要す状況にあったが、幸い、非常用ディーゼル発電機が一台難を免れ、これで冷却をつづけることができた。

このように、外部電源の全喪失にはじまって、1Fの1〜3号機の三基の原子炉は炉心溶融（メルトダウン）する。そして、原子炉圧力容器の破損や原子炉建家の爆発などで、大気中へセシウムなどの大量の放射性物質が飛散した。

一七日午前、ヘリで3号機に散水する。同日夕方、機動隊の放水車が3号機に放水をはじめる。

二三日になって、ようやく、原子力安全委員会が「緊急時迅速放射能影響予測システム（SPEEDI）」のデータを初公表する。なお、米国は一七日に自国民へ原発八〇キロ圏内からの避難勧告を行っていた。

翌四月二日、取水口付近から放射能汚染水が流出していることを確認する。

「チェルノブイリ事故に匹敵する」レベルの土壌汚染箇所も見つかり、1F「周辺の土地は長期間使用不能のおそれ」も生じていた。

以上のような被害状況から、四月一二日になって、保安院がこれまでの評価レベルを見直し、チェルノブイリ事故と同様レベルの最高レベル7（深刻な事故）に引き上げる。

事故発生時初期のごく大まかな経過は以上のとおりであるが、事故原因や事故分析等についてはまだまだ不十分であり、また、不明なところが多い。

事故調査は原子力規制委員会の検討会、東京電力、国会事故調査委員会、政府事故調査委員会等でそれぞれ進められてきたが、大地震で原子炉の重要部分が破壊されたかどうか、あるいは津波によるものか、また、事故対策や事故対応が適切であったかどうか（これには不適切という指摘もすでになされている）、事故分析（例えば4号機の爆発原因解明や原子炉内や周辺のデータの収集不足など）について不明な点が多く、いまだ見解の一致を見ていない。

なお、今回深刻な事故を起こした福島第一原子力発電所のほかに、東日本の太平洋沿岸には、東通、女川、福島第二、東海第二の各原子力発電所が立地されており、稼働中であった。これらの原子力発電所も被害を受けたものの、幸いにも、外部電源喪失、非常用電源機の破損、原子炉冷却用海水ポンプの破損などで、レベル3の重大な異常事象の被害程度でおさまった。ただ福島第二では緊急事態宣言の発令程度までに至り、重大な原子力災害のおそれがあったものの、津波の遡上高が低かったため大事に至らなかった。

女川、福島第二、東海第二におけるそれぞれの地震発生時の被害状況はつぎのようなものであった。

女川原発は敷地が一四・八メートルと高いため津波の被害は免れたが、

外部電源五回線のうち四回線が地震で被害を受けた。被害を免れた一回線と非常用発電機の稼働で三基ある原子炉すべての冷却用電源を確保できた。ただし、2号機用の三基ある非常用発電機のうち二基が稼働できず、緊急炉心冷却システムの一部が使用不可に陥る。

福島第二には原子炉四基あり、全四基とも運転中であったが、地震発生時に自動停止する。外部電源四回線のうち三回線が使用不能に、一二基ある非常用発電機も大半（九基）が被害を受けたが、炉心溶融（メルトダウン）や爆発せずに、四基の原子炉とも前後して冷温停止に至る。津波で海水ポンプなどの重要機器が損傷する。

東海第二では一基ある原子炉用の外部電源全三回線を喪失。非常用発電機も一基損傷したが、残りの二基で冷温停止する。二日前に完成した六・一メートルの津波防壁で非常用発電機の被害を最小限に食い止めることができ、幸い大事に至らなかったが、地震で発電機のタービンが損傷を受けていた。

放射能汚染については、1F事故によって、大量の放射性物質が大気や海洋へ放出された（いまなおつづいている）が、それらによる汚染実態や影響についてはいまだ十分なデータが公表されていないし、解明も不十分である。

現在、今回の事故時に1Fから大気中へとくに大量に飛散した放射性セシウムを指標にして汚染マップが作成されている（文部科学省）が、全体で二二都県分のうち一八都道県分（残りは青森、石川、福井、愛知の四県）が公表された。なお、これでは指標とした放射性セシウムのうち、同134と同137を合わせて一平方メートル当り一万ベクレルの蓄積量を超える地域を「原発事故で影響のあった範囲」としている。

この汚染マップによると（2011年11月21日付朝日新聞「文科省調査　東日本18都県マップ」）、事故時に発生した放射性物質（放射性セシウム）が高濃度に集まって形成された放射性プルーム（放射性雲）は、「西は群馬・長野県境、北は宮城北部・岩手南部にとどまった」が、「原発事故で影響のあった範囲」は程度の差こそあれ、「一三都県に及び、三万平方キロ（日本の国土の8％）を超える」範囲に広がっている。

高濃度の放射性プルーム（放射性雲）の西や北への流れには、つぎのような四つのルートが見られる。

第一のルートは、三月一四日深夜から翌未明に西へ向かったもので、2号機の炉心溶融などによって放出された大量の放射性物質が「1Fから時計回りに関東地方の広い範囲に流れ」、「雨や雪とともに地表に落ちた」。「特に栃木、群馬の北部で汚染が広がった」。

さらに、この流れの一部は「群馬から枝分かれするように南下」し、「埼玉西部（秩父市周辺）、長野東部（佐久市周辺）、東京西部（奥多摩町周辺）を通り、丹沢山系のある神奈川西部（山北町周辺）」に達した。

第二のルートは、一五日午後に北西に向かったもので、「福島県浪江町などに帯状に高濃度をもたらした」。

第三のルートは北に向かったもので、二〇日の午後だった。「宮城北部や岩手南部に飛び地状の汚染」地域があるが、降雨によるものだろうという。

第四のルートは、二一日夜から二二日未明にかけてのものだが、「茨城沿岸から千葉北部（柏市周辺）を通り」、「都心の手前で東京湾を南下」した。「東京東部（葛飾区周辺）」など一部に深刻な汚染が生じた。

なお、事故直後よりも、三月二〇日から二三日にかけて、なぜ1Fから放射性物質の放出量が増えたのか不明という。また、放射能汚染の指標としたセシウムは飛散量が多く、セシウム134は半減期が三〇年で影響も長期にわたるものである。

三月二三日（1F事故から一二日後）、東京都金町浄水場（葛飾区）で食品衛生法上での乳児摂取基準を上回る放射性ヨウ素が検出され、乳幼児への水道水使用が控えるよう呼びかけがなされ、その前後から食べ物や飲み物などの食品の放射能汚染が大問題となるが、事故直後、避難した住民の被曝に、時の官房長官は「健康に影響を及ぼすような状況は生じていない」（三月一三日）と言い、また、翌々日（一五日）、首都圏を含む各地で大気中の放射線量に異常が見られたことに対しても、「人体に及ぼすようなレベルのものではない」と言明する。翌一六日、前日に福島県浪江町で計測された毎時一九五から三三〇マイクロシーベルトの放射線量が公表されたときにも、「ただちに人体に影響を与えるような数字ではない」と述べる。

だが放射能被曝で問題となるのは、放射能の被曝積算量である。いいかえれば、放射能被曝の影響は被曝積算量で決まる。被曝線量とその被曝時間からはじき出される被曝積算量だ。いくら低ラベルの放射能でも長時間被曝すれば影響すると考えれるのである。

また、放射能被曝には外部被曝と内部被曝とがある。内部被曝は体内に入った放射性物質による被曝である。放射性物質は体内には呼吸や食べ物の摂取をとおして入りこむ。こうして体内に入った放射性物質は排出されるまで長い間あるいは一生体内にとどまりつづける。そして体内で放射線を出しつづけている間中人体の放射能被曝が継続することになる。それゆえ、最終的に、内部被曝の影響が確認されるのは何年も後のことである。

今回の事故直後、1Fからの放射性物質の拡散状況や予測が公表されず、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）による当時の放射性物質拡散予測が初めて公表されたのが、三月二三日だった。事故直後、放射性物質の拡散状況が不明のまま、なかには高濃度汚染地域へ向かった避難者もあったという。

（追記）

一九七六年二月二日付けでGE社を辞任した三技師は、同年同月一八日に行われた「米上下両院合同原子力委員会」での証言（第三章二八節参照）のなかで、軽水炉（BWR、PWRともに）の設計上の欠陥を指摘している。そして「こうした問題について真剣に評価を行い、原子力発電を続けることが賢明かどうか考え直してみることがいまや緊急の課題である」（同証言記録）と指摘していた。そのなかで、とくに、マークI型の格納容器の地震に対しての安全性に疑問を呈していたのである。

第四章

33

突然、固定電話のベルが鳴った。

一瞬、耕一郎は新聞から顔を上げ、リビングのドア近くの飾り棚上の電話に視線を投げるものの、ソファに腰を下ろしたままだった。

東日本を襲った大震災後から信二郎と連絡が取れずにいた。事務所に何度電話しても通じなかった。マンションにもいなかった。

彼はとうとう自分から電話するのを諦め、信二郎からの連絡を待つことにしたのだった。そして電話が鳴るたびに信二郎だと思い受話器に飛びつくものの、そのたびに期待が裏切られていたのだ。

ベルが一〇回鳴って、切れた。

彼はふと、妻がおれば隣のダイニングから飛んできて電話に出ただろうと思う。そう思った途端、なにかやりきれない思いがこみ上げきて、彼はソファから立ち上がる。彼はそそくさと外出の支度を整え、玄関へ向かった。

靴を履こうとしたとき、ふたたび電話のベルが鳴った。

玄関の三和土で、彼は戻ろうかどうしようか、一瞬迷った。いつもなら戻らなくても、妻か娘かが受話器を取っただろう。

家の中には妻も娘もいなかった。彼は一瞬、そのことをすっかり忘れていた。妻が亡くなってから一年も経つのに、いまも家の中のどこかにいるように思う。娘もずっと前に家を出たのに、娘の声がいまでも二階から聞こえてくるではないか。だが家中をいくら探しても、妻の姿も娘の笑い声もなかった。

家の中に、もう妻も娘もいないことが身にしみると、彼は外出するようになった。休みの日でも構わなかった。だが外出するといっても、行くあてはなかった。

講義もないのに、一日中、大学の研究室で過ごすこともあった。べつに急ぎの仕事があるわけでもないが、寝袋に入って泊まり込むことさえあった。

ベルが鳴りつづく。

彼は履きかけた靴を脱いで、リビングに戻った。そしておもむろに受話器を取った。

「しばらくお待ちください。この電話を転送します……」

受話器の奥から流れてきた。彼は携帯に転送しておいたのを忘れていた。

「もしもーし、もしもーし」

彼はアナウンスに抗するように、大声を出した。

「ああ……、耕一郎クン……」

幾分かすれた低い声だ。

「うん……」

彼は一瞬、信二郎かと思った。だが女の声のようにも思え、生返事する。

「安里よ……」

「安……か」

彼は戸惑う。数日前、安里はニューヨークから「米国が自国民へ避難勧告しているようだけど、大丈夫？」と電話してきたばかりだった。

福島第一原発事故後、早々に米軍機が周辺上空を飛び、放射線量を測定

した。そのデータをもとに、日本に滞在している米国民に対して、原発の八〇キロ圏内からの避難を勧告したというのだ。
彼は受話器を耳に押し付けたまま、言葉が出ない。
「いま、成田よ。これから都心へ向かうけど、夕食一緒にできないかしら」
棒立ちの彼の耳元で、安里の声がする。滞在するホテルの告げると、すぐ電話を切った。

34

住いは都心から快速電車で一時間のところにあった。若い頃は都内のマンションに住んでいたが、妻が体調を崩してから、郊外へ越した。大手の建設会社が開発した団地の建て売り用戸建住宅だった。
彼は余裕をみて、早めに家を出た。約束の時間より早ければ、ホテルのロビーで待っていればいい。若い頃と違って、ひとを待っていても苦にならなかった。それに彼は時間があれば、信二郎の事務所を訪ねてみてもいいと思っていた。
もっとも、何度電話しても信二郎を捉まえることができなかったを考えれば、事務所には出ていないのかもしれないが、行ってみればなにか新しいことが分かるかもしれないとも思う。
電車の乗り継ぎが予定よりスムーズにいって、東京駅には約束の時間よりも一時間以上も早く着いた。お堀端にあるホテルには一五分もあれば十分だった。
彼は反対側の八重洲口に出る。信二郎の事務所に寄ろうと思ったのだった。
事務所は交差点を渡った通りに面した高層ビルにある。それは信二郎が経営していた会社のビルで、その最上階に自分の部屋を確保してあった。
エントランスを入ると、奥の方に受付カウンターが見えた。
「前の社長の……、ええーと……」
彼は口ごもる。信二郎の姓が出てこない。カウンターの向こうで、係の若い女子社員が一瞬探るような眼をして彼を見る。
「兼尾のことですか……」
「そうそう、兼尾信二郎だ。会いたいのだが、いるかな」
彼は敢えて幾分ぞんざいな口調で言う。
「失礼ですが、どちらさまでしょうか」
彼は黙って、名刺を差し出す。係の女子社員は「しばらくお待ちください」と言うと、受話器を耳に当てる。一言二言言葉を交わすのを見て、彼は受付カウンターを離れた。
係の女子社員が後ろから追いかけてきて、「只今、係のものが参りますので、こちらでお待ちください」と言い、片隅のロビーに案内した。
彼はエントランスのガラスドア越し外を見た。広い車道には車が行き交い、歩道には足早に駅へ向かう人びとの群があった。
彼は腕時計をのぞきながら、そろそろホテルへ行かないと間に合わないかと思い、振り返り受付を見た。受付カウンターのそばで、係の女子社員と言葉を交わしていた長身の男子社員が振り返った。そして小走りで近づいてきた。
「生野さまでいらっしゃいますか」と言いながら、名刺を差し出した。
面長のまえに一度会ったことがあるような顔をした中年の男だった。名

刺には伊東とあった。
「じつは、会長とは連絡がとれないのです……」
「そうですか。わたしも連絡がとれずに……、それで今日はこれからHホテルで人と会う約束があってね、それで寄ってみたのでしたが……」
「そうでしたか……」
「なにか心当たりはないのですか。海外へいっているとか……」
「……」
「それともそとでほかの仕事でもしていませんでしたか、最近は……」
なにを聞いても、面長の顔に困惑しきった表情を浮かべるだけであった。
「分かりました。時間がないので、今日はこれで失礼しますが、なにか分かったら教えてくださいませんか。また、連絡させていただきます」
棒立ちしている男を残し、彼は急ぎ足でエントランスから外へ出た。

35

駅へ向かうサラリーマンたちで混乱する歩道をかき分けるようにしてようやくホテルの前にたどり着くと、耕一郎は急ぎ足でエントランスにまわり、回転ドアを勢いよく押してなかに入っていく。驚き顔で挨拶するドアマンを尻目に、左手奥のロビーへ急ぐ。
だがロビーには安里の姿はなかった。時計を見ると、約束の時間を一〇分過ぎていた。退社時のせいか八重洲口から丸の内へ抜ける地下道が行き交う通行人で混雑しており、思わず時間を取られてしまったのだ。
安里はもしかして待つのを諦めて行ってしまったのかもしれない。彼はもう一度辺りを見回した。どこにも安里らしき姿はなかった。
それでも彼は空いている席を探し、肘掛け椅子にどかっと腰を下ろす。微かに安里のほうが遅れているのかもしれないという思いもあったが、それよりも急ぎ足で歩いてきたせいか、息が上がり、一寸休みたかったのだった。
彼はハンカチで額の汗を拭く。そして大きく息を吐き、背中の汗が引くのを待った。
それにしても信二郎のことが気にかかる。あの日、地震がおさまるとすぐ電話したが繋がらなかった。そのときは、多分、地震のせいだろうと思っていた。それからしばらくして電話したが、話し中の信号だけで、なぜか繋がることはなかった。いや、話し中の信号があったので、事務所に信二郎がいると思っていた。忙しく方々と電話し合っているのだろうと思っていた。そして何日か過ぎた。地震直後の慌ただしさも消え、幾分落ち着きを取り戻したころになって、もう一度電話してみた。だが相変わらず、電話は繋がらなかった。そして都心に出たついでに信二郎の事務所に寄ってみたのだった。
彼は日焼けした顔をした信二郎が出てくると思っていた。そして安里がニューヨークから飛んできてすぐそこにいることを知らせて驚かそうと思ったのだ。
だがそうではなかった。会社の誰もが信二郎の行方が全然分からないでいたのだ。信二郎は社長を退いて、会長になったものの、会長は名ばかりで、自分のビルの最上階に事務所を構え、やりたいことをやっていたのだ。それが東日本大震災後、ずっと行方不明の状態だったのだった。
彼はおもむろに椅子から立ち上がり、もう一度ゆっくりまわりを見回す。

それから彼は踵を返し、フロントカウンターへ近づく。
そのとき、回転ドアがまわり、年配の女がふたり、吐き出されるようにエントランスホールへ入ってきた。そして彼をみとめたのか、ひとりが手を挙げる。安里だった。
安里は左手でもうひとりの手を取り、さらに右手を背にまわし、ふたりがひとりになってゆっくり歩いてくる。彼の視線が安里に抱えられた老女に釘付けになった。一瞬、戦慄が走る。彼は足を止め、棒立ちのまま、近づく老女を見つめていた。
安里の姿を認めたとき、彼はすぐそばへ駆け寄ろうとしたが、突然、足が動かなくなった。いくらもがいても床のカーペットに靴がのり付けされたようにびくともしない。必死に動かそうと思っても動かないのだ。
ふたりが彼の目の前で足を止めた。
老女は一度目を合わせる。それからしばらく彼の全身を眺め回して、再び目を合わせる。そして目を潤ませ、微笑んだ。
「耕一郎クン、分かる？」
安里がいたずらっ子のような目をして彼の目をのぞく。
「……」
彼は無言のまま、微かに頷く。

36

安里は無言のまま棒立ちをつづける耕一郎を見ているうちに、突然、あの日のことが脳裏に蘇ってきた。
その日も彼女はコーヒーカップを片手に、窓辺に佇み、現代都市ニューヨークのビル群が醸し出す無機質スカイラインに目を向けていた。かってそこにはひときわ目立つツインタワーが並んでいたが、歯が抜けたよう欠け落ちてしまい、かってとは全く別物になってしまったが、それでも彼女はあてもなく目を向け、全く別物となった遠景を飽きることなく眺めていた。
それはここ二、三週間つづけている習慣のようなことだった。
あのとき、彼女は現代都市の遠景を背景に胡座をかく裸婦像を描いていたが、もう絵筆をとる気になれなかった。ただぼんやりビル群の描き出す現代都市の輪郭を眺めているだけだった。
そんなとき、「ホテルのロビーで待っている」という電話があった。名も告げず、電話はすぐ切れてしまった。
聞き覚えのある声だった。だがその声の主が誰だったか思い出せなかった。
どうしようか迷った。いつもならそのままうちゃっておくところだが、そのときはなにかしら心に響くものがあった。
午後遅く、彼女はホテルのあるレキシントン街へ向かう。
ホテルはすぐ見つかった。通りに面した小ぢんまりとしたエントランスを入って行くと、大理石造りロビーが目に飛び込んできた。彼女はホールの分厚い絨毯を踏んで、ロビーに近づく。辺りを見回すが、閑散として、ひとを待っているようなそれらしき人影は見当たらない。彼女は近くの空いた椅子に腰を下ろし、今度はゆっくり首をまわし、もう一度ロビーのなかをくまなく見渡していく。
しばらく待っても、誰も現れなかった。彼女は椅子から立ち上がると、

踵を返えし、ホテルを出る。
通りに立ち止まり、タクシーを拾おうか、それとも歩こうか迷った。
「安里、待たせたかな……」
振り向くと、つばの広い帽子を目深くかぶった濃いサングラスの男が立っている。
「あっ……」
男は微笑みを浮かべ、サングラスを上げ、目をのぞかせる。
「お兄さん？　お兄さんね」
「安里、元気だったか。ちょっと歩こうか……」
哲雄は素早く左右を見る。そして「尾行されているんだ。安里を巻き込みたくないから、素知らぬ顔をして隣りに付いてきてくれ」と囁くと、彼女の肩を軽く押し、人ごみのなかに紛れるようにして歩き出す。
「牡蠣でも食おうか、どうだ。グランド・セントラル地下（ロウアーフロワアー）にオイスターバアがあったな……」
グランド・セントラルの大きな建物が見えた。エントランスを抜け、乗降客で溢れるホールへ入る。人ごみを掻き分け、地下へエスカレーターで下りる。
左手の奥にオイスターバアーがある。フロワーいっぱいに広がるような広い空間にテーブルがいくつも並び、その殆どが客で埋まっていた。
「混んでいるなあ。あ、一番奥が空いている」
哲雄はどんどん奥へ進み、空いているテーブルに椅子を引き寄せ、腰を下ろしながら、帽子とサングラスを取った。そして向かい合って腰を下ろした彼女の顔をまじまじと見る。
「突然で驚いただろうけど、あの事件のあと、親父がしきりに安里のことを聞くんだよ。で、一度様子を見ておこうと思ってね。親父がなんで急にそういうのか分からんが、最近あまり身体の具合がよくないんだ。ないしろ、もう歳だからな……」
ちょうどそのときウエーターが注文とりにくる。
「オイスターとワインにするか。いいね。じゃあ、殻付き牡蠣一ダース二皿と白ワインだ」
「まあ、お父さんがわたしのことを……」
ウエーターが立ち去るのを待って、彼女は怪訝そうに問う。兄が父と接触しているとは初耳だった。父が米国にいるらしいことは薄々知ってはいたが、父の生き方に批判的な兄が米国まで来て父と会っているとは意外だった。彼女は父の顔さえ知らなかったし、また関心もなかっただけに、逆に、ショックだった。
「親父は日本へ帰りたがっているが、米国は彼に未だに出国許可を下ろそうとしないんだ。行動範囲もキャンプ内のごく限られたエリアだけだ」
「監禁状態ということなの……」
彼女はどうしてそうなのか聞き糺そうとしたが、声にならなかった。なにか深い訳がありそうだが、訊いてはよくないことのように思えるのだった。父はやはり戦争犯罪者だったのか。
哲雄も話したくないのか、口を閉じたままだ。
ふたりは黙ったままだ。彼女は運ばれてきた牡蠣を殻ごと口にもっていき、牡蠣をつるりと啜り込む。牡蠣の剥き身が口のなかへ勢いよく滑り込んでいった。
潮と牡蠣の匂いが口いっぱいに広がった。彼女は口のなかに広がった匂いを包むようにワインを一口含む。

「叔母さんも一緒なんだ……」
自分も牡蠣を口ごもりながら、ワインを口に含む彼女をじっと見ていた哲雄が突然口を開く。
「え？　おばさんって……」
彼女は口のなかのワインを飲み干し、まじまじと兄を見る。何年ぶりか、いや、何十年ぶりかもしれない。頭髪は白くなり、顔の皮膚も弛んでいる。兄のいうおばさんが誰なのか、見当がつかないのも当然かもしれなかった。
「ううん……、耕一郎の母親の……」
「え？　ホント……」
「……」
哲雄は口を固く閉じたまま、しばらく身動きもしない。
一瞬、彼女には喧噪に包まれていたレストランのなかが急に静まり返ったように思えた。
やはりあれは本当のことだったのか。小学校の何年だったか記憶にないが、同級の男の子が「お前の母さんも戦犯だ」とはやし立てたことがあった。それまでも「父親が戦犯だ」と言われたことがあったが、母が戦犯だと言われたことははじめてだった。ショックだったし、悔しかった。彼女は部屋に閉じこもって、何日も学校には行こうとしなかった。
それにあるときまで、彼女は耕一郎の母親が自分の母であると思い込んでいたのだった。一時、赤ん坊の安里は耕一郎の母親に育てられ、ふたりは同じ乳房を奪い合っていたのだ。だがいつしかふたりは母屋と離れに分かれて、母の乳房を奪い合うこともなくなっていった。しばらくして、母の姿が消えた。
母の姿を求める安里に、祖母付きの女中だった婆やは、いつも「お母さんは耕一郎ちゃんの弟を迎えに行ったのよ。もうすぐ戻ってくるからね」と口癖のように言っていた。だが、決して戻ることはなかった。
ある日突然、ＭＰをつれてＧＨＱ（連合国軍総司令部）の担当官が現れ、大量の木箱の資料とともに耕一郎の母を連れ去って行ったのだった。耕一郎と安里が婆やに連れられて近くの公園へ出かけた留守の出来事だった。
それ以来、幼い安里と耕一郎の面倒は婆やの仕事になってしまった。母代わりの婆やはふたりを分け隔てなくわが子のように可愛がったが、耕一郎はいくらすすめられても離れから母屋に移ろうとしなかた。婆やは不平も言わず、雨の日も風の日も毎日母屋と離れを行き来していた。
「やっぱり、そうだったのね……」
彼女は低い声で呟く。
うすうす感じていたことだっだが、現実となると穏やかでなかった。胸に込み上げてくるものを感じ、彼女は急いで目を背ける。
「わたしを生んだ母は……」と言いかけて、彼女は口をつぐんだ。
聞こえたのか聞こえなかったのか、哲雄も口を閉じたままだった。
ふたりは黙って牡蠣を食べる。ワインを飲んだ。
「安里が元気でよかった。親父にそう伝えておくよ」
哲雄がぽつんと言った。牡蠣もなくなり、ワインの瓶も空になっていた。
ふたりはグランド・セントラルの駅舎を出て、別れた。

37

「ちょっと、着替えてくるから待っていてくれない。奥のコーヒーラウン

ジで、いいかしら。叔母さま、参りましょうか」

安里は棒立ちの耕一郎に笑顔を向け、叔母を促す。

あの人が母だというのか。なんの感慨も湧かなかった。そんな自分にいささか戸惑いを感じながら、彼はエレベーターに消えるまでふたりを見送ると、言われたまま、夢遊病者のようにロビー奥のコーヒーラウンジへ向かう。なにも考えることはなかった。

まるでタイムスリップしたようだった。六〇年以上も経て、突然目の前に母が現れるなんて信じられなかった。

あれは母の幽霊に違いない。彼はそう思いたかった。いまさら母に会いたいとは思わなかった。戸惑う自分がいやだった。

彼のこころのなかには六〇年もかけて培ってきた母がいた。あの夜、キューバ危機の深夜、哲雄が打ち明けてくれるまで、彼は長い間、婆やが教えてくれたように、母が赤ん坊のとき他所へ預けた双子の弟を迎えに行ったのだと信じていたのだ。なかなか帰ってこない母をイライラして待っていたものの、自分を捨てて米国へ行っているとは思ってもみなかった。

二、三歳のころだったあろうか。婆やに連れられて安里と一緒に出かけた近くの公園から帰ってみると、母の姿は消えていた。毎日何回訊いても、婆やは前に預けた弟を連れ戻しにいったと繰り返した。

彼は自分に双子の弟がいたとは知らなかったし、それらしい記憶も全然なかった。だが何度も同じことを聞いているうちに、彼はそんな気になってきたらしい。そして彼はひたすら母の帰りを待った。哲雄や婆やに何度も母屋に移るように言われても、彼は離れから移ろうとしなかった。離れから移ったら、母が本当に戻ってこないような気がしたからであった。

キューバ危機の翌年、大学に入って、寮に移るまで離れにいたが、そのころにはもう母が戻ってくることはないだろうとこころのどこかで思っていた。いや、もっと前からそんな気がしていた。それは突然信二郎が離れにやってきたころだったかもしれない。

大学の寮に移って間もなく、婆やが突然倒れ、ほどなく亡くなった。安里が、そして哲雄も米国へ行ってしまった。信二郎も高校を卒業すると、自活の道を選んで出て行った。

あの日から、五〇年近く経っていた。

いろいろなことがあった。脳裏にそのときどきの出来事が浮かんでは消えてゆく。もう過ぎたことだ。すべてが過ぎてしまったことだった。いや、彼にとって決して過ぎたことではなかった。ただすべてが過ぎたと思いたかっただけだった。

彼の前の小さなテーブルのうえに置いていったコーヒーカップに手を伸ばし、一口啜る。すっかり冷えて、深い香りも消えていた。

この五〇年の間に、妻を娶り、ひとりの娘を得た。その妻も五年前に突然逝き、娘も親元を離れ、自分の人生を歩んでいた。

彼はもう一口コーヒーを含むと、今度はかみしめるようにしてゆっくり飲み干す。ほろ苦かった。

38

「お待たせ……」

顔を上げると、安里の明るい顔があった。後ろで母も微笑んでいる。

耕一郎は椅子から立ち上がる。母と目が合った。その目の奥に深い憂い

が隠されているように見える。彼は急いで目を外す。
「地下の天ぷら屋さんを予約しているの。でも天ぷらがどうしてもいやなら、それは別の日にしてもいいのよ」
安里は返事も聞かず彼に背を向け、母の手を引き歩き出している。否応なく、彼はすぐ後を追う。
ロビーの左手にはホテルの大きなレストランがあったが、地下には和食の老舗や中華料理などの有名専門店が軒を連ねている。予約してある天ぷら料理店も銀座の老舗の出店であった。
小さな床の間のある四畳ほどの和室だった。中央に座卓が置かれてあり、入口に近いところを空け、残りに三人の席が用意されていた。
「叔母さま、どこがいい。耕一郎クンと向い合わせがいいかな。それとも真ん中がいいか」と言いながら、母を奥に、安里は彼と向かい合い、入口に近い席を取る。
中年の仲居がお茶とおしぼりを持ってきた。そしてメニューを差し出す。安里が受け取り、ふたりに意向を尋ね、飲み物とコース料理を注文する。
「ごめんなさい……」
仲居が去るのを待っていたように、母は彼に向って頭を下げた。
「耕一郎クン、叔母さまはあの日、米軍に拉致されたのよ。無理矢理米国へ連れて行かれたの。それからずっと米国で監禁されていて、今もって監視下に置かれているの。今回、特別の許可を得て出国できたの。叔母さまは一週間以内に米国へ帰らなければならないのよ」
彼は安里が説明をつづける間、顔を傾け、年老いた母をじっと見つめていた。自分もすでに六〇代半ばであることを考えれば、母は九〇歳を超えていることだろう。
頭髪は白く薄い。額と頬には深いしわが刻まれ、顔中シミだらけだ。これも年相応といえばそれまでだが、異国で人知れず苦労を重ねたのだろう。
「米軍がなぜ拉致したのですか。拉致されるようなことがあったのですか」
彼は聞き糺したいことはなにもなかった。いまさらなにを訊いてもすべて過ぎてしまったことではないか。こう思いながらも、突然、彼の口を突いて出る。
一瞬、母の目に戸惑いが浮かんだ。母にとってもすべてが過ぎ去ったことにちがいない。そう思ったとき、母は口を開いた。
「それはね。わたしが一員として参加していたプロジェクトのせいだった……」
「プロジェクト?」
「そう。いま流に言えば、それは『生物兵器開発プロジェクト』だった。でもわたしはその一部の小さな実験を担当していただけで、プロジェクトの全体計画はもちろん、その目的も知らなかった。それどころか自分のやっている実験がなんのためになるのかさえ知らなかったし、考えもしなかった……」
「それなのにどうしてある日突然拉致され、何十年のも監禁されていたのですか。それに、いまもって監視下にあるとはどういうことですか。全く解しかねる……」
「それは……」
母は彼の追及の激しさに、一瞬口を噤む。
彼はそのとき、あの夜哲雄が突然口にしたことを思い出していた。そして離れに戻って哲雄の言葉を思い返しながら、ベッドを輾転としていたのだった。

仲居が飲み物と突き出しを運んできた。それぞれに配りながら、料理をつづけて出しますかと尋ねる。安里がふたりの顔を見回していると、「じゃ、合図してください。すぐ用意しますから」と言って、引き下がった。

「そうね。それは……。じつはわたし、資料の整理や管理も手伝っていたの。それが極秘のもので、ソ連や中国なども欲しがっていたもののようで、両国とも互いに探していたらしい。それが森島家の書斎に保管されていることを嗅ぎ付けた米軍が資料と一緒にわたしをも連行したというわけだったの」

「日本政府はなにもしなかったのですか。ひとりの日本人が米軍のいうままに米国に連れて行かれたわけですか」

「日本はまだ占領下にあったときだわ。だから、連合国軍総司令部（ＧＨＱ）のいうままだった」

「でも、何十年も米国が監禁するほどのことではないんじゃないですか。（あなたは）黙って、今日まで監禁されていたわけですか」

彼は思わず、声を高める。彼の胸のなかで忘れかけていた疑念が狂暴なまでに大きく膨れ上がっていた。若い母は幼い子を放擲したまま、愛人のもとへ走ったのではなかったのか。幼い子はなにも知らされずに、十何年、離れでひとり、ただ母の帰りを待っていたのだ。

無言のまま、母はじっと彼の目を見ていた。やがて意を決したのか、目を光らせ、口を開く。

「わたしもはじめはそう考えていた。日本に残してきた子供たちを考えると一刻も早く戻りたかった。そして何度も訴え、帰国を願った。だがそれは逆効果だったわ。自分の行った行為に対して反省していないと取られたばかりではなかった。むしろ米軍への協力を拒否する敵対行為だとさえ思われた。以後、厳しい監視が待っていた。それが今日までつづいているのです」

「それではなぜ今回出国の許可が……。東日本大震災があったからですか」

「それも考慮されたのかもしれませんが、じつは……」

母は突然口を噤む。そして目を瞑む。安里が母に鋭い視線を向けている。彼はなぜか一瞬全身に戦慄が走るのを覚えた。

「なぜ突然許可が下りたのか、よく分かりません。前々からお願いしていたので……」

母は何事もなかったようにつづける。

「薄々感じていたのですが、米軍はわたしを戦争犯罪人（戦犯）の一人として拉致し、収監していたのです。わたしが反抗したり、言うことをきかなければ拷問も厭わなかったことでしょう。ほどなくして始まった尋問はとても厳しいものでしたから。そして米軍に黙って協力するほかないと悟らされていったのです……」

彼は母が話そうとして途中で急に止めたことがなにだったか気になったが、安里の鋭い視線を思い浮かべ、黙って耳を傾けていた。

「課せられた当面の役務は米軍が大量に押収してきたプロジェクト関係資料の整理や翻訳を手伝うことでした。担当の若い軍人は大学院を出たばかりの学究肌で、面倒なことは一切なく、わたしにまかせっきりでした……」

「……」

「山積みされた資料の山を目の前にして、すっかりうんざりしてしまい、なにも手につかず何日もぼんやりと資料を見ていたのを覚えていますが、自分のやってきたことを思い返し、それがどんなプロジェクトの一部だったのかと思い、そのプロジェクトの全体計画に興味をもち、いつしか資料

の隅々まであたってみるようになったのです……」
「……」
「いまさら言い訳がましいことは言いたくないのですが、わが子を数十年も放置せざるを得なかったわたしにはいままでの自分のすべてをさらけ出すほかないのです。なにしろ、それにわたしは戦犯の一人だったわけですから……」
母は参加させられたプロジェクトについて詳しく話しはじめた。
彼はよく聴いていなかった。彼は哲雄を思い浮かべた。あの夜、哲雄はしきりに母が戦犯の汚名をそそごうとしていたのではないかと言っていた。だがそれはすでに戦犯として米国に拉致され収監されている哲雄の父親を救い出すためでもあった。そして隠匿していたプロジェクトの関係資料のすべてを提供したのだった。
ところが、哲雄の父親である森島教授の解放と引き換えに渡したはずのプロジェクト資料が、逆に、教授と母を米国にとどめておくことになっていったのだ。それはその資料が極めて高度な内容を秘めていたからであった。
プロジェクトの実行計画は詳細かつ緻密に設計され、そして各種の方法や装置を駆使し、ほぼ完璧に実行されていた。もちろん、データも格段と精度の高いものがそろっていたのである。
というわけで、プロジェクトを総括した教授とそれを補佐し、実験をも手がけた母は米国陸軍の保護下に置かれることになったのだった。そのころ、終戦間際に南下したソ連軍らもプロジェクトの存在を知り、関係者や関係資料を探しまわっていたらしい。
「叔母さま。食事にしましょうか。疲れたでしょう」
安里は口を挟む。
「そうねえ。でもまだまだ話すことがあるのよ」
「でもお腹が空いたでしょ。機内でもあまり召し上がらなかったですもの」
「そうね。じゃ、つづきはあとでね」と言いながら、母は席を立った。
安里は目で母を見送ると、丁度顔を出した仲居に料理のスタートを依頼する。そして一呼吸置いてから、彼に目を向けた。
「信二郎クンは元気かしら」
「それが……」
彼はホテルにくる前に信二郎の事務所を訪ねたときの一部始終を話す。
「そうなの。赤ちゃんのとき手放した子のことが気になっていて、叔母さまはいろいろ手がかりとなるものを探してきたらしいの。それで今回もなにかいい情報がないかと……。ということで、信二郎クンのことを思い出したわけ。その子の名前も『しんじろう』というそうよ。なんでも『しん』は進むの『進』だと言っていたわ。信二郎クンをなんとか見つけ出してこの機会に一度会わせてみたらどうかしら……」
安里は哀願するような目をした。
「そうだな。でもどうかな、見つかればいいが……」
彼は信二郎のことをもしかして双子の弟ではないかとずっと思っていたが、哲雄があまり気乗りしないようすだったこともあって、わざわざDNA型鑑定で調べる気にもなれなかった。というより、真実を知ることがなんとなく怖かったのだった。
もし弟でなかったらと思うと、あえて調べる気にはなれなかった。だがあのときから五〇年も経っているいま、彼はどんなことでも受け入れる気持ちになっていた。

「でも信二郎クンのことを弟かもしれないと思っていたんでしょ……」
安里は彼のこころのなかを推し量るように言う。
「多分、やつはいまごろどこかで核シェルターを造っているんだろうな。探してみようか」
彼は信二郎を訪ねたとき応対した伊東というひょろりとした体躯の面長の社員を思い浮かべる。
母が戻ってくる。それが合図だったように、エビ天ぷらを皮切りに揚げたての天ぷらが次々と運ばれてきた。
三人は黙々と箸を口に運ぶ。だがそれもはじめのうちで、次第に箸の動きが鈍くなる。それでも九〇歳を超しているはずの母はじつに健啖家で、運ばれる料理をすべてぺろりと平らげていく。最後のかき揚げのお茶漬けも残すことはなかった。
でも果物のデザートにはなかなか手を出さず、目の前に置いたままだ。
彼は母が話しだすのを待った。口を開こうとしているように見えるのに、母は口を閉ざしたままだった。なにか逡巡しているようにも見える。彼は黙って苺を口のなかに押し込み、ゆっくり噛み砕き飲み込んでいく。
「叔母さま、今夜はこの辺で……」
母は軽く頷く。それを見て、安里は彼を促す。彼は最後の苺を頬ばると、おしぼりを取って手を拭いた。

39

何十年ぶりで会ったときの耕一郎の目を思い浮かべながら、サヨはベッドを輾転とする。自分ではすべてさらけ出すと言いながら、どうしても言い出せず、言い残してしまったことを悔いた。
なぜ最初にそのことを言い出さなかったのか。耕一郎が訊かなかったからか。それでも自分から言い出すべきだったのではなかったか。彼女は自分を責める。そして責めつづけた。
初めて会ったとき、耕一郎の目は澄んでガラスの面のように平穏で、波一つなかった。だが話しはじめると、なぜか次第に波立ち出していった。
彼女は訊かれたことに、事実ありのままに答えたつもりでいた。ＧＨＱの担当官が来て拉致されたこと、そして米国へ送られたことも事実だった。それなのに、耕一郎の目がいら立ち出したのはなぜか。
彼女はなぜか、なぜかと自分に何度も問うた。輾転としながら、耕一郎とのやり取りを思い返し、彼女は自問を重ねた。そしてようやく、自分で事実と思っていたことが、事実でなかったことに気づいた。自分には「事実」でも、相手には「事実」ではないのだ。
自分で事実と思って話したことは断片の事実にすぎなかったのだ。事実を話すと言いながら、自分に都合のいいところだけの事実の断片を話したにすぎなかった。
ある日拉致されて米国へ送られたのは事実にちがいないが、それはまさに、事実の断片にすぎなかった。こんな断片をいくらつなぎ合わせても全体像とはならない。地球上で生起する「事実」は綿々と連続する事柄であり、また面的に広がっているものだ。だから、単に、その断片をいくら寄せ集めたところで意味ある「事実」になることはないのだ。
ある日拉致されて米国へ送られたと聞いて、耕一郎はそれでどうなんだと思っていたにちがいない。そのことに全然気づかず、彼女は延々と事実

の断片を繰り返していたのだった。
「ああ……」
彼女は思わず、声を出した。
サヨと姉ヒナとは双子の姉妹であった。小さいときから同じものを与えられて育てられた。同じものがふたつ用意できれば問題がなかったが、ひとつしかないときは大問題だった。そしてひとつを巡って、永遠の争いがはじまるのだった。
彼女はいつも「戦争は人間から人間性を奪い、敵と味方に分断してしまいます」と言っていた。これは自分に対する戒めであった。だがあまり意識することはなかったが、同時に、自分の行為の言い訳にもなっていた。
戦争に勝ったほうが英雄となり、負けたほうが戦争犯罪人とされるのだ。彼女には自分はむしろ戦争の被害者であるのに、なぜ戦争犯罪人とされるのか不満だった。
一方、ヒナは自分の夫である森島教授が戦犯に列せられたとき、生まれたばかりの安里を抱えながら、自ら自分をも罰し、罪に服そうとしたのだ。ヒナはかなりまえから夫の行為に対して疑念を抱いていたが、戦犯に列せられているという情報を得て、そう決断したのだった。だがそのまえに過労がたたり肺結核を患い、一歳にもならない安里を残し、結核病棟に隔離される身となる。
当時森島家に身を寄せていたサヨが安里の世話をする羽目になったが、彼女もまた双子の男の子を生んだばかりだった。彼女は無理を承知で三人の赤子を抱えて奮闘したものの、根を上げてしまう。やはり無理だった。
終戦直後の混乱や日増しに厳しくなる食料事情にお手伝いさんのひとりが田舎へ帰ることになった。その折に、彼女は双子の弟の養育を一時託すことにしたのだった。姉の子安里ではなく、わが子を託したのは、姉ヒナへの負い目もあったが、それはむしろ彼女の計算だった。悪魔の計算だった。
一年後、彼女はヒナが結核病棟を出て、遠く離れた修道院へ移り、修道女となって、世間とのつながりを一切断ってしまったことを知る。彼女はおもむろに活動を開始する。それはヒナが結核病棟へ入院したときから計画していたことであった。
彼女の基本戦略はこうだった。姉ヒナがわが身を犠牲にしてまで夫の罪の許しを乞おうとしたのに対して、彼女は米軍に捕らえている教授を救い出してわがものにすることだった。そのために、教授の戦犯容疑を晴らすことだ。もしそれが不可能なら、次善の策として、米軍と取引するほかない。とにかく、教授を収容所から解放させるのだ。そして彼女はこれらを同時にやってしまおうと計画したのだった。
「撤退することになった。Mプロジェクト（彼女が参加していたプロジェクトをこういっていた）の関係書類はすべて焼却処分しなければならない」
男は離れたばかりの女を引き寄せると、呟くように言った。それはいつも聞き慣れている声とは違い、低く地の底から漏れてくるような声だった。サヨは一瞬、戸惑い、顔を上げ、声のするほうを見る。
薄明かりのなかで森島教授の顔がほんのりと白く浮いていた。やはりあの声主は教授だった。サヨは教授の胸に頬を押し付ける。
そして彼女はもう一度男の胸から頭を離し、男の顔をしげしげと見た。男は黙って女を引き寄せ、激しく抱いた。
明くる日、森島は何事もなかったように、「暮れに日本に行ってくる。

そのときにこれまで買い漁った古美術品も持って帰る」と言った。軍用機で日本へ荷物を運ぶらしく、それに便乗するのだという。

あれは男の一瞬の激情だったのか。それとも……。

サヨには森島教授がなにを考えているのか分からなかった。彼女は森島教授のこころのなかを知りたかった。

その日から、彼女は日本に持ち帰る品々の荷造りと資料の焼却に追われた。荷造りは用意された木箱に書画や陶器を詰めていくだけだったが、彼女は将来を見越したように、意識して焼却処分するMプロジェクトの関係書類を包み紙にしたり、隙間を埋める緩衝材に利用した。というより、彼女は古美術品よりも希有なプロジェクトの関係書類を持ち帰りたかった。そしてこれは将来きっと役に立つという思いがあった。そこで彼女は木箱に詰められた中身のチェックがない軍用機による運搬をいいことに、古美術品は申し訳程度にして、木箱にはできるかぎり関係書類を詰め込んだのだった。

彼女は姉ヒナが出て行くと、書斎に入り浸り、木箱を開き、資料の整理をはじめた。古美術品の包み紙や緩衝材となった資料を取り出し、一枚一枚丁寧にしわを伸ばす。そしてファイルし直した。

資料の整理が一段落すると、Mプロジェクトについて聞いて回り、情報を集めていった。だが極秘で進めれていたせいか、Mプロジェクトの資料の値打ちが分からない。彼女はやはり教授の行為の証拠となるおそれのある資料を焼却したほうがよかったのかとさえ思った。

そんなとき、米軍が原爆を投下した広島と長崎で被爆者の調査を精力的に進めているという噂を耳にした。そのとき、彼女は米軍と取引できると直感したのだった。

太平洋戦争が終ったばかりだというのに、米ソの対立が表面化しはじめていた。ソ連が米国の原爆成功のあとを追いかけ、両国は核兵器開発競争にしのぎを削る。そして東西冷戦時代に突入していった。彼女は両国の軍備拡張の機会を見逃さなかった。

彼女はＧＨＱに対して行動を起こす。「生物兵器開発計画」に関する資料の存在を仄めかし、森島教授の釈放を嘆願したのだ。

ＧＨＱは彼女を召喚し、一応尋問すると釈放した。彼女は帰宅して、すぐ書斎を覗く。折角整理しておいたのに、木箱の資料の大半が消えていた。ＧＨＱの担当官が来て、有無をいわさず、押収していったという。

自分の不注意不用心だった。彼女はまんまと騙されたという思いが強かった。すべてが水泡に帰してしまったのだ。これで教授を救い出す道が閉ざされてしまったと思うと悲しかった。彼女はなす術もなく、すっかり途方に暮れ果て、自分を責めつづけるほかなかった。

数日後、突然、ＧＨＱから呼び出しがあった。案内された部屋のドアを押すと、担当官なのか、まえに会ったことのある軍服の男が待っていた。テーブルには見たことのある書類の束が載っている。

「これは分かりますか。あなたが持っていた例の資料です。あなたにはここに書いてあることが分かりますか。この記号はなにを表しているのですか」

軍服の男は資料を開くと、紙面を指差し、矢継ぎ早に訊いてくる。それはMプロジェクトの資料作成時に使用した略字や略語の記号であった。関係者にはすぐ理解できるものであったが、彼女はしばらく考える振りをして資料の二、三ページを捲る。

「あなたはプロジェクトの一員だったのでしょう。それなら分かるでしょう」
「ええ、でも、正確には……。森島教授のもとでしたら、可能かもしれませんが……」
「森島本人だったら問題がないということですか」
「ですが、教授がデテールまで記憶しているかどうか……」
「じゃ、教授と一緒ならうまくできるということですか」
「ええ、可能と思います」
彼女は口からでまかせに言う。教授が聞いていたらどんな顔をするかと思ったが、こうでも言わなければ教授に会うことができないと考えたうえでのことだった。
軍服の男はしばらくじっと彼女の目を見ていた。そして「追って、連絡します」と言い、彼女をドアまで送った。
一週間後、彼女のもとに、「明日、軍用機で米国へ発っていただきます」という連絡が入った。そして彼女は米国で教授と再会を果たしたのだった。

40

耕一郎はふたりを乗せたエレベーターが上っていくのをしばらく見送っていたが、踵を返すと階段を上り、エントランスホールに出る。自宅へ帰るか、それともこのままホテルに泊まるか、彼はしばらしホールの中央に立ち止まって考えていた。
まだ時間は早い。広いホールにはひとが行き交え、活気があった。若い男女の一団が入ってきた。ホールが急に賑わい、一段と華やぐ。フロントカウンター前に人だかりができる。
彼はリビングのソファで編み物をしたり、本を広げていた妻を思い浮かべる。だがそこにはもう誰もいない。ひっそりと静まり返った暗闇のリビングが待っているだけだった。
彼は人だかりが引くのを待って、フロントへ行き、宿泊を申し込む。そして鍵を受け取ると、エレベーターへ向う。
「あのー、生野先生では……」
後ろで声がした。振り返ると、細身の男が笑みを浮かべている。
「はあー……」
一瞬、彼は誰だったか思い出せなかった。細身で背が高く、面長の顔立ちだ。
「先ほどは失礼しました」
「あ、伊東さんでしたか」
彼は信二郎を訪ねたときのことを思い出した。あのとき会った男だった。そして時間があれば、これまで調べたことについてお話ししたいのだと言う。
「いいですよ。今夜はここに泊まることにしていますから」
ロビーは人びとで埋まり、話し声が溢れていた。奥のコーヒーラウンジのテーブルはもちろん、カウンターにも空席がない。
「上にいってみましょうか」
伊東は最上階にあるスカイラウンジが空いているかもしれないと言う。そして下りてきたエレベーターに乗り込む。
薄暗い照明のなかでテーブルクロスだけが白く浮いていた。一面の大き

なガラス張りの壁越しに林立するビルや道路を疾走する車が描き出す光の夜景が広がっている。それとは対照的に、右側には皇居の暗い森が広がり、そこには明かりのない広大な暗闇の空間があった。

彼は伊東と薄明かりしかない半暗闇のなかのテーブルに向かい合う。運ばれてきたウイスキーグラスを手に取って、軽く揺する。ウイスキーに浮いた氷塊の鈍い音が響く。彼はロックを一口含み、伊東が口を開くのを待った。

「会長は……」

彼には伊東の表情が見えないが、伊東は信二郎のことを会長と言っているらしい。彼はぼそぼそと低い声で話す伊東の言葉を聞き漏らすまいと顔を寄せていく。

「これまでも二、三週間留守にすることがありまして、今回もあまり気にかけずにおりましたわけで……。こんな折にお訪ねいただいたので、失礼致してしまいましたが、調べたところ、もしかしたら、今回の大震災に遭われたのかもしれないことが……、いや、その可能性がなきにしもあらずと申しますか……」

彼は照明が明るければ、伊東の額、いや、顔中が噴き出ている汗が光っているだろうと思った。

「実は、かなり前に、会長から工事を請け負ったものがおりまして、その男に訊いたところ、はじめは口止めされているといって話さなかったのですが、岩手のほうにシェルター付きの別荘を造っていたとかということが分かりまして……。それで早速、明日にでもそこへ行ってみようと思っているのですが……」

「そうでしたか。核シェルターを造っていたのか」

「え？　核のですか……、核戦争用のシェルターだったのですか」

「さあ……、どうかな……」

「こんなことお伺いして失礼ですが、先生と会長はどういうご関係なんですか。会長には奥様もお子さんも、ほかに誰もいなかったように聞いていましたが……」

「そうですか……」

伊東の鋭い視線を感じた。薄暗闇が幸いだった。彼は素知らぬ振りを通すことにした。

「で、明日は何時頃に出発する予定ですか。是非、同行させていただきたいのです。わたしのほかにもうふたりをお願いしたいのですが……」

「え？　計三名ということですか」

「ええ、そうです」

彼は強く言い切る。

「大震災直後なので、通行できる道路も限られておるそうで、通れる道路でも通行制限しているとかで、到着するまで何時間かかるか分かりません。ただ、救援物資の輸送を優先しているとかですので、とにかく救援物資を沢山調達していくつもりでいます。最悪のときは車中泊になるかもしれませんよ」

「いいです。三人は肉親かもしれないのです」

「……」

聞こえたのか、聞こえなかったのか、伊東は黙っている。彼は少々張ったりをきかしすぎたかと思ったが、こうでも言わなければ三人は無理だと言われかねないと思えたからだった。

「そうだ。こういう手もある」

伊東が声を高めた。会長は時折ヘリコプターをチャーターしていたらしい。そして三人はヘリにしたらいいと言った。

結局、伊東ら会社のものが先に行って調査することにし、三人はその結果を聞いてからどうするか決めるということになった。

彼は伊東と一緒にエレベーターに乗り、エントランスホールまで下りた。出口まで送って別れた。彼はゆっくりエレベーターへ向う。

突然、三人は無理としても、自分だけは伊東と一緒に行動すべきではないのかという思いに駆られた。彼は踵を返すと、伊東の姿を追った。

ホールを走り抜け、回転ドアを押した。そのとき、ふと、伊東の姿を見たような気がした。ドアはら離れて、彼は後ろを振り返った。

ホールのなかに伊東の後ろ姿があった。

彼は回れ右して、ふたたびエントランスホールへ入っていく。

「伊東さん」

面長の顔が振り返る。

「明日、わたしだけ一緒に連れて行ってくれませんか」

「あ、先生……、忘れ物がありました」

「なにか忘れましたか」

「先生にお渡しするものを忘れていました。実は……」と言いながら、伊東は胸のポケットから厚みのある封書を取り出した。

「会長の机の引き出しにあったのですが、お渡しすべきか迷っているうちに忘れてしまいました。それで急いで戻ってきたのでしたが、それじゃ、明日、出かける時間が決まればご連絡致します。では、この封書をお渡しします」

封書を片手に立ち尽くしている彼を尻目に、一度も振り返ることなく伊東は去っていった。

41

耕一郎は白い角封筒を大事そうに手に持ってエレベーターを降りると、ドアのルームナンバーにときどき目を向けながら、絨毯の敷き詰めてある長い廊下を歩いていく。フロントで告げられたナンバーの部屋は一番奥だった。

部屋に入ると、彼はすぐ角封筒を開く。白紙に手書きの文字が並んでいた。

耕一郎宛の信二郎の手紙（封書）

耕一郎クン、事業の第一線がら退いて、暇ができたので、長年考えてきた核シェルターを造ってしまったよ。水爆攻撃にも耐えるような頑丈で立派なものだ。それで最近ではこれを別荘代わりにして長期滞在することもあるんだ。

ところが、シェルター滞在を重ねるごとに、なぜか分からないが、なんとなくしっくりしない思いが強まるんだ。シェルターという頑丈一点張りの造りのせいか、どうしても圧迫感があることは否めない。だがこのシェルターは一般のものと違い、天然の洞窟を利用して海に面して明かり取りをつくって多少開放感があるように細工してあるのだが……。

どうやら、孤独感が頭をもたげ、核戦争で世界が滅んだとき、ひとりだけ生き残ってもみてもしょうがないとこころのどこかで感じているのかも

しれない。人間が生きるにはひとりでは無理で、人びとと交える社会が必須なのだろうか。おれは生まれてこのかた一人ぼっちだったという思いが強いが、やはり社会のなかで生きていたのだろうな。

シェルターよりも平和な社会をつくるべきだといっていたな。平和な社会をつくるなんて、どだい無理で、空理空論にすぎないとしか思っていなかった。だがそうではなさそうだ。平和でみんなが幸福であれば申し分なしだね。

それにきみは、前々から現代科学技術文明の問題点を指摘し、新しい文明へ転換しなければ人類が滅亡すると言っていたが、長い間、おれには理解できなかった。というより、おれは現代科学技術文明にとっぷり浸かって、金儲けに勤しんできたというべきかもしれない。そのこともあって、頭のどこかで、きみのいうことを理解しようとしなかったのだろうか。

実際、核シェルターを造ってみて、あのとき、シェルターよりも戦争のない世界をつくるべきだと言っていたことを時々思い出すよ。そしてやはりきみの言う通りだと思うようになった。核戦争で人間社会が全滅してしまっては、ひとりだけ生き残っていても仕方がないよ。

そんなわけで、最近はシェルター滞在の折に、近くの「限界集落」巡りをするようになった。きみがいつか提案していた「自給自足型循環社会構想」を思い出したからだよ。滅びゆく集落を新しく自給自足型循環社会タイプの集落に改造できないかというわけだ。

とにかく、人類が滅んでいくのを手を拱いて見ているわけにはいかないからね。

そこで、ひとつ頼みがあるんだ。

この世から戦争を排除してほしい。人間と人間の争いである戦争を根絶してほしいのだ。この世界を戦争のない平和な世界にするにはどうすればいいか、その実現方法やそのための対策を考えてほしいのだ。

きみが言うように、確かに、現代科学技術文明には問題が山積している。現世代本位で次世代のことすら考えようとしない。それに金儲け本位で科学技術を恣意的に使い回し、地球資源を浪費して地球環境を汚染し放題だ。これでは一〇〇年後に人類が生き残っているか分からないではないか。

頼む。おれの全財産をそのために提供したい。人類の未来問題の研究に役立てたいのだよ。手続きは完了し、公正証書にしてある。

二〇一一年一月一日

兼尾　信二郎

追伸

荷物を整理していたとき、きみと哲雄先生の頭髪が見つかった。すっかり忘れていたが、別れるとき記念に頂だいていたものだった。

ＤＮＡ型を調べたところ、きみと哲雄先生とがかなり一致しているという。ついでにおれのもやってみたら、おどろくな、きみと全く一致しているという結果が出た。なぜか分からないが、一〇〇パーセントないとはいえないらしいが、検体の混同がなかったか再チェック中。

二〇一一年三月一日

彼は手紙を持ったまま、その場にしばらく立ち尽くしていた。それから窓辺に寄ると、カーテンを開ける。目の前に、暗い夜景が広がっている。スカイラウンジのバアから見えた夜景とは全然違って見えた。

「やはり、そうだったか」

彼は窓ガラス越しに夜空に向って呟く。手紙の断片が闇夜を飛び交え、森島家の離れで信二郎と共に過ごした日々の出来事が散り散りになって夜空を舞い、空高く飛んでいく。そして彼に向ってふたたび舞い降りてくるのだ。

「進二郎だったんだ。そうか……」

彼は何度も呟く。そして呟くたびに離れで共に過ごした信二郎が蘇る。

彼は手紙をもう一度見た。本文は一月一日付けだったが、追伸は三月一日だ。信二郎は追伸を書き加えて、そして机のなかに放り込んでいたのだ。再調査の結果が出れば、さらに書き足すつもりだったのか。

信二郎が出かけたのは三月一日の午後か、遅くとも翌日に出かけたのじゃないか。いや、もっとあとかもしれない。かといって、一〇日も後とは考えられない。すると、書きかけの手紙を机に仕舞い、そしてシェルターへ向ったのか。となれば、やはり、出先で大震災に遭ったのか。

彼は次第に気が滅入ってくる。明日、シェルターで信二郎の無事を確認できればいいが、もしかして……。こう思うと、彼はいてもたってもいられず、手紙を片手に部屋中を歩き回る。

そんなことを繰り返しても、どうにもならなかった。カーテンを引き、窓辺を離れると、彼は手紙を机の上に置き、受話器に手を伸ばす。安里に電話してみようかと思い、フロントにルームナンバーを尋ねる。

「お客様のルームナンバーはお知らせすることはできませんが……」

「それでは、わたしが電話ほしいと言っていると伝えていただけませんか」と言い、名前と自分のルームナンバーを告げる。

安里は折り返し電話してくると思い、そのまま電話の前で待っていた。だがいくら待っても電話がない。かといって、もうフロントに電話する気にもなれなかった。

彼はなにもする気になれず、そのままベッドの上に横になる。

疲れていたが、頭が妙に冴えて、眠れなかった。目を瞑ると、脳裏に母、安里、信二郎がなんの脈絡もなく現れては話しかけてくるが、やがて消えていった。

42

信二郎が出かけようとしたとき、その日の郵便物が届いた。ざっと見て、必要なものを選び、鞄に放り込む。時計を見ると、一一時まで一五分ある。まだ間に合うかもしれない。彼は急いで事務所を出る。後ろで女の声がした。多分、係の子だろう。

「ちょっと、出かける。連絡する」

彼はいつもこうだった。行き先も言わずに出かけるのだ。社長を辞めてから、ますますひどくなった。係のものさえ彼の居所が分からないことが多いのだ。

係といっても、名ばかりの会長職の彼には秘書はつかない。会社のビルの最上階にある彼の事務所は一番眺めの良い部屋だが、彼一人だけで、世話はとなりの社長室が受け持っていた。留守が多いし、用事も滅多にない。在室のときにお茶を出すぐらいだった。

彼はどちらかと言えば、ひとに仕事を命じて威張っているタイプではなかった。何でも自分でやろうとしたし、そのほうが仕事の説明をしているよりも早いのだ。

だが会社組織で、組織が大きくなれば、そうはいかない。そうなったとき、彼は自分のやり方を知っているものに仕事のすべて任せることにした。高度成長期とも重なって、無我夢中で働いているうちに、いつしか不動産王と呼ばれるほど都心に数多くのビルを所有するまでになっていた。

彼は六〇歳になったとき、事業を後継者に任せ、第一線から退くことにした。自分が経営していた不動産事業会社の株式を五〇パーセントほど所有していたが、これをどう処分するかが当面の解決すべき課題だったのだ。

この課題も漸く解決のめどが立ったのだ。耕一郎が承知するかは不明だが、彼は一方的にそう決めてしまっていた。そしてしばらくぶりに、ひとりゆっくりとシェルターの別荘で早春の海を眺めながら過ごそうかと思ったのだった。

東京駅から新幹線で盛岡まで行き、そこから支線で海岸へ向う。そこからタクシーで三〇分も行けば目的地だ。順調に行けば、夕方までに着くはずだった。

新幹線に乗り込み、座席に付いた途端、列車が動き出した。二時間と少しで盛岡に着くだろう。彼は背を倒し、目を閉じた。

彼は耕一郎が戦争のない社会をどう構想するか楽しみだった。

幼少の頃から、施設でよくいじめられた。強いものが弱いものをいじめるのだ。それも腕力の強いものから順々に下へいく。いじめの連鎖だ。自分より弱いと分かるとつい手を出してしまうのだ。でもこんなことを繰り返していれば、いつまでたってもいじめはなくならない。

あるとき、彼は年長のいじめる相手に反抗した。その児はいきり立ち、彼を押さえ込み、馬乗りになると頭や顔面をぼかぼか殴った。彼は泣きながら「いまに見ていろ」とこころのなかで叫びつづけた。

社会に出ても、変わりなかった。殴り合いはなかったが、形を変えたいじめはしょっちゅうあった。人間同士がなぜこうもいがみ合わなければならないのか。人間同士だけではない。組織間でもそうだ。国内だけではなく、国際社会でもそうではないか。国家間や民族間の争いや対立が避けられないのはなぜか。それだけではない。人種や宗教あるいは主義思想の違いでもいがみ合う。格差や貧困、差別や排斥も消えることはない。

いじめにはさまざまな形態があっても、その構造に違いがなかった。強いものが弱いものをいじめるのだ。あまり力の差がなく、いじめられることの多いものも、力をつけると、途端に、弱いものをいじめ出すのだ。これは永遠に変わらない。

それにいじめられたものは決してそのことを忘れることはない。そして仕返しの機会を待っているのだ。

力は腕力や武器だけではない。策略や悪知恵、金力や人脈など、いろいろなものがある。そして社会全体が強いものに有利にできている。いや、強いものがそうなるようにしているのだ。生まれながらにして人間は皆平等なんたいうのはウソだ。恵まれているものは生まれたときから恵まれ、貧しいものは生まれたときから貧乏なのだ。

一方、現代科学技術文明のもとでは、さまざまな手段を生み出してきた。兵器として使用する爆発物もダイナマイトから核分裂・融合による原子力へと変わってきた。そしてさらに「反物質爆弾」のような「極超兵器」をつくり出すにかもしれない。

これらもすべて強いものがより強くなるために利用するのだ。

こうして強いものはますます強くなり、弱いものはさらに弱くなる。裕福なものはますます裕福になり、貧しきものはさらに貧しくなっていく。

人間はこんなことをいつまで繰り返そうとするのか。そしていつまで繰り返せば気が済むというのか。

人間は互いに相争う動物なのだろうか。そしてこれまで相手に勝つために知力を磨いてきたのか。科学技術文明は人間を苦役から解放するものではなく、人間が人間を征服し支配するための営為ということか。これでは人間は人間同士の争いの果てに絶滅するほかないではないか。

人間が人類として存続するためには、どうしても戦争のない社会、平和な社会が前提となるのだ。

こう思いながらも、彼のこころは空虚そのものだった。なにをやっても満ち足りることがなかった。第一線を退いてから、毎日仕事に追われることもなく、考えることが多くなったからかもしれない。考えるといっても取り立てて深く考えるようなものではない。ただ暇に飽かせてなんとなく決めかね、あれこれ考えいるだけだった。

彼はずっとひとりだった。若い頃、思いを寄せたひともいたが、仕事に追われ、所帯を持つことはなかった。幼少のころから、頼るのは自分しかいなかった。施設では毎日がひもじいかったし、いじめもつづく。そんななかで、彼は自分で考え、いろいろ工夫して生きていくしかなかった。

働くようになって必死に金を貯め、中古のトラックを買って自立した。丁度その頃、ビル建設や地下鉄工事から出る大量の残土処理が待ったなしの状態だったこともあったが、彼の才覚も与って、事業は急速に拡大していった。

彼は無我夢中で仕事に励んだ。金も貯まり、事業を後継者に託し、長年の夢だった核シェルターも造ることができた。

だがなんとなく満ち足りぬ毎日なのだ。なぜか。なに不足ないはずなのに、なぜこうもこころが晴れないのか。これでは死んだも同然ではないか。

もしかしたら、生きているように見えるだけで、本当はもう生きていないのではないか。何年も仕事に励み、夢中で生きてきたのに、それは見せかけだというのか。

親に捨てられたときに死に、施設に拾われて生き返ったと思っていたのに、これまでの人生はすべて見せかけだったのか。

一体、生きるということは、どういうことなのだろうか。

美味いものを腹一杯食べることも、働いて金を儲けることも、生きているからできることではないか。それともおれは仕事を食べて生きていたというのだろうか。

そうか。仕事をやめた途端、おれは死んでしまったのかもかもしれない。

彼は寂しげな微笑みを浮かべながら、次第に深い眠りのなかへおちていった。

43

耕一郎は夢のなかで電話のベルが鳴るのを聞いた。遠くのほうだった。うつらうつらしていた彼に深い眠りが襲ってきた。

ふたたび電話のベルがけたたましく鳴った。

突然、安里の顔が浮かんだ。ベッドから飛び起きる。そして彼は机の上の電話器から受話器を奪うように取る。

「耕一郎クン」

やはり、安里だった。

「遅くなって、ゴメン。シャワーを浴びていて……」
「明日、信二郎を探しに行くことになったので……」
彼は伊東と会ったときの一部始終を話す。
「そお……」
安里に一刻も早く知らせたほうがいいと思ったものの、彼女の疲れきったような声に、彼は「出発が早ければ、明朝会えないかもしれない」と告げて早々に電話を切ってしまう。だがなにかいい忘れたように思えて、彼は手を受話器に置いたまましばらく立ち尽くしていた。
信二郎の手紙のことをすっかり忘れていた。
一瞬、彼はＤＮＡ型検査も再チェック中のことだし、安里には手紙のことを内緒にしておこうかと思った。だがすぐ幼時に手放したわが子を探している母のことが思い出され、迷ってしまう。
まだ、一二時を過ぎたばかりだった。伊東と別れて部屋に入り、彼は服を着たまま、ベッドに横になっているうちに居眠りしていたのだった。
彼は服を脱ぎ、ふたたび、ベッドの横になった。伊東からいつ連絡があるか分からなかった。岩手まで車で行くなら、道路の復旧状況がよく分からなかったし、途中不測の事態が起きないとも限らないので、何時間かかるか分からない。シャワーは明日起きてからすることにして、とにかく、早く眠りたかった。
彼はいつもより固く目を閉じて眠りの訪れを待った。だが信二郎の手紙が頭から離れなかった。
戦争のない社会を構想しろというが、お前を捜している母は戦争に加担していたのだ。そしていまなお足を洗えずにいる。いや、いまも加担しつづけているということだ。
そのようなひとにお前の手紙を見せていいのか。安里に手紙を見せれば、母も見ることになるだろう。お前の手紙は彼女の人生を全否定するようなものではないか。
でも隠してみてもどうにもなるまい。母の立場や考えがどうであろうともうどうでもいい。幼いわが子を捨てて愛人のもとへ走ったひとだ。今度はわれわれが母を捨てても構わないではないか。
突然、若い女の人が現れた。微笑んで手招きしている。だが誰か分からない。近づいて行こうとするが、足が動かない。早くそばへ行こうとするが、どうしたことか、ますます遠ざかって行くのだ。
離れにひとりでいたときにこんな夢を何度も見たことがあった。微笑んで手招きしている若い女のひとは突然姿を消した母だった。目を覚まし、気が付いてみると、涙で枕が濡れていた。その都度、彼は母を思い、思い切り泣いた。
だがもう泣くことはなかった。しばらくすると、母の夢を見ることもなくなったのだ。
そんなある日、彼の隣の部屋にひとりの少年がやってきた。信二郎だった。
彼は夢のなかで何度か少年のすすり泣く声を聞いた。夢が消えても、泣き声が聞こえてくる。隣から漏れてくるすすり泣きだった。
彼は両眼をぱっちりと開いて闇を見た。カーテンの隙間から漏れる薄明かりに天井が白く浮いて揺れている。闇も揺れていた。
彼はゆっくり眠りに落ちていった。

44

伊東から一〇時過ぎに一度電話があった。道路の復旧状況が分からないので、車にするかヘリにするか検討しているという。

もう今日は無理かと思っていたときに、二度目の電話があった。すでに一二時を回っていた。

一二時半にチャターしたヘリが迎えに来るという。ビルの屋上にヘリポートがあって、信二郎はそこからヘリに乗り込んでいたらしい。

伊東は今日中に引き返すつもりだろうか。時間の余裕はなかった。彼は二、三泊するつもりで用意していたバッグを肩に掛けると、部屋を飛び出る。

一瞬、迷ったが、一応チェックアウトしなければと思い直し、フロントに寄る。カードで支払いを済ませてから、安里に電話する。

「これからすぐ出かけることになった。また電話する。よろしく」

彼は短く一方的に言い、すぐ切った。一二時半まで一五分しかなかった。

昼時のせいか、歩道にはワイシャツの袖をまくり上げたサラリーマンたちが溢れ、同僚と話しながら横に広がって歩いている。彼はなんどもぶつかりそうになりながら、その間を縫って急ぐ。東京駅の丸の内北口から地下通路を通って八重洲口へ抜ける。横断歩道を渡れば、信二郎のビルはすぐだった。

「やあ、遅くなって……」

受付のまえで、伊東が待っていた。すぐエレベーターに向う。

「ヘリは……」

「着いてます。急でしたが、無理をいって都合をつけてもらいましたので……」

伊東は無愛想に言う。受付で大分待っていたのだろう。

屋上のヘリポートでは回転翼を回してヘリが待機していた。そばに二人の若い男が待っていた。同行する部下らしい。

ヘリは四人が乗り込むのを待って、回転を上げ、宙に浮き、飛び立った。

45

二〇一一年三月一一日に発生した福島第一原発事故は東日本全域を一挙に放射能で汚染した。

ヘリは放射能を避け、できるだけ海上を迂回するコースで目的地に向う。そして滞在時間は短くして引き返す予定だった。

「このヘリの操縦士は会長を何度も運んだことがあるので、無理を言ってお願いしたのです。ですから、今日中に帰京する予定です。そのつもりでお願いします」

伊東は相変わらず、硬い表情で言った。まだシェルターの一帯も福島第一原発から飛散した大量の放射性物質セシウムで汚染されているのだ。

ヘリは海上を飛び続ける。左手の奥に微かに本州の影が見える。

「あの辺が事故原発群だ。まださまざまな核種の放射性物質を放出しているんじゃないかな。近くに寄ったら危険だ」

伊東が後ろの席の部下たちに言う。若い男たちは黙って窓に目を向け、外を眺めていた。

ヘリは向きを変え、海岸線に近づくと、海岸線に沿おって北上する。複

雑に入り組んだ海岸線がつづく。海水がまだ濁っている。入り江にはところどころに小さな漁港が点在しているが、津波の被害で流されたのか、漁船が見えない。人影もない。

ヘリが高度を下げだした。小高い山が海岸に迫っている。山の頂上付近に、球形の白い家が建っている。ヘリはその家を目指して下りて行く。

「ここですか。別荘は……」

伊東がヘリから地上に降り立ち、球形の白い家に近づいて行く。サッカーボール型だ。耕一郎が後を追った。ドアには鍵が掛かっていた。

「おい。加藤くん、鍵はないか」

「ありません」

加藤と呼ばれた若い男がぶっきらぼうに応える。

エンジンを止めて、ヘリから中年の操縦士と助手役の整備士が降りてきた。

「なかを見たことありますか」

耕一郎が若干年嵩の操縦士に尋ねる。

「この家の地下にシェルターが造られているんですよ。海岸まで洞窟がつづいていましてね。海岸の絶壁に開口口があって、社長さんはそこにテラスをつくって、そこからよく海を眺めていました」

操縦士がそう言ってから、振り返り、整備士に「テラスにはうえから降りて行けるんじゃなかったけ」と話しかける。

伊東は部下を連れて追いかけてきた。そして「家のなかには誰もいないようだ」と言う。

「ここからテラスに行けますよ」

崖の下を覗いていた操縦士が手招きしている。整備士がテラスから上ってきた。そしてシェルターのなかへ入れるようだと言う。

背の低い松の木に隠れて幅の狭い曲がりくねった階段がつづいている。それを降りていくと岩場に出る。そこが絶壁のテラスだった。海面までゆうに三〇メートルはある。

テラスの奥に洞穴の大きな口がぽっかり開いていている。なかへ入って行くにつれて狭まっていき、一〇メートルも入ると、さらに狭まり、天井も低く、人ひとり通れるかほどになった。そこに分厚いいかにもシェルターの扉のようなドアが設置されていたが、蝶番が壊れてしまったのか、解放されたままだった。

ここまでは開口部からの明かりは届かず、薄暗い洞穴を手探りで進むほかなかった。両側は天然の岩がむき出しのままだったが、通路にはコンクリートが敷かれているらしい。

突然、明かりが点いた。自動照明装置が設置してあるらしい。目の前にもうひとつの頑丈な造りの扉があった。

扉を押してもびくともしない。把手を引くと、すーっと開いて、照明のある広い空間が現れた。そこがシェルター内部だった。

一五畳から二〇畳はある一室に、ベッドやソファが無造作に置いてあり、大きな机もあった。壁には物入れが並んでいる。奥にはもうひとつ仕切られた空間があった。一角が空調などの機械室となっているが、その隣がバス、トイレらしい。それに洗面所と小さなキチンも備えてあった。

地下のシェルターは耐震構造になっているか、室内は整然としていて大地震に遭ったような痕跡はない。テーブルや椅子の位置もいつものようだし、倒れた家具や落下した食器類も見当たらなかった。

ベッドには寝乱れの跡があったが、誰もいない。信二郎の姿もなかった。

だが彼にはいまにも信二郎が戻ってきそうに思えた。

46

明るいうちに帰りたいという伊東を送って外へ出る。雪でも降りそうな冷たい風が吹いていた。日が落ち、急に、吹く風が冷たくなったようだった。

ヘリの回転翼の回転音が響く。耕一郎と伊東らはシェルターから地上の白い家へ上り、くまなく見て回り、信二郎がどこにもいないことを確めている間に、操縦士と整備士は先にヘリに戻り、帰りの飛行の準備をしていたのだ。

「ここにはいなかったのですかな、あのときは……。それとも出かけて他所に行っているのか。まさか、怪我でもして病院へ……、ということはないでしょうな。あんな大地震だったのに、建家もシェルターも殆ど無傷ですからね。もしかしたら、東京に帰っているのかもしれません」

伊東が会長の安否も分からずに引き返すのが心残りなのか、低い声で不思議そうに呟き、彼の顔を盗み見した。彼は素知らぬ振りをして、ヘリを眺めていた。

彼は安里や母のことが気になったが、しばらく信二郎のシェルターに滞在しようと決めていた。彼には信二郎がシェルターのどこかに潜んでいるように思えて仕方がなかったのだ。

伊東たちが乗り込むと、ヘリは回転翼の回転を上げた。すっと舞い上がると、ヘリは南方の空に消えて行った。

ヘリを見送ると、彼はなにか忘れ物がないかと辺りを見回してから、サッカーボールのような家の中へ入っていく。外見は球形で単純に見えるが、南側に大きなガラス戸がテラスに向ってあるほかに窓はなく、内部は中二階もあって結構複雑だった。ドアがやたらと多い。真ん中のリビングにはほぼ中央に六脚の椅子のある大きなテーブルとソファが置いてあったが、その周囲の壁にドアが並んでいるといった感じで、まるで蜂の巣を思わせる構造だった。

ここにも大地震の跡はなかった。家具類にも傾きや倒壊は一切ないのだ。

彼は信二郎がどこかに隠れていないか、もう一度ドアを順々に開けて内部をチェックしていく。中二階も見て回る。だが天井の低い中二階にはベッドがふたつ並んであるだけだった。

地上のサッカーボールの家のチェックが終ると、シェルターを隅から隅まで覗く。やはり、信二郎の姿はどこにもなかった。

ふたたび、地上の家のリビングに戻ると、ソファに腰を下ろし、携帯電話を取り出して安里を呼んだ。夕食に外へ出たのか、ホテルのどこにもいなかった。

安里と寂しく食事している母の老いた姿が浮かんだ。

一瞬、彼は伊東たちと一緒に一端帰るべきであったかと思った。信二郎がどこからか帰ってくるような気がしたことは確かだが、遺体が残されていなかったからといって、そんなことは信じていなかった。あの大地震で、次いで襲った大津波で、信二郎は命を奪われたにちがいなかった。

テラスから洞穴に入った瞬間、彼はそう感じたのだった。

いくらここで待っても、もう信二郎と会うことはないのだ。彼は強く胸が締め付けられた。

そのときだった。背後でドアが開いたように感じた。微かに、風が頬を撫でて通り過ぎる。

彼は振り向いた。

「ああ、信二郎……」

彼はソファから立ち上がり、身体を向けた。だが信二郎は消えていた。誰もいなかった。シェルターの通じるドアが僅かに開いている。

彼がソファに腰を下ろしたまま、首をまわして振り向いたとき、ドアのまえに信二郎が立っていたのだ。どこへ消えたのか。彼は身を翻してソファを越え、ドアを押してシェルターへの階段を走り降りた。

重い扉を開き、おそるおそる照明のスイッチを入れる。

信二郎の姿はなかった。そこには誰もいなかった。ベッドは乱雑に乱れたままだったし、室内はまえに見たときと同じ状態だった。

彼はしばらく立ったままで、室内をゆっくり見回す。そしてベッドに近づくと、シーツのしわを伸ばす。だがしわはすぐ戻ってしまった。

信二郎はここへ来て以来、ずっとこのベッドで寝起きしていたのだろう。地震のときにはここにいなかったのだろうか。もし被害に遭わなければ、ここに戻ってきそうなものだが、地震のあとにこのベッドで寝起きしていたかどうかは判然としない。

信二郎が生存しているのか、分からないのだ。だが大地震のあとに襲ってきた大津波はどうだったのか。この辺では津波が四〇メートル近く駆け上がってきたというではないか。そうだとすると、あのとき津波が絶壁を駆け上がってテラスを越え、テラスの信二郎を襲ったかもしれない。

そのとき、頭上で音がしたような気がした。反射的に、ドアに消えた信二郎の姿が浮かんだ。彼はシェルターを飛び出し、地上の家への階段を駆け上がった。

47

リビングには人の気配も人影はなかった。耕一郎は玄関のドアを開け、ポーチへ出る。

冷たい風が音を立てて吹いていた。一瞬、彼は信二郎が隣に立っているように感じた。彼は黙って庭へ降りていく。信二郎も付いてきた。ふたりは星ひとつない暗い空を見上げる。

あの夜のように、いま彼は信二郎と並んで暗い空を見ていると思った。キューバ危機の夜だった。ふたりは庭の片隅で、世界核戦争の恐怖に戦き、弾道ミサイルの飛来音に耳をそば立てていたのだった。あれからあらかた半世紀が過ぎている。

耕一郎と信二郎（進二郎）の双子の兄弟は、一九四五年生まれたのだった。その年の八月、米国は日本（広島、長崎）に立続けに原爆を二発投下する。ほぼ一週間後、日本が降伏して二度目の世界大戦争であった第二次世界大戦が終結した。

人類最初の世界大戦である一度目の世界大戦（第一次）は一九一四年から約四年間つづいた。死者・負傷者は三五〇〇万人（死者軍人八〇〇万人民間人六〇〇万人、負傷者二一〇〇万人）に達する。そして史上最大の戦争第二次世界大戦が一九三九年ヨーロッパではじまり、約二年後の一九四一年、日本が米国と戦争をはじめる。そして一九四五年に終結をみるが、第一次世界大戦の倍加する死傷者を出す。広島と長崎では、原爆一発の投

下でそれぞれ一〇万人にもおよぶ死者が出たという。

二〇世紀前半は世界がまさに戦争に明け暮れていたのだ。それでもまだ、人間は決して戦争に飽きることはなかった。

極端なことを言えば、第二次世界大戦が終結した次の日から、新しい戦争が始まった。そして二〇世紀後半には米ソの対立を軸とする東西冷戦が延々とつづき、今日に至るも、世界各地で大小の紛争や戦争がつづけられているのだ。

皮肉なことに、戦争で科学技術が飛躍的に発展を遂げる。そして資本は土地より科学技術、植民地確保より科学技術の発展に目を向けていったのだ。

究極の兵器といわれる原爆の開発によって、これまでの科学技術は一皮むける。近代科学技術が現代科学技術へと質的変容を遂げたのである。

一九五三年八月のソ連水爆実験後、突然、時の米国大統領アイゼンハワーが国連総会（一九五三年一二月）で「アトムズ・フォー・ピース（平和のための原子力）」を提案する。

これを受けて、原子力の平和利用の促進と核の軍事転用を防止する目的で、一九五七年に国連の専門機関として「国際原子力機構（ＩＡＥＡ）」が設立される。

これを契機に、軍事用原子力発電技術も民間へ払い下げられていく。爾後、世界で原子力の平和利用として原子力発電（原発）の開発が積極的に進められる。

日本でも一九五四年三月以降、原子力開発が本格化しはじめる。

こうして世界中で原発は建設されていった。ＩＡＥＡによると、二〇一〇年一月現在稼働中の原発は全世界で約四四〇基に上るが、日本では五四基だった。だが原子力大国の米国とソ連につづき、日本においても原子力発電所（原発）が炉心溶融の深刻な事故を起こし、大量の放射性物質を世界中にまき散らしているのだ。

それにもかかわらず、いまや、アイゼンハワー自ら危惧を訴えた「軍産学（議会）複合体」によって戦争経済がシステム化され、世界各地で紛争や戦争が繰り返されつづけているのである。そしてこの「軍産学（議会）複合体」は米国の金融資本、産業資本、軍需産業、政府、官界、議会、産業別利益団体、有名大学、学会、労働界、ジャーナリズム界、広告広報業界、退役軍人団体、各州地方の利益団体、宗教界等を巻き込みますます巨大化の一途を辿り、「効率性、完全競争、高成長」第一の自由主義経済システムのもとで「戦争」までをも貪り喰っているのだ。

またこの種の軍産官学複合体は米国に限ったことではない。世界の主要国はいうまでもなくその他の多くの国にもこの種の組織やシステムがつくられており、兵器の開発や改良はおろか、外国への兵器輸出なども手がけている有様である。

さらに、軍事技術の民間への払い下げを通して、新技術のグローバル化が進められていくが、軍事技術には本来的に地球環境への配慮を欠くものが多く、原子力エネルギーにともなう放射性廃棄物のように、新たな問題をうみだすおそれがあるのだ。

戦争のない世界をつくるには、戦争の主体と手段を取り除かなければならない。どうすればいいか。それには少なくとも戦争経済システムとそれを牛耳る「軍産学複合体」を解体しなければならない。それとともに、原爆を生んだような現代科学技術文明を徹底的に見直す必要がある。

だがこれは口で言うほど簡単なことではない。ではどうする。どうすれ

ばいいのか。

彼は信二郎に問い、自分に問いつづける。

48

耕一郎はサッカーボール型の家のなかに戻ると、大股でリビングを横切り、シェルター

への階段を駆け下りる。シェルターの広間の中央に置かれている大きなテーブルの椅子に腰を下ろす。

大きなテーブルには六脚の椅子が並んでおり、彼の対面にある椅子にはすでに信二郎の姿があった。だがなぜかその姿は時々大きく揺れて一部が消えたり、輪郭や色彩が薄くなったり濃くなったりするのだ。彼はそんなことに構わず、信二郎に向って話しかける。

「きみは『戦争のない世界』をつくれというが、どんな努力をしてもそれは難しいかもしれない。地球温暖化を防ぐために国連主催の国際会議が毎年のように開催されるようになってから半世紀近くなるのに、各国はなかなか合意できず、大気中の二酸化炭素（炭酸ガス）の濃度は毎年増えつづけ、収まる気配すらないではないか。これは一例にすぎない。かといって、このまま放置していたら、地球はどうなるか。そして人類は……」

彼は伏し目がちで話していたが、目を上げ、誰も座っていない椅子をしげしげと見る。ここに信二郎が座っていたのだ。一体、どこへ行ってしまったのか。知らず知らずのうちに、彼は信二郎との思い出に耽っていってしまう。

「いま、日本が戦争に巻き込まれたらどうなると思うか……」

ふと、信二郎の声を聞いたように思った。それが彼と信二郎との終りない対話のはじまりだった。

「日本か、それは……」

一瞬、彼は言いよどむ。彼の脳裏にいまなお放射性物質を排出している福島第一原発が浮かんだ。この事故でほぼ東日本全域が放射能に汚染されたのだ。それは一三都県におよび、三万平方キロ（日本国土の八パーセント）を超える広さだ。

これからも分かるように、日本の沿岸に点々と集中立地されている原発がひとたび事故を起こせば、日本国中が広範囲に放射能で汚染されてしまうことである。

もし戦争になれば、敵は当然、原発や関連施設をターゲットにしてミサイルを撃ち込むだろう。テロリストなら旅客機をハイジャックして突っ込もうとするかもしれない。そして　通常ミサイルで原発を爆破して原爆並みの戦果をあげようとするだろう。

日本にある原発（福島第一の事故前には五四基）が攻撃対象になれば、日本中に核爆弾を大量に投下されたと同じような高濃度の放射能汚染に見舞われることになるだろう。ちなみに、本州周囲の沿岸にはとくに多く、廃炉中のものを含めると四六基が立地されている。このほか、再処理施設などさまざまな原子力関連の施設や研究所が各地に散在しているのだ。

とにかく、今回の福島第一の事故で原発が極めて脆く、弱点を衝かれるとすぐメルトダウンして爆発することが明らかになった。それにどの原発にも使用済み核燃料が山積している。これは原子炉よりもっと危険なのだ。冷却用電源が遮断されれば、自ら崩壊熱で溶け出し、爆発を引き起こして

大量の放射能をばらまくことになるからだ。
戦争でなくても、日本の原発や再処理施設などには地震や津波が襲う可能性も残されているのだ。
日本は戦争してはならないのだ。事故も起こしてはならない。地震や津波の対策も忘れてはならないのだ。
原発が事故や戦争で原子炉のメルトダウンを起こせば、国土の広範囲が放射能で汚染されることになるからだ。大気を汚染し、水域を汚染し、土壌を汚染する。そして呼吸する空気や飲み水、食べ物が汚染される。こうして人間は何年何十年にもわたり、外部からと内部から放射能を受けることになる。体内へ入った放射性物質は骨や筋肉に蓄積されるとそこでずっと放射線を出しつづけ、被害が永続化するのだ。
「なんだと、日本全土に放射性物質が降り注ぐというのか。それでは戦争になれば、一億二〇〇〇万の日本人はどこへ逃げればいいのだ。放射能まみれになって死んでしまうほかないというのか。誰がこんなことをしたんだ。こんなことも分からず、日本列島の周囲の沿岸に原発を林立するとは、全く自殺行為ではないか……」
姿のない信二郎がまくしたてる。
「まあ、日本には平和憲法がある。戦争はしないことになっていたからね」
「じゃ、日本が先頭に立って『戦争のない平和な世界をつくろう』世界運動をはじめなければならないのだな……」
「でも地震や津波はそんなことにおかまいなく襲ってくる」
彼は福島第一原発事故を思い浮かべ、自嘲気味にシニカルな口調で言う。
「福島第一原発の深刻な事故か。でも十分な対策をとっていたら、防げたんじゃなかったのか」
確かに、せめて非常用電源を確保できていれば、深刻な事故に至らなかったかもしれない。それに加え、深刻な事故発生に際して、即応して適切な対策をとられなかったこともあって被害の拡大を招いたこともあるかもしれない。だが、土台、原発のシステムは巨大で高度過ぎて、すでに人間のコントロールの域を超えてしまっているということはないのか。もはや、原発はいくら人事を尽くしてもコントロールできないものではないのか。もしそうなら、このようなシステムの運用には危険が避けられず、それでも運用するのであれば、普段から危険に備え十二分に訓練し、事故時に十分即応できるようにしておくべきことだ。
「まあね。日本人は神話が好きだから『安全神話』にとっぷり浸かっていたんじゃないのかね。事故は絶対起こらないと決めつけていたのだろうし、もし、困ったことが起きても、『神風』が吹くと信じていたんじゃないの」
「まさか……。だが戦争は別だ。日本には平和憲法があるからといって、敵に弱点をさらし、隙を見せるようなことしてはならない。隙を見て戦争を仕掛けてくる輩が多いからな」
「原発事故を例に挙げたが、これに限らない。原発のように、現代科学技術がつくりだすものは、利用すれば大きな利益をうるがことができるかもしれないが、一度事故を起こすと取り返しのつかない被害（損失）を発生させるものが多い。ここが問題なのだ。だから、ととえ戦争のない社会をつくることができても、この問題を放置しておけば、現代科学技術文明のもとで、地球は人類ともども自爆して果てることになるだろう……」
「なんだと。やはりそういうものか。だから、現代科学技術文明を見直さなければならないということか……」
「これは現代科学技術文明が飽くことなく巨大化高度化大量化を目指して

きた結果だ。この世界には、すでに人間がコントロールできない巨大な高度システムが大量に存在するのだ。たとえば、大都市には交通輸送網、電気ガス、上下水道のライフライン、物流システムなどの巨大システムがうようよしている。そして大量のエネルギーを浪費し、さまざまな資源を貪り食っている。そしてこれらがすでに限度を超えて巨大化高度化大量化しているところが大問題なのだよ。なにしろ、この地球には限られた大きさしかないからね……」

「ふむ……」

「限りなく大きいと見える地球にもその容量は限られているのだ。その証拠に、もう一度、地球温暖化を例にとると、人類が化石燃料を使うようになって大気への二酸化炭素の放出が増して大気中濃度が年々増加してきている。地球の容量が限られているところに二酸化炭素を放出しつづけているからなんだ。その結果、地球が温暖化しはじめてんだ。これに対してまだ異論を唱えるむきもあるがね」

「そういうことかね。それで……」

「地球が温暖化してきているため、年々異常気象が増え、世界各地でさまざまな被害が急増している。台風、豪雨や強風、干ばつや熱波、異常高温ばかりではなく、海面も上昇して洪水や浸水の被害も甚大なものになっている。そればかりではない。海面上昇はさらにさまざまな悪影響をおよぼす。海岸の浸食が進み、生物生態系の破壊が進む一方、農地が水没したり魚場を失って生きる術を奪われるものが続出する。さらに、気候にも影響をおよぼし、温帯が熱帯になるとか、気候帯が変化するほか、地球の自転にも影響をおよぼすし、地震を誘発したりする。このようなさまざまな悪影響を世界中の人びと被ることになるが、これらの被害（損失）合計と全世界の化石燃料を使う利益とどちらが大きいと思うかね。地球温暖化のもろもろの被害（損失）のほうが、トータルするとその利益よりも何倍何十倍何百倍も大きいんだよ。それもその被害者には高齢者や幼児、病弱者、貧困層などの社会的弱者が圧倒的に多い。そのうえ、社会的弱者には発言権がなく、泣き寝入りなんだね。というより……」

「……」

「いいかね。現代科学技術がもたらす利益も大きいが、不利益（損失）もそれに劣らず大きいのだ。そしてそれが年々拡大傾向にあるということだ。それに忘れてはならないことは、利益は一部の社会的強者が独占（特許権、使用独占権などで法的保証等や夏物の販売量が増えるとか）するのに対して、不利益（損失）は社会的弱者に広くばらまかれて泣き寝入りさせられているということだ。その結果、利益層と不利益層との格差をさらに広げてしまっているのだよ。現代科学技術文明における社会・経済のシステムには、貧困層（弱者）はあくまで貧困に、富裕層（強者）はさらに金持ちになる構造が組み込まれているということだ。それにときの政治もそれに加担しているというべきかもね……」

「うむ……」

「現代科学技術文明のもとで、都市化が極端に進み、世界人口の半分以上が大都市に集中しているが、このことも強者弱者間の格差拡大に寄与しているんだな」

「これでは強者が弱者のうわまえをはねているようなものだ。利益を享けるならそれに伴う不利益（損失）をも負担すべきだ。こんな不正義が放置されているのに、『戦争のない世界』もないか。こんなやつは死罪に値する……」

信二郎の激しい憤慨に、彼はふと母を思った。母はいまなお戦争の側にいるのではないか。

「このような利益追求次元の問題よりも、いまや、現代科学技術文明のもたらす不利益（損失）のほうがはるかに危険になっているのだ。第一に、現代科学技術文明の巨大化高度化大量化に応じてそれがもたらす不利益（損失）も巨大化高度化大量化しきているからだ。これによって地球そのものがパンクして地球全体が自爆することにならないか心配なんだ。なにを寝ぼけたことを言うかと思うかもしれないが、その兆候はすでにあるのだ。地球温暖化がそうであるし、放射能汚染もその一例だ。米ソなどの原爆開発における核実験で地球上はかなり放射能で汚染されてしまっているはずだ。これに原発事故によるものが加わる。それに二〇世紀後半から問題化してきたもろもろの地球環境問題だ。地球は巨大化高度化大量化する現代科学技術文明によってエネルギー資源は浪費され、鉱物資源は貪り食われ、森林や草原は恣に開発され、土壌はすかっり痛めつけられて砂漠化していく。海洋も同様だ。現在、地球環境はいたるところで破壊され、汚され放題の有様だ。そして地球上の生物生態系はいたるところで綻び、見る影もない。この半世紀に深刻化してきた地球環境問題は巨大化高度化大量化をつづける現代科学技術文明が地球へ放出放置するマイナスの結果であり、これはまさに、これに対する地球の悲鳴なのだ……」

彼は一呼吸をして、つづける。

「つぎは第二の問題だ。地球は本来有限なものだよね。その容量も有限なことはいうまでもない。これに対して、現代科学技術文明は無限指向だ。だからその巨大化高度化大量化も無限につづけられる。だから現代科学技術文明の巨大化高度化大量化がつづけば、いずれ地球の限りある容量が現代科学技術のもたらすさまざまな不利益（損失）で満たさてしまう。もしこれが満杯になったら、人類の生きる基盤はどうなるか。生活の基盤は失われるだけで済まされない。生存が脅かされ、人類の存続さえ危ぶまれることになるだろう。そしてその時間はあまり残されていないのだ。たとえ利益であっても、満杯になった地球では、現代科学技術文明のもたらす利益ですら、地球の有限の壁に衝突して不利益（損失）へと転化するからだ。このような仕組みのもとで、限りなく巨大化高度化大量化をつづける現代科学技術文明は、ある日、突然、地上を人間の生存に不適な場所に一変させてしまうのだ。現代科学技術文明の全利益が全不利益（損失）へと転化し、これと従来からのもともとの不利益（損失）とが相俟って、地球が一瞬にして人間にとって生存不能のいばらの世界に変貌するのだ。そして人間は地上から閉め出され、立ち所に人間社会は崩壊してしまうだろう。そして人類は滅びていくことになるのだ」

「……」

「現代科学技術に携わる人びとはこうなることを知ってか知らずか、いまなお、『葦の髄から天井を見る』ごとく自分の極狭い専門分野しか見ようとせずに、専門科学者あるいは専門技術者として、その巨大化高度化大量化のための一歯車と化し、せっせと地球の破滅を手助けしているのだ。地球がパンクすれば、人間社会も当然パンクすることになるのに、なぜ人間がこんなことをするのか。いつ地球全体が見えなくなったのか。それとも誰かがそう仕組んだのか。それは一体誰だ。同じ人間がどうしてそんなことをするのだ。そんなことをするやつは、人間は人間でも、人間の姿をした悪魔にちがいない。このような状況のもとで、いかにして『戦争ない平和な世界』をつくればいいのか。いや、こんなやつがうようよしているこ

の世界に果たしてそれをつくることができるのか。たとえそれができたとしてもどんな意味があるというのか。新たな対立が生じ、戦争を引き起こすことになりやしないか」

彼は顔上げ、じっと信二郎を見る。だがいつのまにかそこには椅子だけで、信二郎の姿はなかった。彼は首をまわし、信二郎の姿を探した。

彼は必死に探すが、どこにも信二郎の姿はなかった。信二郎の息づかいが聞こえないか、彼は目を閉じて耳を澄ます。

遠くで、微かに、岩場に打ち寄せる波の音がする。シェルターの扉が開いているらしい。微かに潮の匂いがする。

彼は潮の匂う海からの風を胸一杯吸い込んだ。しゃべり疲れたのか、彼は、つい、うとうととして目を閉じてしまう。

草木のない荒れ地で、サラブレットなにか、格好の良い馬が全力疾走している。よく見ると、馬の目に前に人参がぶら下がっていた。人参は馬に括り付けてある釣り竿のような細い棒の先から糸で垂らされているらしい。馬は人参を食べようと一歩前に出るが、人参はそれより早くさらに一歩分前へ出る。馬は人参を取るためさらに一歩進む。そして馬は口を突き出し、歯を剥き出すが、人参には届かない。馬はひたすら気が狂ったように夢中で走りつづける……。

「だからといって、お前は、地球が、そして人類が滅びていくのを手を拱いて見ていようというのか」

頭上から、信二郎の大きい声が響いた。

彼ははっとして辺りを見回す。信二郎の姿もなければ、人参をぶら下げた馬もいなかった。

彼は夢を見ていたらしい。だが彼の目に人参をぶら下げて全力で疾走する馬の姿が焼き付いて離れようとしなかった。

エピローグ

耕一郎はシェルターに閉じ籠り、信二郎を待った。だが何日待っても信二郎は姿を見せなかった。

東京に戻ったときには、すでに、安里と母は米国へ向っていた。

彼はもう一度母に会いたかった。だがこころのどこかで会わずに済んでほっとしていた。信二郎が生まれて間もなく手放した進二郎だったことを母に知らせずに済んだのだった。

彼は信二郎のようにシェルターに籠り、毎日を過ごした。そして毎日のように、夢で見た人参をぶら下げて走る馬のことを思い出した。

馬は人参を食べようと、懸命に前に出るが、どうしても届かず、食べることができない。さらに前へ出る。でもだめだ。馬はただ走りつづけるほかないのだ。

この馬のように、永遠に手の届かない「戦争のない世界」を求めて、歩きつづけるほかないのだろうか。かといって、手を拱いて人類が滅びるのを座視しているわけにはいかないのだ、と彼は自分に言いつづけていた。

だがどうすることもできなかった。ただ毎日を波の音を聞き、潮の匂いを嗅いで過ごしていた。

彼は信二郎の手紙にあった「限界集落」を思い出し、付近の集落を訪ねた。

海岸べりの集落は津波によって海にさらわれていったのか、集落の跡もない全滅状態だった。人家はもちろん、人影すらなかった。

もし信二郎がその当日ここを訪れておれば、集落の人びとともに、確実に海にさらわれていったことだろう。信二郎はどこへ行ったのか。

突然、彼の脳裏で、あの人参馬が走り出した。

その日は、朝からシェルターの海に突き出たテラスに椅子を持ち出し、彼はじっと海を眺めていた。

朝の陽光を受けてきらきら輝く海面が刻々と表情を変えていく。冷たい潮風が頬を撫でて吹き抜ける。

ふと、海面が盛り上がったように見えた。隆起した海面が次の瞬間沈み込み、波となった。波は白波となって岸へ向う。

ふたたび、目の前に、人参をぶら下げて暴走する馬が現れた。そのとき、彼は一瞬にしてすべてを理解したのだった。

あの人参馬は現代科学技術文明という馬場のなかで走り回る「軍産学（議会）複合体」という名の馬だったのか。競走馬には前方しか見えない目隠しを付けることがあるが、この馬に乗る騎手も同様の目隠しを付けた専門科学者であり、専門技術者だった。人参はノーベル賞などの各種の賞であったり、地位や名誉あるいは権力だったり、ひとによってさまざまな褒美なのかもしれない。

この馬のオーナーは誰なのか。調教師はどこにいるのだ。

いや、暴走しつづける人参馬が現代科学技術文明ではないのか。そしてそれに乗る騎手は手綱捌きの知らない専門科学者であり、専門技術者なのだ。馬を調教するのが「軍産学（議会または官）複合体」か、オーナーは権力者やエスタブリッシュメントか、それとも……。

とにかく、彼らを捜し出して説得し、馬の暴走を止めさせ、二度と暴走

しないようにすることだ。

現代科学技術文明はいまなおさまざまな新たなターゲットに向って暴走しつづけている。たとえば、ＩＴ技術、ＡＩロボット開発、ナノ技術、遺伝子組み換え技術などなどだ。そしてこれらはさらなる現代科学技術文明の巨大化高度化大量化を目指す。だがこれによってなにがもたらされるだろうか。

ＩＴ技術から生み出されたコンピューターやスマホによって造り上げたネット王国はいまさまざまなウイルス感染症が蔓延し、絶え間ないサイバー攻撃の曝されているが、さらに量子レベル素粒子レベルでこれを超える技術開発を目指すのだろうか。ＡＩ（人工知能）ロボット開発ではウルトラ天才ロボットを生み出し、人類を奴隷として、地球をそして宇宙の征服を夢見ているのではないか。ナノ技術ではナノレベルでの物質合成方法の開発と新物質の合成だ。それはさらに量子レベル素粒子レベルを目指すだろう。これで一体なにをつくりだそうとしているのか。あの「反物質」か。遺伝子組み換えでは新生物や新ウイルスの創造か。それは母たちがやっていたことの延長なのか。さらにさまざまなことが……。

彼にはこれらの技術開発がすべて軍事用技術に通じるものではないかと思えて仕方がなかった。これらの技術自体がもともと原爆開発のための「マンハッタン計画」のもとで培われたものと無関係ではないからだった。

いや、あの「人参馬」はとっくにこれらの技術から究極の兵器である原爆を超える爆弾を妄想しているのではないか。それはどんなものか。まさか「反物質爆弾」ではあるまいな。

彼はシェルターを思い浮かべ、ひとり机に向い、宙を見ていたにちがいない信二郎を想った。

現代科学技術文明の暴走の果てに、地球は破壊尽くされ、すっかり汚染してぼろぼろになってしまうだろう。そしてついに廃棄物と化した地球がブラックホールに呑み込まれ、消滅することになるかもしれない。

これをくい止めるために、彼は信二郎の求める「戦争のない平和なそして幸福な世界」構想を一日の早く仕上げ、世界に発信しなければと思うのだった。

（第三話　完）

この物語はフィクションであり、登場する人物や団体等は実在するものとは一切関係がありません。

地球の箱船を求めて　第三話　暴走する現代科学技術文明
生野以久男
二〇一六年五月一五日第一版発行
（c）Ikuo Ikuno 2016
発行所　キノコプレス
代表　森岡正博
所在地 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島二―五七九―一五　早稲田大学　人間科学部　森岡正博研究室
連絡先　http://www.lifestudies.org/kinokopress/mail01.htm
本文レイアウト＋デザイン　生野以久男＋森岡正博
本書およびＰＤＦファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。
ＩＳＢＮ　なし